

年中行事具 I

迫 田 加 代

1.はじめに

今回の調査で初めて私は種子島の地に足を踏み入れた。そういう土地を調査することは、不安でもあるが十分楽しみであった。年中行事というテーマで有形調査するのは、また初めてでありとまどいもあった。南種子町には今なおどういった行事が残っているのか、そこには人々のどんな気持ちが込められているのか、南種子町の自然や人の間で育まれてきたのはどんな行事か、などを少しでも理解できたら…そんな気持ちで調査に臨んだ。

至らない点など多いが、調査できたことを以下まとめていきたいと思う。

2.概観

◎正月行事

(1)水迎え(1月1日)

①島間(大久保)

一番鶴が鳴く頃、二人ぐらいで水汲みに行く。ダイダイ、ユズリハ、米を川に入れて、「年とり男が水汲み初めをする時は、水を汲まずに黄金汲む」といってタンゴ(桶)に汲む。この水で顔を洗うと麗麗になると。また、以前はしなかっが、初詣でをするようになったという。

②西之(崎原)

主人が井戸に汲みに行く。ホトケサマにもあげる。

③平山(中之町)

カワイカワイと呼んでいる。一番鶴が鳴いたら、米、ユズリハ、餅を持って井戸に行き、「年男が年改まって初水を迎える時には、

水を汲まずに黄金汲む黄金汲む」といって水を汲む。川主(井戸の責任者)の家に集まって、祝う。また、同時にチナビキも行う。これは稻の豊作を祈るもので、皆で稻が穗垂れて風になびく様を摸した行事。西の風が吹いたといっては、東側に傾き、東風が吹いたといっては西側に傾く。完全に倒れるのではなく、ギリギリのところまで傾くのがよいという。

④西之(野尻)

元旦の夜が明けないうちに、米を井戸に供えて水を汲んだ。内容的に、どの村落もそれほど遅いは見られなかった。水道が普及してからはやはり薄れていっている。汲みに行く人が決まっている所とそうでない所があった。また、大抵は家ごとにしていたが、向井里では川主の家に集まっていたというのが興味深く思われた。

(2)日起こし(1月2日)

一番鶴が鳴いたら、日起こしは始まる。青年たちが、「お祝い申そう」といって各家を2~3人ぐらいうまわる。各家では、臼を逆さにして、その中に米を盛った升と小さな餅を入れておく。その餅は、塩永(雨田)では奇数個、島間(大久保)では5個入れるのだと聞いた。この臼は、松などでできた木製のものであった。臼にしめなわをまいておく。また、平山(仲之町)で杵にユズリハとモロバをしめなわでくくりつけておく、という話をきいた。そうして、餅と米をだして青年が臼でつくまねをする。この時の文句を2ヵ所で聞くことができたので紹介しておく。

※島間(大久保)

年取り男が米つき初めをするときは

東こうさにたちたる おのえの松で臼き
りて
そのえらえらで杵きりて
とつとりとほんのとりととびあわせ
とびやわたらんそのとき
せんとくとくと まんとくとくと
まんとくとくと とくとくと
つかせたまえよ このいせごめを
平山（仲之町）
年男がとしらたまりて 初臼おこすと
きには
東こうさのみねにたったる おのえの松
で臼きりて
そのえらえらで杵きりて
ひとりねつけばせんごくつく
ふたきねつけばまんごくつく
みきねつけばかぎりなし
このいえのふっさきをつきまねく
さっさつけつけ いしはちごめ
初めの方はほとんど同じだが、後半部が違
ってきている。こういったことをいいなが
らつくふりをする。終わると、臼にいれて
いた餅のいくつかを青年がもらう。それを
公民館に持ち寄って、雑煮などして食べた
という（平山 仲之町）。ウスカエシという
所もある。不幸があった家はやらない。と
西之（野尻）で聞いた。

(3) 船祝い（1月2日） 西之（野尻）
2日の朝に、フナダマサマをまつてある
船主の家に集まって、お酒を飲んだり御馳
走を食べたりしてお祝いをする。現在では、
公民館でやっている。フナダマサマは小さ
なお宮にまつられているという。

(4) 網祝い（1月3日） 西之（野尻）
3日の朝行われる、毎年6月頃お座に来た
トビウオやいわしを捕りに、島間の沖や屋
久島に行く。半月位かけて漁をする。網を作
っている人たちも総出である。2隻一組とな
って漁をする。以前は浦役員を一年交代で決めていた。その役員が網祝いの日は
負担して、ごちそうを食べたりする。漁に

使う網に、酒やモロバ（ユズリハ）をしい
て三段重ねの餅をのせて、その上にダイダ
イをのせたものを供える。お酒は、その後
で皆でいただく。

(5) クサイモン（福祭文）

①茎永（雨田）

1月7日の晩に、青年が家々をまわり音頭
をとって唄うと、小・中学生の子ども達が
後をつけて唄う。家主は、お礼として餅を
渡した。各家をまわり終えると、あらかじ
め集まる家を一軒きめてありそ家の間に集ま
る。この家は、大抵新築の家であった。そ
こで、料理などを青年達にふるまつた。ヒ
キモヤイと言うそうである。焼酎や米一升
を持ち寄っていた。なお、クサイモンの時
の歌詞や茎永宝満神社の御田植え祭の時
の歌詞などは、雨田新七氏がまとめている。ま
た、シイの木にマテの木、松、竹、ユズリ
ハを束にしてたてた門松に、また、14日には
掲げたダンゴ（餅）を柳の枝などにさし
たものも飾っておく。すると、子どもたち
がそのダンゴの付いた枝を持っていく。家
の主人はそれを承知の上であるが、わざと
持っていく子どもを怒鳴る。そして子ども
が逃げていく時に転んだら、大豊作になる
と言っていたという。

②島間（大久保）

1月7日に今でも行っている。

③西之（崎原）

シイ、マテなどの木をとってきて、門に
松などと両側にたてておく。大人が唄い、子
どももあとをつけて唄い、各家をまわる。

④平山（仲之町）

現在でも行っている。隠居の家には、頼
めば来るかもしれないがとりたてて来るこ
とはない、ということだった。不幸のあつ
た家は門松をたてないので、それを目印に
して各家をまわり、不幸のあった家は避ける。
また、以前は青年団が行っていたが、人
数が少なくなつてからは年齢にこどわらな
くなったという。

(5) 西之（野尻）

現在でも行っている。青壯年が何人かずつ各家をまわる。まず、一人が玄関に行って「祝いもうそう」という。戸は10センチ位あけている。そして門松の所から「年頭の御祝儀申し上げもうそう」と声をかけてから、クサイモンを祝う。終わると、「年頭の御祝儀申し上げもうした」という。すると家の人人が「ありがとうございもうした。うちおはいられ、おこめあげもうそう」といふと青壯年の人たちが「ありがとうございます」と返す。實際におこめのやりとりがあるわけではないという。

また、門松に枝にダゴ（もち）をさしたものや子どもたちが持っていくことが許されている。

(6) ニサーイリ（二才入り）

クサイモンの晩に、15才になったものが青年の仲間入りをする。15才になった青年の家では、ごちそうを作つてお祝いをする。親類や村落の青年たちがその家に集まる。そして先輩の青年たちによる「めでた節」や持ち前の芸の披露などが繰り広げられる。
※めでた節

1. うれしゅうめでたの 若松様よ
枝も榮える、葉も繁る
2. またもめでたの おもこたかのて
すえはつるかめ ごようまつ
3. みねのこまつに いなづるか たに
のいわほに かめまいあそぶ

(7) 錫入れ

① 基永（雨田）

1月4日に田の錫入れをしていた。少し耕して、餅、酒を供えて豊作を祈った。ご飯をいちご葉に乗せてあげたりもした。

② 島間（大久保）

ここでは田と畑を別けていたという。

大晦日の晩に床に餅を設けて供える。焼酎（ゴスイ）を入れてユズリハの葉でふたをしたカンビン（燐瓶）、お米をついでしめ

なわをしめた御茶碗、饅頭みたいな形で上をつまんでとがらせた掌にのるくらいの大さきの餅、それぞれを田と畑用に用意して供えた。

まず4日に畑に錫入れをした。錫には床に供えていた餅をユズリハでくくりつけ、畑に行き、同じく供えていた米とゴスイを畑にまいて錫入れをする。マツル、といっていた。同様のことを、今度は11日に田で行う。

(8) ホラレヒキ（牠垂れひき）

島間（大久保）では、14日に稻の祝いとしてしていたらしい。また西之（野尻）でも14日に今年も豊作であるように、と仏壇の両脇に稻の束をさげておき、それを使ってホラレヒキなるものをしたそうである。いずれにしても、ずいぶん昔にしていたが長らくやっていないという。大久保では昔話として聞く位なものだということだった。

(9) 農具類の祝い

① 基永（雨田）

14日か15日に錫、鉈、鎌をムシロを敷いた上に並べて、かしわの葉にご飯をついで道具に供えた。今ではしない人がほとんどだという。

② 島間（大久保）

大晦日の晩に鎌や錫などをまとめて、餅をそなえた。

③ 西之（野尻）

錫、鉈、鎌、ヨキをまとめてウラジロ、ユズリハをつけてしめなわでくくり、餅を3つさす。15日の朝、ご飯をいちごの葉について、ひとつそなえる。

(10) ダゴサシ、カーゴマー（蚕舞）

① 基永（雨田）

14日に柳の枝に餅を小さく切ったものをさす（タゴサシ）。その後から20日位までの間にカーゴマーを行う。

② 島間（大久保）

この辺りではダゴサシはほとんどせず、ま

たカーゴマーもしないという。蚕の養殖をあまりしていなかったという。

③西之（崎原）

家の各隅に柳の枝にさしたダゴをさし、また門松にもさす。カーゴマーを踊りに来た人はその枝を用いて踊るという。門松のダゴを子どもたちが取りに来ると、水をかける。子どもに水がかかると元気になるといわれている。

④平山（仲之町）

14日に現在でもしている。ダゴをさした枝をテースバシタ（亭主柱）、カンサマ（神様）、シンギョウバシタ（門松の基本的なもの）のそれぞれにさす。シンギョウバシタにさしたもののは、子どもたちが持っていく。

カーゴマーは、男の人が女装して家の玄関近くの柱にさしたダゴつきの枝を持って踊る。その時、もう一人アバクイというひょうきんな踊り手もいて、一緒に踊る。踊り手は家々をまわる。

⑤西之（野尻）

餅をついて、コヤスギの木にさして、14日の晩にテイスバシラ（亭主柱）と家の四方の隅の柱、神棚、火の神にそれぞれさす。火の神などには一本枝にダゴを2、3個さしたものと2本ずつそなえるという。

（11）正月の終わり

20日にだいたい正月行事は終わりを迎える。飾り物、門松などをこの日にとりはずすという。

◎礼言い

①茎永（雨田）

礼言いは、米2升、焼酎2升を持って親元などにあいさつていくという。タノミノセクの時は、お嫁さんの親が婿方にあいさつしていく。

②島間（大久保）

正月、5月、9月はアライトシ（災難の多い月）だから、実家にあいさつしていく。米、焼酎を持っていく。

③西之（崎原）

親元にごちそうを作っていたり、焼酎や米を持っていく。墓参りもする。

④平山（仲之町）

盆と正月には、実家の親元や養い親のところに米や餅をもって、あいさつしていく。

◎町祈禱

平山（仲之町）

正月、5月、9月は厄月だから月はじめに祈祷する。神主さんをよんで、おはらいをしてもらい、その後飲み方をする。輪番制で準備係を担う。

◎3月の節句

①茎永（雨田）

桃の節句ともいう。墓参りをしたり、親元にあいさつに行く。旧暦でしていた。

②平山（仲之町）

女の人のお祝い。ツツノモチ（よもぎのあんこもち）やツワブキの料理をつくったりする。

③西之（野尻）

桃の花をお墓や仏壇に供える。また、よもぎもちを作る。女の子は集まって遊ぶ。旧暦の3月3日についていた。

◎熊野神社参り

①茎永（雨田）

4月3日と6月15日の2回行っていた。歩いて行く人や、馬耕用の馬に鞍をつけて乗っていく人もいた。その道々にはおみやげを売る店が並んだという。また、熊野神社入り口辺りで、中種子町、南種子町、西之表市の青年たちが相撲をとった。

②西之（崎原）

女人も処女会で連れ立っていた。白い足袋をはいていくものだったという。

③西之（野尻）

4月3日の朝まだ暗いうちから、わらじをはいて歩いていった。弁当を持っていった。1市2町の奉納相撲があった。

◎慰靈塔祭り

①西之（崎原）

3月19日に和尚さんを呼んでお経をあげてもらう。その後、慰靈塔の前で飲み方をする。区長さんが段取りをする。

②平山（仲之町）

崎原同様のことをする。秋には遠族だけのものがあるという。

◎茎永（雨田）での春の行楽

旧暦の4月頃、竹の子をとってきて、それを煮て、お菓子などと持つて多くの人と連れ立って海に行った。ナガラメやアワビのようなものを取ったりして春の一日を楽しんだという。

◎5月の節句

①茎永（雨田）

親元に焼酎や米を持ってあいさつに行く。

②平山（仲之町）

旧暦5月5日。モウソウダケの皮にあらったモチゴメを入れて包み、アクを入れて4~5時間たいたるものや、ツノマキを作つて祝つた。また、オニが来ないように、菖蒲の花とよもぎを軒先につるす。

③西之（野尻）

ツノマキを巻いたり、餅をついたりする。薦屋根の軒先に、よもぎと川菖蒲をさしたり、お墓にもあげた。今ではお墓や仏壇にあげるだけだという。

◎六月灯

茎永（雨田）

旧暦6月。灯籠をつけたり、宝満神社などで祈祷をした後焼酎を飲んだりしていた。戰前は、とりたてて出店や余興はなかったという。

◎彼岸

西之（野尻）

彼岸花を取ってきて、お墓と仏壇にあげる。お坊さんを呼んでお経をあげてもらう。また、ヒガンダゴ（彼岸団子—よもぎのおもち）を作る。



彼岸花

◎ウマヤキ（馬焼き）

師匠（和尚）さんか神官を呼んで祈祷をした。今では公民館ですが、以前はウマヤキの場所があり、そこでしていた。馬の脚を焼いて、けがをせず馬が健康であるよう祈祷したものだったという。

◎田植え上がり

①平山（仲之町）

ウマヤキというそうである。ホイトーという馬による田の地ならしのようなことをしていた時のなごりだという。鍬を使うようになってからは、ホイトーを知らない人も多いそうである。

②西之（野尻）

サノボリという。田植えの後、家族寄つてカシワや煮染めを食べる。

◎盆

①西之（崎原）

お墓参りをする。お寺では、盆踊りなどが催される。カミサマは縁側から入ってくると言われ、縁側の軒下の隅に精霊棚（竹を4本たてて棚をつけたもの）をつくる。ミズノコ（芭蕉の幹をこまかに刻んだもの）をあげる。盆の間中毎日朝、昼、夜と供え物を膳に盛って供えるという。

②平山（仲之町）

嫁いだ娘や兄弟など親族が集まって、墓参りをして飲み方をした。仲之町は神道が多く、神道では精霊棚は作らないという。精霊を迎える、人數分お膳に供え物をした。す

いかや菓子、マキ（まきの葉に米の粉で作った）団子を包んで、い草でぐるぐる巻いて作り一日軒にさげておき、翌日ゆがいたもの）など。また、共同作業もした。井戸の周りの掃除など。お盆の初日位に女人たちがササゲを煮て持ってきて、お茶をのむ。また日常使っている皿等を洗う。

◎9月の節句

①西之（崎原）

親元にツノマキや餅を作つて、持つていくものだった。

②平山（仲之町）

旧暦9月9日。平山豊受神社で、各集落から踊りを奉納する。春に豊作祈願をしてから、秋の願成就の祭りにはそのお返しとして奉納するのだという。その時は、母親たちが、キンダメジュウに菓子やおにぎりなどをつめて、担つてやってきたという。また、この日はツノマキも作る。仲之町の踊りは、太鼓と鉦を使う。寺踊り、さんご踊り、佐渡と越後という踊りを踊る。以前は青年で踊っていた。厳しい練習があったという。太鼓の人は赤い羽織みみたいなものを身につけて踊る。昔はよく鳴るというところで、鏡をつかっていたという。

◎十五夜

①茎永（雨田）

藁で綱を練つて、綱引きをする。夕方くらいから、大人と子どもが一緒になって準備する。飲み方もした。以前は相撲はとらなかつたという。

②平山（仲之町）

学校で綱を作つて、綱引きをしたり相撲をとつたりした。

③西之（野尻）

旧暦8月15日。青年たちが綱を作つて、綱引きや相撲をした。ツノマキをお盆に積み上げて、スキなどと一緒に縁側にだしして、月に供えた。

◎報得の会

平山（仲之町）

廃仏毀釈が行われて、報徳の石というのがたてられた。社会の道徳などを示し会う会で、いろいろな道徳上のきまりがあった。月に一度集まりがあった。公民館ができる前くらいまであったという。

3. 民具解説（年中行事）

（1）しめなわ

①上中（西之町）

河野 泉

河野泉さんが作ったもの。氏神様に飾っていた。モロバ（ウラジロ）、ユズリハ、ダイダイ、白紙に包んだ木炭、赤と白の布のあわじ結びにしたもの、などで飾つてある。



②上中（西之町）河野 泉

これも泉さんが作ったもので、公民館に飾つていた。飾りの内容は上のものと同じであるが、やや大きめになっている。いずれにしても、普通は20日には処分するが、今年はたまたまとつていたという。



③上中（西之町）

泉さんが、頼まれて作ったもの。神道の家の神棚にはるという。



(4) 上中（西之町）

⑨のものよりずっと大きなしめなわで、床にはるという。これに神官が御弊をはる。どちらも左三つ目である。



(2) カンビン（壺瓶）

島間（大久保） 西園ハツエ

大晦日の晩、床に田と畑、それぞれの鉢入れの時に使う米、焼酎、餅をお膳を設けて供える。カミに対してあげる焼酎をゴスイというそうであるが、それをいれておくのが、このカンビンである。また、お客様に対しても使うという。高さ 12.5センチ、口の直径 4.6センチ、その直径 4.4センチ。縁を帯びた白地に、字が書いてある。陶磁器である。

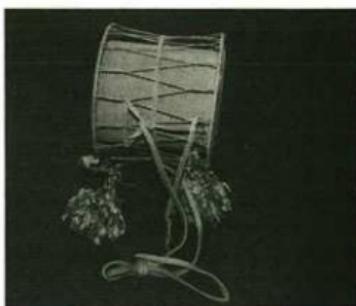


(3) イレコ（太鼓）

①上中（西之町）

河野 泉

種子島大踊り、カーゴマー、盆の精靈踊り、願成就祭り（ガンジョウジマツリ）などの時に使うという。使用する時は側面の紐をきつくしめて、響きをよくする。そして布をまく。首から布紐などでさげてつかう。このイレコは、泉さんが昭和55年頃作ったものでさげるのには、ネクタイを利用している。イレコの胴体はセンダンの木をくりぬいたもので、張る皮は、牛、鹿、山羊の皮だそうである。ばちの把手はユス（イス）の木で、色紙のポンポンがついている。糸は麻。イレコの直径 19.5センチ、幅 17センチ、ばちの把手の長さ 18センチ、全体が 32センチ。イレコは紫の布でくるんであった。



イレコ本体



踊る時用に素の布をまいてある

②平山（仲之町）

公民館

イレコの直径39.5センチ、幅29.5センチ、侧面に「平山仲之町No.4」とかいてある。ばちの把手の長さ20センチ、幅2センチ、飾りのポンポンの全長9センチ、色紙でできている。



(4) カンモンゾーリ

①上中（西之町）

河野 泉

大人用のもの。踊りをする時や、盆、正月に作ってもらい履いていた。普段はこしょに紙を巻いていない。以前は、鼻緒は山芙蓉をたたいて、その繊維を利用したという。現在泉さんは、ロープの糸をほどいてつかっている。丈夫だそうである。カンモンゾーリはめでたい時に履くものだから、鼻緒の結び目が下にでている。葬式用の草履とは鼻緒の造りが逆になると言う。泉さんは、藁をつかつていろんなものを作っています。また自分なりに研究もしている。長さ20センチ、幅8センチ、厚さ1.5センチ。

②上中（西之町） 河野 泉



こしおに白い紙がまいてある



ゾウリの鼻緒のつくりの違いを説明する河野泉さん



ゾウリの鼻緒のつくりの違いを説明する河野泉さん

子ども用のもの。子どもが踊りをする時にはく。こしおに赤と白の布を藁の上から巻いている。これも製作は泉さんである。長さ18センチ、幅7センチ、厚さ1.5センチ。



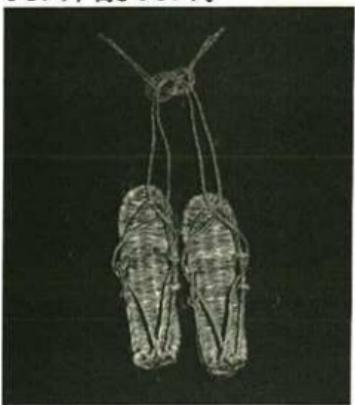
こしおに赤と白の紙を交互にまいてある

(5) 草 鞋

①上中（西之町）

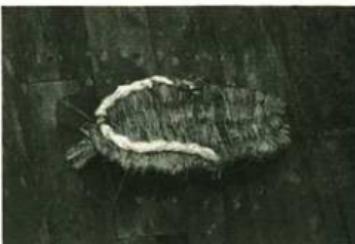
河野 泉

昔逸出をするときにはいたというもの。これは泉さんが作ったもの。ロケットマラソンの前のアトラクションのときに、鉄砲隊の姿に扮した人が履くのに使われ、泉さんが頼まれて作っている。長さ 25 センチ、幅 8 センチ、高さ 4 センチ。



②平山（仲之町） 公民館

こしおが白い紙でくるまれている。イレコや姫とともにあったので踊りに使うのではないだろうかと思われる。長さ 22.5 センチ、幅 11 センチ、厚さ 2.5 センチ。



(6) 姫 平山（仲之町）

公民館

厚さ 2 ミリの鉄板を円形に切って、中心に釘をたてて、釘に布をまきつけてある。直径 13.5 センチ、高さ 10.5 センチ。付属品の長さ 17.5 センチ。



(7) 民謡集 墓永（雨田） 雨田 新七

宝満神社の御田植祭の歌やクサイモンの歌など、様々な歌を手書きしてある新七さんお手製のもの。縦 26 センチ、横 19 センチ、厚さ 6 ミリ。平成 2 年 5 月作成。





(8) モロブタ 島間（大久保） 西園ハツエ
お正月についたお餅などを入れる。木製。
縦30.5センチ、横100.5センチ、高さ8センチ。



(9) シワスフダ（師走札）
西之（野尻） 小脇 忠男
毎年12月27、8日頃平野の本國寺からの札を村落の寺役からもらってくる。

写真の左から順に火の神、玄関、長い2枚はテイスバシラ（亭主柱）のところに、大晦日の晩に貼る。かまどのことと火の神といい、火の神の札はかまど近くの柱に貼る。

ホイドン（神主）のところでは、貼らない。
一年貼った後は、焼く。縦／横、左から13.5センチ／7.5センチ、14.5センチ／7.5センチ、28センチ／6.7センチ、28センチ／7.5センチ。



(10) 石敢当 島間（大久保）

人家の入口辺りにたっていた。左にあるのはソテツ。石に「石敢当」と彫ってある。
高さ55センチ、幅23センチ、厚さ12センチ。



(11) その他

①カラカラ 島間（大久保） 西園 ハツエ
焼酎をいれて、直接火にかけることができる。ハツエさんのご主人の晩酌に使っている。茶系の色合いで、字や絵がかいてある高さ11.7センチ、底の直径10.8センチ、口部の直径4.5センチ。



4. おわりに

初めて年中行事を一年通して調査したのだが、なかなか要領がつかめないまま終わった気がする。南種子町の行事は、今まで調査した、加世田、川辺とはまた一味違うと思った。また隠居性が、行事にも関わっていたのは興味深く感じた。離島という地理的条件や自然環境など、いろいろ合わせて、南種子町のバックボーンが形成されたのだろうと、漠然とではあるが、思わずにはいられない。

最後に、忙しいにもかかわらず、親切にいろいろ教えて下さった皆様本当にどうもありがとうございました。

年中行事具 II

小松美貴

一、はじめに

種子島の調査は私には初めてである。同じ鹿児島県内でも方言が全く違うと聞き、不安ではあったがそれ以上に言葉以前の民俗の違い、また共通の民俗を肌で感じられるということへの期待が大きかった。以下に南種子町で見聞きしたことを記したい。

二、概観

月日は「旧暦」とないものは全て新暦である。

(1) 門木（門松）

○西之（砂坂）

昔、松やゆずりはを使って立てていた。

○茎永（竹崎）

海砂を二か所に盛り上げ、竹を立ててその根元にシバ（椎・ゆずりは・モロバ・竹の葉）を差す。竹の上部に注連縄を渡し、注連縄にはだいだいと炭をさげた。今は炭をさげる人はおらず、門木も代わりの札で賛ますところが多くなった。

○茎永（阿多借経）

元旦の前夜、松・椎・まつ・竹・ゆずりは・モロバを山から採ってきて墓や家の隅々に飾る。これらをショウガツバ（正月葉）という。

○茎永（中部）

十二月三十一日、朝潮の満ちる前に山から材料（竹・松・ゆずりは・椎の木・梅）をとってくる。浜砂もとってきて、これらを木戸に立てる。注連縄にはだいだい・ゆずりは・うらじろ（モロバ）をさげる。

○茎永（上里）

松・椎・マテ・竹などをおじいさんが暮れに木戸に立てて注連縄を張り、だいだい・うらじろ・ゆずり葉をさげていた。

○平山（広田）

クロバー（クロバイ）の木を切ってきて、縦に筋を裂いて、コサンダケ・椎・マテ・松・モロバと一緒にくくって門口に立てる。

○平山（浜田）

正月に削った木でシンギョーバシタ（木戸）を立て、シンギョーバシタにマテ・松・竹を立てた。

(2) 水迎え

○島間（小平山）

昔、水道のない時代、元旦の朝一番鶏が鳴かないうちに谷へ水（若水）を汲みに行った。久保田良子さん（昭和五年二月十五日生まれ）が小さい時のお話によると、湧水を汲みに行くのは男だけで、「年の男の水汲み始め、水は汲まずに黄金（こがね）汲む、黄金汲む。」と言いかながら汲んだ。途中で人と会っても口をきいてはならない。女はその水を神棚に上げたりした。また御飯を炊いたり雑煮を作ったりするのに使った。この時の雑煮を食べる前にくしゃみをすると、歯が抜けると言う。

○西之（砂坂）

元旦の早朝、一番鶏が鳴くと同時に井戸へ行き、初水といって元旦の水を汲む。井戸を使う何軒かの中で一番先に初水を迎えるれば、その年は幸せとか豊作とか言った。この水を汲むのが楽しみだった。「水は汲まずに黄金汲む黄金汲む」と言いながら、紐の付いた井戸用のバケツに汲んだ水をひしゃくで桶に汲む。バケツから直接桶に汲んではならない。汲んだ水は一番に神棚に上げ、顔を洗って茶を飲むのに使う。

○茎永（中部）

元旦の朝、男の人がツリー（井戸）に汲みに行つた。このとき、餅を持っていてツリーに奉つてくる。一番先に汲んだ人がいいと言って早く行った。

○茎永（上里）

昔、谷間に下りていき湧水を「若水」といって汲みに行った。一番に汲んだ人には福が来るといい、一番鶴が歌ってから先を争って汲みに行く。木製のタンゴ(桶)に孟宗竹のシャク(ひしゃく)で汲んでいた。今も「若返る」と言って毎年汲んでき、茶を沸かし、顔を洗う人がいる。昔は米、ゆずり葉、モロバを洗面器に入れて顔を洗っていた。

○平山(中之町)

一番鶴が鳴いたときに、井戸に餅、米を持っていって水を汲む。汲むとき、「年男が年改まって初水を迎えるときには水は汲まずに黄金汲む黄金汲む」という。この水で茶を沸かし、神棚に上げ、顔を洗ったりもする。

(3) 鏡餅

○茎永(竹崎)

大きな餅の上に少し小さな餅をのせ、さらに小さな餅を三つのせ、一番上にみかんをのせる。ゆずりは、モロバを下に敷いて飾る。カンサマ(神棚)などに上げる。

(4) チョウギトウ(町祈祷)

○茎永(中部)

元旦に、無事にその年を過ごせるよう、みんな集まり坊さんを呼んでお祓いをする。御はらいの後で駄駆走を食べる。椎の木に御幣を付けてお祓いしたものを公民館に置いてあるが、本当の神様は上の寺跡に祀っている。

○茎永(上里)

元旦とは決まっていないが、年の始めに神主さんを公民館に呼んでお祓いをしてもらう。そして、飲み方をする。

○平山(中之町)

旧暦正月・五月・九月を厄月と言い、今も月初めに神主さんを呼んでお祓いをして、祈祷をする。この後に飲み会。昔は輪番制だった。

(5) 新年会

○島間(小平山)

元旦の晩にある。

(6) 拝賀式

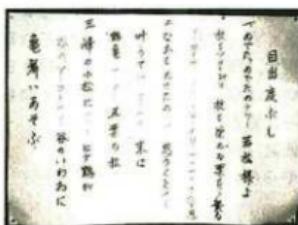
○平山(中之町)

元旦に子供も大人も校区民は全員学校に行って合掌し、年の始めに一年間の安全と豊作の祈願をする。

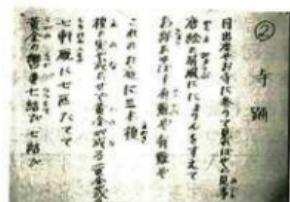
(7) 水祝い(川祝い)

○平山(中之町)

一月一日、井戸の責任者(向井正夫さん)の家に向井里の人々がみんな集まり「目出度ぶし(めでたぶし)」を歌って、川岸に行つて祝いをする。



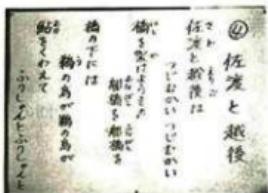
祝賀歌「めでた節」(平山)



寺跡(平山)



さんご跡(平山)



佐渡と越後（平山）

(8) チイナビキ（露なびき）

○平山（中之町）

元旦に、向井正夫さんの家ので行なう。稻がよく育って穂を持ち、なびいている様子を現す。「西の風が吹いたら」と言うとみんな東のほうへ傾き、「東の風が吹いたら」と言ったら西へ傾く。

○西之（砂坂）

やらない。

(9) 日起こし

○島間（小平山）

昭和三十年頃まであった。今はやらない。子供や若者（青年団）が公民館に集まり、各家庭を回る。各家庭ではむしろを敷き、臼をひっくり返し米と餅を入れた一升樹を上に置き、杵をくくりつけておく。青年団が二～三人ずつ家に入る。一人が米を三回搗くともう一人が「年改まって年若男が米搗き始めるが、東コウサカ山に立ちたる尾上の松で臼切りて、そのエラエラ（枝々）で杵切りて、唐の鳥と日本の鳥と飛び渡らぬそのうちに、千得々万得々搗かせたもうれこのいせ米をさんさんさんさと。」と歌う。「さんさんさんさと」のところで、臼の縁を三回杵の横で搗く。そしてそのうちの一人が餅を持っていく。餅は四時か五時の頃公民館に集まつた青年団で煮たり焼いたりして食べたり、持つて帰ったりした。歌の文句の練習もした。

○西之（砂坂）

昔はあった。

○茎永（竹崎）

昔、元旦の朝男の子たちが家々を回って臼に入れてあつた米を「千石、満石」と言いながら搗いた。

○茎永（阿多羅経）

一月二日朝、若い男の人たちが「祝い申そうか。」と言って回ってくる。树に米を入れて臼に置いてあるので、それを搗く。

○茎永（中部）

昭和三十年頃まで。正月二日の晩、家の人気が寝ているとき、回ってきた青年が土間に置いてある臼の米を「セントクトクマントクトク」などと言いいながら杵で搗く。米は一升樹に入れておいてある。臼は初めから起きており、引っ繰り返して置かれているのではない。

○茎永（上里）

戦前まであった。年の初めの朝方、男の人たちが「お祝い申そうか」と言って回ってくる。臼の中には米とお金が入れてあり、歌いながら米を搗く。お金はもらっていく。

○平山（中之町）

一月二日未明、青年たちが村落ごとにカイジョウ（公民館）に集まり、一番鶴が歌うのを待つて家々を回っていく。家ごとに米と餅を臼の中の一升樹に入れて用意してあり、青年が樹から米を出して次のように言いいながら杵と臼で搗く。「年男が年改まって初日起こすときには、東こうさの峯に立ったる尾上の松で臼切りて、その枝々で杵切りて、一杵搗けば千石搗く、二杵（ふたぎね）搗けば万石搗く、三杵（みぎね）搗けば限りなし、この家の富貴（ふっけい）を搗き招く、さっさ搗け搗けいしはちごめ。」杵にはゆずりはとモロバが注連縄でくくりつけてある。餅は青年が持ち帰つてカイジョウで雑煮にして食べる。この時、正月だけは蔥をどこからでも取つて来て入れてよいことになっている。

(10) ダゴサシ（団子差し）

○島間（小平山）

ダゴサシ、またはダンゴという。小さな

餅を一つずつ木（または竹）の枝の先に枝ごとにいくつも差したもの。旧正月にゆずりは、ウラジロの葉と一緒に門松とティシュバシラ（亭主柱、大黒柱）に差す。

○茎永（阿多惜経）

ダゴサシという。小さな餅を柳の枝に差し、家の四方の隅々とティスバシラ（亭主柱）、門松に付ける。二十日に外し、食べる。これで二十日の正月が終わり、床の上（仏様）に新しく花を飾る。

○茎永（中部）

ダゴ（団子）を門木、家の四方に差す。

○茎永（上里）

家の中心のテースバシラにダゴ（餅を柳などの木に差したもの）。ゆずりは・モロバを左縄でくくり付けた。一月十五日は門木にもダゴを差した。この日は「ダゴオットリ（餅盗み）」の日で、子供たちが門々を回ってダゴだけを取って持ち帰り、いろいろ焼いて食べるのがおもしろかった。

○平山（浜田）

シンギョーバシタ（木戸口）・テースバシタなどに立て、神様にも上げる。シンギョーバシタのダゴサシは、一月十四日に子供たちがとったいった。

（11）礼言い

○島間（小平山）

正月、盆、五月・九月の節供に実家に親戚が集まってご馳走を食べる。墓参りの次いでという感じでもある。嫁入りした人は舅宅にも挨拶に行く。三月の節供には行かない。

○西之（木原）

正月、三月の節供、五月の節供に親元へ挨拶に行く。親もとは「礼うけ」をしないといけない。「礼うけ」とは、ご馳走を作って待っていることである。

○茎永（竹崎）

元旦の朝、親類宅に挨拶に行く。

○茎永（上里）

正月・盆・三月の節供・五月の節供に嫁さんの里に行く。今は墓参りをする。

○平山（広田）

盆・正月にシュウトジョーとヤシナーオヤ（養い親）のところへ米と餅と焼酎を持っていく。

（12）クサイモン（福祭文）

○島間（小平山）

一月七日の晩、午後七時頃から。青年団が家々を回り、玄関の外に立って歌を上げる。歌は次の通り。「イヨークサイモノや候る、イヨーいつよりも今年は門の松が栄えと、イヨー栄え給うや道理よ、イヨー白金のタンゴに黄金のマビシャクを敷き詰めて、イヨー一つども汲めどもつきもせず、イヨー雪豊年のことなれば、（中略）イヨー鶴と亀が舞い来る、イヨー舞いよ来給うや道理よ、イヨーこれでお祝いおこめやれ。」昔は家の人に鏡餅を一つもらった。今はお金（五百～千円）をもらっている。この場合の青年団は、中学生～六十五歳の人で、三組に分かれて回った。この後公民館で宴会。

○茎永（竹崎）

一月七日、フナトウ（漁師）らが集まり、一軒一軒祝って歩く。

○茎永（阿多惜経）

ここではヒオクサイモンという。青年が歌い、後から子供が歌う。

○茎永（中部）

ヒオクサイモンという。一月七日、子供・青年が歌を歌って回る。昔は大きな餅を家の人にからもらい、ぜんざいにして食べた。今は餅と現金千円をもらって、餅は分け合って持って帰る。

○茎永（上里）

一月七日、夕方から晩にかけて大人と子供が家々を歌を歌って回る。初め神社を祝ってから回る。大人の大将（有留次男さん）が歌い、その後を子供がまねて歌う。昔は家の人がお礼にテノクベ（鏡餅）をくれた。子供たちはカルウテ（背負って）来たカンザー（運搬具）に餅を入れる。最後は新築の家に行って子供に歌わせ、餅をもらう。子供の数が減ってずっと途絶えていた。

クサイモンの歌詞：

ひよー 福祭文や候ろよ
ひよー 何時（いつ）よりも今年は門
の松が栄えた
ひよー 栄えたこそや候ろよ
ひよー これの殿のご門に鶴と亀が舞
いきた
ひよー 舞い来たこそや候ろよ
ひよー 大黒舞いで舞いこんだ
ひよー 大黒恵比須に年の神
ひよー 何時よりも今年は雪豊年の年
なれば
ひよー 米（よね）の俵を栄（は）え
たてた
ひよー 栄えたてたこそや候ろよ
ひよー 東三条四条には宝来山の山を
築（つ）け
ひよー 西三条四条には白金黄金のは
ちをつけ
ひよー 四方の隅々に泉酒が湛（たた）
えた
ひよー 湛えたこそや候ろよ
ひよー 白金のまげおけに黄金のちゃ
びしゃくさしそえた
ひよー さしそえたこそや候ろよ
ひよー 汲み上げ汲み上げお年の神に
上げや候ろよ
ひよー 紅花がすぼーで黄金花が咲き
きた
ひよー 咲ききたこそや候ろよ
ひよー 富貴召して徳あるとは
ひよー 冥加ね叶（かな）わせ給（た
ま）いあれ
ひよー それで富貴におなりあれ
ひよー 今日のお祝いおくみあれ
ひよー 祝い込めては候ろよ

「雪豊年（ゆきほうねん）」とは、雪がたくさん降って害虫がたくさん死に、作物がよく獲れる年。

この日、「バチバチの葉」という生の葉をジロ（地炉、いろり）にくべる。どっさり

焚くとバチバチバチッと音がし、鬼が逃げていくと言う。また、バチバチの葉やグラの木を、入り口など決まったところの壁の板の隙間に差した。

○平山（中之町）

昔は青年団が中心だったが、今は敬老会が行なう。ただし、三十五～四十歳くらいの人も参加する。隠居の家、不幸があって門松の立っていない家には行かない。

(13) カーゴマー（蚕舞い）

○島間（小平山）

やらない。

○茎永（竹崎）

一月十四・十五日。青年の男の人たちが女装して、二～三晚かけて家々を歩いて回る。ダゴサシ（めのもち）を持って太鼓に合わせて踊り、テースバシ（大黒柱）のダゴサシを一つもらっていく。最後はまた集まり、ぜんざいなどを食べる。

○茎永（阿多惜経）

カンゴマイという。昔は養蚕をしていた家だけでていたが、今はどこの家でもする。家々のものを見て歩く。

○茎永（中部）

一月十四日・十五日に茎永全体を青年が舞って回る。不幸のあった家には来ない。不幸があった家は、門木を立てないのでそれが目印になる。男の人が三角風呂敷を被ってきものを着て女装し、扇子を持って踊る。最後にテースバシではなく玄関の近くに差してあったダゴ（ダゴサシ）を取って肩にのせて踊る。

○茎永（上里）

上里の人はやらないが、茎永から青年が今も毎年一月十五日に回ってくる。着物を着てお太鼓を結び、風呂敷を三角に折ってかぶり顎の下で結び、白足袋を履いて女装した一人の青年が家に上がって踊る。昔はテースバシラのダンゴ（餅）を取ってかたげて（肩に担いで）踊った。今は青年がダンゴを持ってくる。

○平山（浜田）

一月十四日、今もやっている。

歌詞：「これから申す門（かど）から申すよ
この家はいおうでおじゅるどうから祝
い申すよましてこの家は家は裕福まい
の家と見かけ申すよくじゅうくうかい
のこのみやじょうを回しますときにある
やをはえにしきを広げやーらんらん
らーととくと踏ませてこれより東のあ
そびだの峠にけんけんどりのめんどり
の右のおおとりばねの左のかざきりお
っとりあわせひとはねがいですくれば
千枚すぐうふたはねがいですくれば二
千枚すぐう三千枚のこたねを寄せよ集
めよありごになるとときあいらいら
と申すよとばらこにつるつると申すな
がめにおきるときあまかもきらわず
つゆかもきらわず赤まい白まいかがせ
たもれそのまゆの固さはあんまがわの
石よりもかとござるなどのこまかはるご
まのいさもごとくに夢にみてえもの
ゆきものよ婆じょ様か娘じょーかよ今
日のお祝いよ~」

と歌いながら舞う。女装束の男と、男役の「アバケー（アバクイ、ひょっこ）」が一人人徳利を持って滑稽に踊る。「かがせたもれ」と言ったところで玄関の近くの柱からダゴサシを取り、それを持って踊る。

(14) 系図祝い

○島間（小平山）・茎永（竹崎）・平山（中之町）
やらない。
○茎永（上里）

羽生三郎さん宅に系図が残っており、系図祝いは一月四日にしていた。もともと中種子町の方で、中種子の羽生家の人々が祝いに集まり、一族郎党の健在を確認しあう。系図とともに大小二本の刀が伝わっている。

(15) 錫入れ

○島間（小平山）
やらない。
○茎永（阿多羅経）

阿多羅経では昔は一月二十日の朝、田に初めて錫を入れていた。畑の錫入れはない。

○茎永（中部）

一月十一日、田の錫入れをする。

(16) ゲートボールの打ち初め大会

○西之（砂坂）

一月十日、五十~六十人の仲間が予算から砂糖・小豆代を出して買い、小さな餅を出し合ってぜんざいを炊く。炊くのは役員の奥さん。

(17) ガローヤマの祭り

○平山（中之町）

向井家の水源地のある防風林がガローヤマになっており、正月に祭りをする。本家の者と氏子たちと行って、餅や酒などを上げた。向井家の守り神で、山に入ったり木を切ったりすると祟るという。山に子供が入らないよう親が脅したりした。また、向井家の本家には水迎えの時神様が入ると言われている。

(18) 節 分

○島間（小平山）

特にすることはない。昔は各家庭で「鬼は外、福は内」と言って豆まきをした。

○茎永（中部）

やらない。

○茎永（上里）

今は豆まきをやっている。

○平山（中之町）

子供のいるところで豆まきをする。

(19) センソマツリ（先祖祭り）

○茎永（中部）

田頭永山上人と氏神の祭りと一緒に、上人のなくなった二月に行なっていた。現在途切れていますが、来年（一九九四年）は復活するかも知れないとのこと。

上人と氏神を祀っているその入り口に無縁供養塔が立ってる。以前は村外れにあった。うようよしている靈を供養するもの。

昔、村人たちが海に流そうとしたことがあったが、その前に易者に訊いたところ「流すな」と言われ流すのをやめた。浮遊靈が集まるところなので、みんな今も「怖か」と言って触れようとしない。



入口わきの無縁供養之碑



正覺院日敬上人の墓



日敬上人の墓の入口



氏神様



境内に墓のある正覺院日敬上人の説明



氏神様の御神体は高さ 45cm の石



道妙寺（本門法華宗）



道妙寺の内部

(20) 招魂祭

○西之（砂坂）

宝満神社に明治三十七年～三十八年に戦死した人の招魂碑があり、春（三月十日）・秋に相撲を奉納した。峯分け（峯を通る本線の道路によって南種子を東西に分けること）された二チームで勝負した。このチームには少々の入れ替わりもあった。「去年のようにもう一度やってみよう、負けたら同じチームで次は勝つぞ」という意味でネリウチと言ふこともあった。ちなみに、ネリウチではなくネンウチという遊びがあった。五～六十センチの杭を、ジャンケンで負けたほうが地面に打ち込み、勝ったほうが上から打ち込んで倒したら勝ちだ。小学校五～六年生までの遊びで、一人五～六本ずつ杭を持っていた。

○茎永（竹崎・阿多羅經）

三月十日、松原のショウコンサツ（戦没者慰靈碑）の前で相撲を奉納した。慰靈塔が西之表に移されてからなくなった。

○平山（中之町）

三月二十日、平山地区公民館主催の春の戦没者慰靈祭がある。また秋には遺族だけのものがある。



春の戦没者慰靈祭

(21) 三月の節供

○西之（木原）

旧暦三月三日、ツノマキを作る。ダチクの葉に餅米を包んで作る。

○茎永（竹崎）

ひな祭りなどしなかった。

○茎永（中部）

旧暦三月三日、昔は礼言いに行つた。今は墓に桃の花を持っていく。フツのダンゴやツノマキを作る。ひな祭りはしない。

○茎永（上里）

旧暦三月三日、礼言いに行つたり、桃の花を持って墓参りをしたりする。また、フツの団子（餅）を作る。羽生祐子さん（昭和九年生まれ）が小さい頃は雛人形は飾らなかった。

○平山（中之町）

昔は旧暦三月三日にフツの餅や餡餅や、つわぶきの料理を作つた。今は新暦三月三日に作る。

(22) 花見

○茎永（竹崎・中部）

やらない。
○平山（中之町）
昔からやらないが、以前みんなで春にバスであちこち見学を行っていた。

(23) ロケットマラソン
近年開催されるようになった南種子町のビッグイベントで、国内外から多くの参加者が走りに来る。今年（一九九四）は三月二十日日曜だった。

(24) 熊野神社詣で
○島間（小平山）
四月三日、奉納相撲なども見る。昔は行っていた。島じゅうから人が来る。

○茎永（中部）
昔は初詣でと、四月三日、六月三日に行った。今は村落の神社に行く。
○茎永（上里）
羽生祐子さんが小さい頃、四月三日、熊野神社の下で行なわれる相撲を見に行った。当時の数少ない娯楽であり、またあさひがに・かぶとがにの獲れる時期で、熊野の村落の出店でそれらを買うのが楽しみだった。米の獲れた時期にも参拝していた。

(25) 彼岸
○島間（小平山）
仏教の人は彼岸花や米、水を持って寺や墓へ行く。また坊さんが家々を回ってくる。神道の人は墓参りをする。
○西之（木原）
春の彼岸は、この頃咲く白い花を決まって



春の彼岸に欠かせない白い花

仏壇に上げたり、墓に持っていったりする。この花は、秋には赤い実が生る。墓には彼岸中に一日行けばよい。秋の彼岸は、まんじゅしゃげを上げる。

○茎永（竹崎）
墓に必ず花を持っていく。
○茎永（上里）
墓参りをし、蓬の餅を神棚などに供える。

(26) 春祭り
○茎永（上里）
昔、春の田植え前に海の見える見晴らしのいい岬でお祝いをしていた。神主も呼び、米が獲れるよう願掛けをする。

(27) 田作り
○茎永（阿多羅経）
四月五日。

(28) さのぼり
○島間（小平山）
田植えの後家々でご馳走を食べる。虫や蛙などの供養をするといったことはない。
○茎永（竹崎）
親類が集まって魚など食べた。ここも供養はなし。

○茎永（中部）
昔は盛んだった。ご馳走を食べた。供養なし。
○茎永（上里）
田植えの後、飲んだり食ったりする。
○平山（中之町）

「タウエアガリ」と言い、田植えの後でする村落全体の飲み方。昔はこれを「ンマヤキ」といっしょにしていた。ずっと以前は長谷に牧場があり、そこに馬を放っていてホイトウ（踏耕）をしていた。

(29) シマーアガリ
○茎永（中部）
昔は、田植えなどの仕事が一段落してから西之表までバスで行ったりした。

(30) 五月の節供

○島間（小平山）

旧暦五月五日、マキ（粽）を竹の皮に巻いて作る。男の節供であり、粽のように太った子供に育つよう食べさせる。礼言いにも持っていく。菖蒲（またはすすき、竹）とツツ（蓬）の葉を墓、神様（神棚）、床の間に飾る。昔は軒にも飾った。最近は新暦五月に鯉のぼりを上げる。

○西之（砂坂・木原）

ツノマキ（粽）を作る。

○茎永（竹崎）

ツノマキを作り、仏さんに供え、子供たちに食べさせた。菖蒲の花と菊も飾った。鯉のぼりは上げない。

○茎永（中部）

鯉のぼりは上げない。ツノマキを作る。ツツ（蓬）と菖蒲を墓に持っていく。軒に差したり、仏壇に上げたりもする。

○茎永（上里）

旧暦五月五日をオトコノセックと言い、ツノマキや粽を作る。また家でお祝いをしたり、礼いや菖蒲、ツツの花を持って墓参りに行ったりする。以前は鯉のぼりはなかったが、最近は新暦五月五日に上げるようになった。

○平山（中之町）

旧暦五月五日、菖蒲と蓬の葉を墓と、屋根（軒）に差した。鬼が来ないように、という。

アクマキとツノマキを作る。アクマキはアク汁につけた餅米を孟宗竹の皮に包んで四～五時間、ツノマキはダテク（ダチク）の葉で三角に包んで三時間ほど煮る。

(31) 浦祭り

○西之（砂坂）

五～六月のとびうおを獲る時期、浜（浦）におしょうさんを呼んで船の祭りをする。

○茎永（竹崎）

正月、魚を獲ってきて煮たり刺身にして酒をのみ、踊りを踊った。三月は鰯や秋刀魚を料理しみんなで祝って酒を飲む。

(32) 磯遊び

○島間（小平山）

夏、小平山の人々で弁当を持って出かける。

(33) ブリヒキ

○西之（木原）

七～八月、村落の親睦を深める意味で、漁をする。鯛（ぶり）を獲るという意味ではなく、いろんな魚を獲る。なぜブリヒキと言うのかは不明。船四隻くらいで海に出て、村落の網を使う。芭蕉の幹を裂いたものを網のロープにずっと付けて魚のおどしにする。今は芭蕉の代わりにロープを付ける。

こここのえびす様は百年以上前からあると言われ、魚が獲れたら最初に上げる。

(34) アキ（収穫）

○西之（木原）

夏（七月末）、稻を刈ることを「アキをする」と言う。

(35) 六月灯

○島間（小平山）

淹口神社で灯籠をともし、男の人たちが重箱を持って集まり、酒を飲みご馳走を食べる。

踊りはない。

○西之（砂坂）

塩釜神社にお参りする。灯籠は作らない。昔は浜に出て、神社でご馳走を食べた。

○茎永（竹崎）

最近までやっていた。海岸で踊りを踊った。

○茎永（中部）

新暦六月にする。

○茎永（上里）

旧暦六月、上里神社に夕方お参りに行く。灯籠はさげない。

○平山（中之町）

昔は、豊受神社とガローのカミサマの両方であった。灯籠を青年が自分で作って持って行き、浴衣を着てお参りした。

(36) 七夕

○島間（小平山）

子供のいる家では笹を立てたりするようだ。
○茎永（竹崎）

盆前に、マキ（粽）を作ったり、餅を掲げたりする。子供のいる家ではササを立てる。墓参りもする。ここはよく墓参りをする村落だという。

○茎永（中部）

七夕の節句は、エンガ（鳳仙花）の花を墓に持っていく。

○茎永（上里）

笹など立てたりはしない。昔は旧暦の七月七日に烟に穴を掘り豆を播き、板で蓋をしてやしを作り、ちょうど食べ頃の盆に食べるようになっていた。

(37) 盆

○島間（小平山）

家屋、庭、墓などを掃除し、墓には提灯をさげる。神棚にイリコガシ、ご飯、ゆでた素麺などのご馳走を上げる。

○西之（木原）

八月十六日の夕方、日蓮宗西之本国寺で盆踊りが踊られる。浴衣を来て、浴衣の布で顔を隠し、薬草履を履いた男の人たちが死者を送る「送り踊り」を寺に奉納する。顔を隠す布をメンという。

○茎永（竹崎）

花立てを仏壇から床の間に下ろし、ろうそくと線香を立て、ご馳走を三日間供える。朝（十時）はご飯と煮染め、昼（三時）は煮た芋や西瓜など、晩は酒やご飯などを供える。

○茎永（中部）

掃除をして墓参りをする。仏壇を床の間に下ろし、トキ（季節）のもの、煮染め、ところん、ゆでた素麺などを上げる。盆踊りはない。

○茎永（上里）

墓の掃除をする。米の粉の団子を耳たぶくらいの柔らかさに練ってたものをマキの葉で包み、乾燥させて小さく裂いたミチシ

バを螺旋状に巻き付け水煮にしたものを「精霊送り」と言って、最後の日に墓石にのせる。するとセンソ（先祖）がこれを杖にしてあの世に帰っていくと言われている。個人墓の時は一つの墓に一つずつせていく。今は納骨堂なので、中に入っている死者の数だけ上げる。精霊迎え、盆踊りはしない。
○平山（中之町）

十三日は「もの洗い」の日である。

(38) 十五夜

○島間（小平山）

ツノマキ（ダチク）の葉で餅米を包んで炊くを作り、みんなで食べる。神様や月にも上げる。ススキとフツ（蓬）の葉を瓶に差し、台にのせて縁に飾る。果物を上げる人もいた。

綱引き、相撲が今も公民館である。綱は昔は家から藁を持ち寄って作った。今は船を繋ぐ綱を購入し、使っている。相撲は球技場にある土俵である。昔は綱引きが終わった綱は、ぐるぐる巻きにして公民館に置いておき、役員が焼いた。

○茎永（竹崎）

ツノマキ、煮染めなどをホイサンに上げる。近くの親類にマキを持っていったりする。

○茎永（中部）

旧暦八月十五日、子供たちが綱引きをする。綱は持ち寄った藁を木にぶら下げて編んでいく。藁の間にかずらを入れたりはしない。

○茎永（上里）

昔、藁の綱で綱引きをしていた。上町対下町といったように分かれて勝負した。引いているうちに綱がちぎれるので、そのまま道にばら撒く。

家庭ではススキ・团子・おはぎ・ツノマキなどを月の見えるところに台を置いて月に供えたり、神棚に上げたりする。

(39) 秋祭り

○島間（小平山）

旧暦九月九日に滝口神社に村落で踊りを

奉納する。雨天ならば小平山公民館で踊る。昔は毎年開かれ滝口神社、豊受神社に上方、田尾、小平山の踊りが奉納された。今は二年おきに小平山で踊るだけとなっている。踊りは大踊り、弁慶踊り、鎌踊り、ヤートセーなどで、去年は弁慶踊りとヤートセーだった。ここには棒踊りはない。大踊りももう十年以上踊られていない。

○西之（木原）

九月二十八日、木原神社で豊作の祭り。大踊り（笠踊り）などを踊る。大踊りは外側に大太鼓が四人、中に小太鼓が五人、鉦は残りの人たち。和服に薬草履の出で立ちで男の人が踊る。ほかに吉原通いの歌に合わせて踊ることも。大阪から百五十年以上前に伝わったと言われる踊りもあり、歌は色事を歌ったもの。

十一月には門倉岬の神社に各村落の人々が集まって、一年交代で踊りを奉納する。

○茎永（竹崎）

九月九日、松原のショウコンサマ（招魂様）で今も踊りが踊られる。

九月はフナトウ（漁師）の祭りもある。

九月の節供には宝満神社で豊年祭りがあり、踊りが踊られる。

○茎永（阿多信経）

九月九日の九月の節供に、宝満神社でアンジョウ踊りなどの踊りがある。「九月踊り」という。

九月は村落ごとに歌踊りをするが、阿多信経では十月二十九日に村落の外れの山で行なう。雨が降ったら踊らず、役員が祭典だけする。腰弁当で行き、今はゲートボールをする。

○茎永（中部）

二年に一度、旧暦九月に九月踊りをする。昔は毎年だったが踊り子が少なくなったので一年置きになった。大踊りなどが踊られる。

○茎永（上里）

一年置きの九月の節供に、米が獲れた祝いに上里神社に踊りを奉納する。春に豊作祈願の願掛けをした、その願ほどき。宝満神社にも奉納するのだが、毎年上里神社に

奉納する踊りと同じものを踊る。最後はワクズシと言って上里公民館で酒を飲む。今は上里の人だけでやっているが、昔は新上里の人たちとこれらの大引きなお祭りと一緒にしていた。

踊りは「げんご婆踊り」「大踊り」「ちくでん踊り」など。「げんご婆踊り」は南方から伝えられ、げんご婆どちらに行く、薩摩の山行く…」で始まる爺さんと婆さんのおかしな踊りだ。矢のような棒を振って踊るので「げんご婆棒」とも言う。爺さん役の人は、赤い襷に翻車をぶら下げ、メンをついている。婆さんは棕櫚の皮をかつらの様にして被ったメンをつける。他にショウサン（坊さん）や子坊主のような役などがあり、みんなほんだちの一重の、赤くて長い着物を着て、裾を腰にはさんでいる。昔は男だけ踊った。

「ちくでん踊り」は手拭いで鉢巻きをし、花柄の半襦袢を着て下に白いズボンのやうなものを履き、男だけが踊る。

「大踊り」も男だけ、花笠を被って踊る。

○平山（中之町）

旧暦九月久日の九月の節供に、ツノマキを作る。

(40) ヒジンダジョウヨウ（聖祭り）

○茎永（上里）

ご飯をいっぱいに盛り上げ、魚の骨などのアラを煮炊きし、氏神である聖（ひじり）に供える。村落の人も酒や山盛りご飯を飲み食いし、楽しみな行事であった。ショウヨウ（請用）とは、「人を食事などに招待すること（広辞苑より）」。ここでも飲み方（宴会）のことを言う。聖の供養であり、豊年の祝いである。聖とは肥前守のことか。肥前守は戦略に長けた人と言い伝えられており、戦時中は参拝する人が多かった。また侍がヒジンダ（干死んだ、餓死した）という伝説が残っており、その供養かも知れないとのこと。この上里だけに伝わるユニークな行事も、もう話に聞くだけとなつた。

(41) 牧の神祭り

○島間（小平山）

滝口神社の祭りの時一緒に祭る。

(42) 餅搗き

○茎永（阿多惜経）

二十九日は穀起が悪いので三十日に餅を搗く。また、二十八か三十九・三十一日に搗くものという。

○茎永（中部）

三十日に搗く家が多い。

○茎永（上里）

十二月の三十日や三十一日など、それぞれ杵と臼で搗いた。テノクボ（競餅）を神棚・お金をしまっている草笥の上・勉強机・米を置いている倉・農機具・水源地・神社など、大事なところに飾る。テノクボは大きな餅の上に中くらいの餅をのせ、うらじろ・ゆずりは・昆布をのせ、その上に小さな餅を二つのせ、一番上にみかんをのせるが、家によって違いがある。

(43) 垣作り

○島間（小平山）

マテの木で昔は家を囲った。

○西之（砂坂）

昔、カッタケ（カラタケ）という竹で作った。

○茎永（竹崎）

昔、年末になると山へシバを取りに行き、家の周りに立て垣を作った。

○茎永（上里）

竹で作った。

○平山（中之町）

十二月三十日頃、ニガタケ（苦竹）・松・マテを差していって作った。

(44) 大晦日・正月の食事

○茎永（竹崎）

餅や、いろいろな料理を食べた。

○茎永（中部）

昔は、大晦日や正月にだけ、カシワ（鶴肉）や豚の肉が出た。大晦日には餅は食べない。

○茎永（上里）

大晦日・正月は素麺を煮て、鶏を漬してご馳走を食べた。馬肉・豚肉を買ってくることもあった。

○平山（中之町）

正月の食事として、鶏を食べた。

(45) その他正月の準備

○茎永（上里）

掃除をし、馬の食べる草や正月木（正月にくべる薪）を正月の四～五日分、貯えておいた。

○平山（中之町）

大晦日、ミズノカミサマ（本家の神様）に氏子たちが米を納めに来る。

(46) 二十三夜待

○島間（小平山）

毎月二十三日、隣近所で集まり月が出るの待ち、月を拝んで料理を食べる。

(47) カネヤキ（ウマヤキ）

○島間（小平山）

競りに出す子馬など、牧場からつれてきて焼印を押していた。昭和十五～十六年までやっていた。

○西之（砂坂）

なし。

○茎永（中部）

シマヤキという。田植え前に、田植えが無事終わるよう坊さん（シショウサンとホイドンが交替で来る）を呼んでお祓いをする。その後みんなでご馳走を食べる。

(48) 山の神祭り

○島間（小平山）

なし。

(49) ホンコ

○西之（砂坂）

男が十九歳になったら一人前とみなされる。ホンコは本来は隠居に対する本戸の意味であり、道普請や会合、災難に遭った人

を助けるなど、村落を支えるために一人前の活動をする家のことを言いう。ホンコになると農地や漁業権のもらい前（分け前）を与えるという特典がある。しかし長男家以外のホンコはもらい前が少ない。また、十九歳になると村落に入ったものは必ず齧（うるめいわし）を共同で獲らなければならぬ。共同でなければ漁具を購入出来ないのだ。

(50) 報徳会

○平山（中之町）

村落のみんながカイジョウ（今の公民館）に集まり、役員のはなしを聞いて田の決まりやつきあいのルールなど、社会の道徳を学んだ。会場が公民館になる戦前まであった。今は村落を見下ろす高台に報徳記念の石碑が立っている。

(51) タイヤ

○茎永（上里）

亡くなった人の命日に墓参りや里帰りをする。仏壇に線香を上げて拝む。

三. 民具解説

○系図

茎永 上里 羽生三郎

一月四日は系図祝いで床に飾られる。この日以外はしまってある。系図によると、羽生家は菅原道真の子孫であることがわかる。幅34.5cm。



○ダゴサシ（めのもち）

島間 小平山 小山

旧正月、ゆずりは・ウラジロの葉と一緒にティッシュパシラ（亭主柱）、門松などに差す。孫が来たら孫の肩にも差してやる。餅を差す木がなければ竹に差すこともある。長さ52cm。



○灯籠①

茎永 中部 中部公民館

六月、氏神様の境内で行なわれる六月灯で、境内に吊るす。木枠に和紙が張られており、吊るす部分はビニール紐。底はろうそくを立てたよう釘が一本打ってある。縦18cm、横19cm、高さ31cm。



○灯籠②

島間 小平山 滝口神社

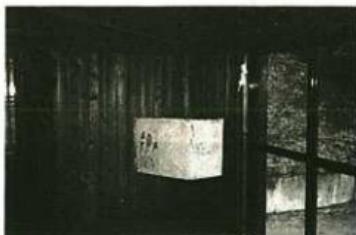
滝口神社の六月灯で使用。木枠に和紙が張られ、底に釘を立てた空缶に高さ2cmほどに切ったろうそく立てが付けられている。上部二か所の金具にビニール紐を通し、先を切って曲げた釘で吊るす。縦27cm、横27cm、高さ45.5cm。



○灯籠③

島間 小平山 滝口神社

上に同じ。ろうそく立てが二つ付いてい
る。縦25cm、横48cm、高さ32cm。

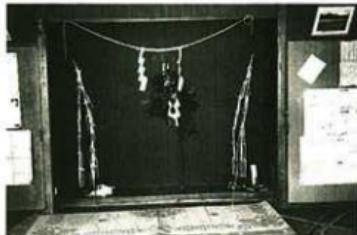


○ンマヤキ（うまやき）

基永 中部 中部公民館

田植え前に、けが人が出ないよう祭りを

する。シショウサンとホイドンが交替で祓
いに来る。馬耕をしていた時代は馬の無事
も祈った。お祓いの後、宴会。左右の笹の
高さ約240cm、中心の木の高さ約150cm。
木の後ろには五国豊穣・風雨順次の札が張
られている。



○メン（面）①

基永 上里 上里公民館

旧暦九月九日、豊受神社の秋祭りの「げ
んごばあ踊り」で顔に着ける。紙製で、棕
櫚の皮の髪が付けてある。後ろはゴム紐が
付いている。表面は赤や緑に塗ってある。長
さ29cm、幅21cm。



○メン（面）②

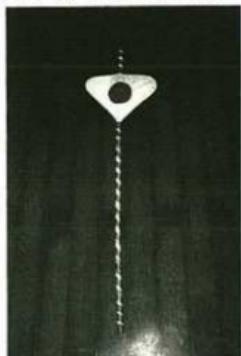
基永 上里 上里公民館

上に同じ。長さ31cm、幅27cm。



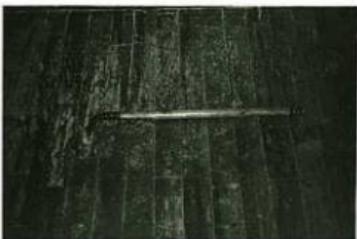
○不明

茎永 上里 上里公民館
「げんご婆踊り」で、一人一本持って踊る。
三角形の部分は木枠に和紙を張ってあり、白地に赤の日の丸。柄の部分は竹に紅白の紙が巻かれている。全長 107.5cm。



○鎌

茎永 中部 中部公民館
九月九日の豊年祭りで、これを持って鎌踊りを踊り、宝満神社に奉納する。全長 75cm、刃渡り 6cm。



○カサ（花笠）

西之 木原 左尾栄子
四年に一度、九月二十八日に木原集落の神社に奉納する大踊り（笠踊り）でかぶる。
筒状の厚紙に金の紙が貼ってあり、銀の紙の飾りが貼ってある。垂らしてある布はピンク色の花柄。てっぺんには造花を飾るようになっている。全体の高さ 65.5cm。



○垣

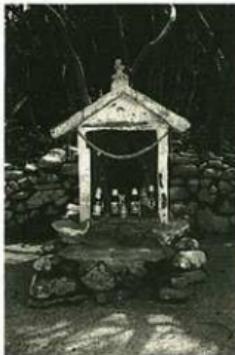
西之 木原
煙草を植える前に、西風を防ぐために煙草の畑の西側に立てる。十二～一月に作り替える。ナエダケ使用。



○恵比須様

西之 木原

祠はコンクリート造りで、屋根に珊瑚がのせてある。中には砂が散乱し、竹の葉の苞（中に小石が見える）・徳利・ろうそく・焼酎・巻かれた布・珊瑚・お金・石が置いてある。御神体と思われる石は高さ40cm。土台は丸い石を積んであり、「昭和三二年 拾壹月拾八日」と彫ってある。



○バトウカンサマ（牛の神様、馬頭観音）

島間 小平山 久保田孝男

先祖代々伝わっている。山から採ってきたヤマケラという木を飾っている。だいだい・注連縄・ヤマケラは正月の年一回の祭りで飾る。小平山の山の頂上に祀ってあったものを久保さん宅に移した。色物の花は上げない。御神酒を上げる。昔は牛が難産の時、御神酒を持ってお参りに来る人がいた。



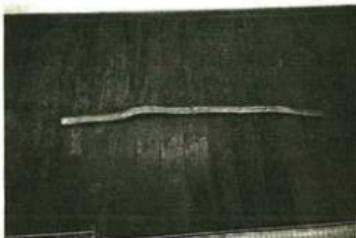
扉を開いた様子

祠の中に、石が四つ入っている。

○不明

茎永 中部 中部公民館

皮を削った木の棒。公民館での宴会時の演芸の道具かと思われる。長さ102cm、直径3.5cm。



○笹

茎永 中部 中部公民館

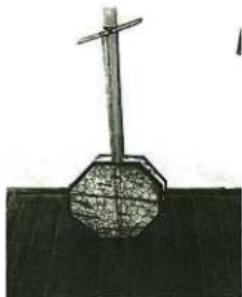
公民館の宴会で、若い人がこれを持って踊る。長さ128cm。



○不明

茎永 中部 中部公民館

公民館の宴会の時、演芸で使う。角材にペニヤ板、茶色の毛糸三本。全長86cm。



○法螺貝

茎永 中部 中部公民館

昭和二十年頃まで使用。会合に人を呼ぶ
のに使う。長さは左から 30, 25, 20, 19cm。



○手水鉢

茎永 中部

豊受神社の境内に置かれている正覺院所
録のもの。高さ 28cm, 幅 36cm。

四. おわりに

年中行事に関する民具は少ないだろうと予想して今回の調査に臨んだが、案の定である。行事そのものが失われつつあることを目の当たりにし、その背景として人、とくに若者や子供たちがいなくなつたという現実を知り、とても残念だった。また寂しく思う。

最後になりましたが、伝承者の皆さん、教育委員会の方々、お世話になった全ての方にお礼申し上げたいと思います。



久保孝男さん 良子さん夫妻



羽生祐子さん



砂坂七蔵さん

伝承者一覧（敬称略）

大字	小字	氏名	生年月日	大字	小字	氏名	生年月日
島間	小平山	小山		茎永	阿多羅經	岩下矢八	T 3. 4. 1
		野久保キミ	S 7. 1. 9			岩下しづえ	T 3. 4. 1
		久保田孝男	T15. 3. 28		中部	田頭利一	S 3. 2. 20
西之	砂坂	久保田良子	S 5. 2. 15			田頭みや	S 9. 7. 25
		砂坂七蔵	T10.12.21	上里	羽生祐子		S 9. 9. 8
		左尾栄子	S12. 9. 29		有留次男		
茎永	竹崎	日高芳弘	S37.12. 9		羽生三郎		
		山下つる	T 8. 1. 1	平山	中之町	向井正夫	T 9.10.30
		山下しほ	M40. 3.30		広田	原和幸	S 5. 3. 24

信仰具 I (屋内神)

前田晶子

1.はじめに

今回の実習のテーマとして私が選んだものは信仰だ。信仰は人の生活と深く結びついている。その中でも、人間が生活する場所「家」の中に祀られている神様、「屋内神」を取り上げてみた。「家」の中にどの様な神を祀っているか。また人間と神との生活があるときその背景にはどの様な心が流れているか、などにも注目してみていただきたいと思う。

2.概観

まず、南種子町の家で、神様が祀られている場所をあげると、カミノザ・台所・戸口があげられる。カミノザは床の間と、そのすぐ横に、神様が祀られている。

またテースバシラ(亭主柱)に御札を貼ってある家も多い。屋内神の種類としては、仏壇、神棚、火の神様、大黒様、船の神様をみるとことができた。またこの他に、家のあらゆる所に貼られている御札もここでは屋内神と考えて見ていく。



テース柱の御札 平山(浜田)

ここで、今回の実習での調査地をあげておくと、浜田、上立石、田代、野尻、郡原、夏田、水牛である。

①仏壇

仏壇はカミノザにある床の間の隣に、ほとんど置かれていた。また私が聞くことのできたお宅の仏教の宗派は、全て法華宗である。そして仏壇のことを、「仏壇」という呼び方の他に、「ホトケンタナ」と呼んでいるところもあり、大変興味深かった。

また昔から仏教であるというお宅の他に、つい最近、神道から仏教に変わられたお宅もあった。

また仏壇と神棚、両方をおいてある家もあり神仏混淆が顕著に見られた。

その家々の仏教の歴史というものは、かなり古いらしく、「いつごろから、この仏壇があるのか」という問い合わせに対しては、「分からない。」という答えが返ってくるのがほとんどであった。また、家の中にあるすべての神様のうち、朝起きて一番に拝むのはやはり仏さまということであり、祖先をとても大事にしていることが、うかがえた。

お供え物については、お酒、果物、御飯などその家々により異なっているが、お供え物をあげる人は、女性と決まっている。朝一番にお供え物をあげるが、それはあとから食べてもいい。特に、みかんを食べることを「オサガリ」といって、食べるところが付くという。

あげるお花は、色花なら何でもいい。特によくあげる花は、菊である。

仏壇に御札を貼っているところが多く、その場合の御札の入手方法として、正月に役場から、あるいは近くの寺からもらうということであった。御札の処理は、「神様なので、人の踏まない所で焼く。」とされ、花園などで焼かれる。また、彼岸になると彼岸経というものをあげてもらうそうである。

②神 棚

神棚の置いてある場所については、仏壇と同じく、床の間の脇である。床の間の脇が、仏壇のように掘り込み式になっている神棚を数多く見ることが出来た。また神棚を「ショウリョウサマ」と呼んでいるところもみられた。神棚のある家の多くは、床の間と神棚、両方に注連縄をさげているのがみられた。この注連縄は正月に神社のホイドンからもらうということであった。注連縄を何故さげるのかは伝承者の方も分からぬということである。神棚には位牌、供物、お花が供えてある。神棚と仏壇と両方置いてあるお宅の場合、神棚には大麻が祀られていた。



床の間と神棚の注連縄 平山（水牛）

神棚と仏壇のある家の拝む順番は、「本当は、神様が先なんだけれども、仏壇から拝む」ということであった。このことからも、いかに祖先を敬う気持ちが強いか分かる。

お供え物やお花は、仏式と差異はほとんど見られなかった。

③火の神様

火の神様はどのお宅でも聞くことが出来た。たいていは台所に祀られているが、一軒だけ、お風呂の薪をくべる所に祀られているのをみることができた。

ただ御札を貼ったものもあれば、御札の他にお花やお茶が供えられているのもあり、ここでは後者の形態を多く目にすることができた。

御札は神棚などと同じ方法で入手し処理も同じである。あげるお花については、色花をあげてはいけないというお宅と、そう

ではないお宅とに分かれていた。

管理者は台所に祀ってあるということから女性である。また、火の神様は特別に拝んだりはしない。しかし、例えば、火を消し忘れていて火事になるのを、未然に防げたという時などに、「火の神様のおかげです。ありがとうございます。」と言って手を合わせるときもあるそうである。

④大黒様

今回の実習で一軒のお宅でみることが出来た。大黒様の置いてある場所は、カミノザの床の間である。100年ほど前からあるということであった。御神体は大黒様の像である。お供え物は御飯、御神酒、お茶、お水であり、女性が替える。お花はシバだけであり、「色花はあげてはいけない」とされているらしい。たまに夜にろうそくを灯す。



大黒様の御神体

⑤船の神様

西海の上立石という漁村でみることができた。ここでは、「船靈様」とは呼んでいない。やはりカミノザの床の間に置いてある。御神体は島間にいるホイさんが「開けてはいけない」ということで見たことはないそうである。

朝と晩に男性が拝み、女性は、お供え物や花をかえるだけである。お供え物は、御神酒とお茶だけであり、お花は、色花でも何でもあげていいそうである。その理由に、船の神様が「女の神様」であるから、ということがあるそうだ。

花の処理は、浜で焼く。

一年に三回ほどホイに御祓いをしてもらうそうである。

3. 民具解説

(1) 仏壇

○平山（浜田）

長田 助義

隠居家の仏壇である。昭和55年に本家から分家した。本家のほうに、古い位牌があるそうである。間取りは、カミノザ、シモノザも特にない。貼られている御札は、右側が広田にある善福寺のもので、左側が豊受神社でもらったものである。神仏混淆がみられた。縦83cm、横71cm。



隠居家の仏壇

○西之（野尻）

大脇 助次郎

ホトケンタナと呼ばれている。

50年くらい前からある。仏壇の左側に石が祀ってある。この石は、奥さんの郷里である大阪のお墓から持ち帰った物である。お墓参りになかなか行けないため、代わりにこの石を拝んでいるそうである。

縦67cm、横83cm。



ホトケンタナ

○西之（野尻）

大脇 助次郎

年忌まつりの祭壇である。

床の間に前に置かれている。奥さんの祭壇である。今年の1月19日が一周忌であっ

たそうである。ふつうは一年忌が過ぎたら、しまうそうであるが、このお宅では二年忌が過ぎるまで出しているということである。

横131cm、高さ100cm。



年忌まつりの祭壇

○平山（牛井）

向井 シズエ

二階に祀られていたものを一階へ下ろしたそうである。位牌の古いのは、一つにまとめてある。縦96cm、横76cm。



仏壇

(2) 神棚

○西之（野尻）

大脇 助次郎

床の間の左端に備えつけられている。

神棚の中に小さな石が祀っていた。この石の言わばは次のようにある。子供が生まれたが生まれつき体が弱い子で色々と難儀した。そこで木原にいる「ものしり」をお訪ねしたところ、「神社を移転したときの

神様の残りがあるはずだ。それを迎えて祀らなければならない。」と言われた。そこで神社のあった所に行くと、小さな石が残っていた。この石が神様の残りではないか、といつて祀った。すると、子供は丈夫な子になり元気に育った。



神 櫃

○西海（上立石） 立石 武彦

ショウリョウサマと呼ばれている。床の間の横に置かれている。このお宅では位牌を一つずつ並べていて、それぞれお花とお供え物をあげている。

縦74cm、横87cm。



ショウリョウサマ

○平山（西之町） 西田 カメ

昭和23年ごろからある。大麻も飾ってある。平山神社からもらったもの。

縦75cm、横81cm。



神 櫃

○西之（田代）

50年くらい過ぎた御先祖様は左の祠のようなものにいれる。このお宅は、神棚と床の間に注連縄がしてあった。



神 櫃

○茎永（中部）

大麻が写真中央の大麻入れにいれてある。
神棚…縦76cm、横90cm。

大麻入れ…縦36cm、横9cm。



神 櫃

(3) 火の神様

○西之（野尻）

大脇 助次郎
土間にある流しの隣の柱に、棚をもうけてある。花瓶の前はお茶である。

幅17cm、奥行き16.5cm。



火の神様

○平山（水牛） 向井 シズエ
色花をあげてはいけない。そこに、お供えされているものは水と焼酎である。
縦80cm横27cm。



火の神様

○平山（西之町） 西田 カメ
色花をあげてはいけない。
縦27cm、横17cm。



火の神様

○基永（中部）
お風呂の薪をくべる所に、記ってある。写真のお餅は、正月にお供えたものである。



火の神様

○平山（浜田）
御札の処理は、焼く他に海に流したりもするそうである。



火の神様



大黒様

(4) 船の神様

○西海（上立石）

立石 武彦

床の間に祀ってある。御神酒、お茶、お水をあげる。

横幅 46cm、高さ 45cm。



(5) 大黒様

○西之（田代）

上妻 武靖

色花をあげてはいけないと決まっている。

横幅 18cm、高さ 33cm。

(6) テースバシラ（亭主柱）の御札

○西海（上立石）

立石 武彦

正月七日の村落のお祭りで、小組合長さんからもらう。

縦 18.5cm、横 6cm。



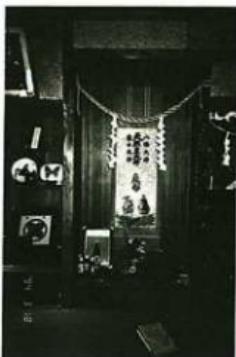
テース柱に貼ってある御札

(7) 床の間

○西之（田代）

日高 スミヨ

注連縄がさげてある。床の間の左横の棚に大麻とお塩が祀ってある。



床の間

(8) 玄間に貼ってある御札

○平山（浜田） 長田 トミ子
縦27cm、横38cm。



玄間に貼ってある御札

(9) 台所に貼ってある御札



台所に貼ってある御札

5. その他

①カマド

西之（野尻）

大脇 助次郎

10年ほど前まで使用していた。今は板が
かぶせてある。幅130cm、奥行き106cm、
高さ64cm。



カマド

②琉球壺

西之（野尻）

不明

口の直径47.5cm、高さ52cm。



琉球壺

③不明

中之下（郡原）

寺川 敏昭

味噌を作るのに使う。高さ52cm、口の
直径32cm。



味噌瓶

⑥トイシ（砥石）

中之下（郡原）

古市 栄

包丁や、鎌などを研ぐ。水ための高さ 59cm
幅 79cm、奥行き 35cm。トイシの長さ
22cm。



トイシ

④エビトリゾーケ

中之下（郡原）

古市 栄

川エビを取るときに、使用する。表皮を底にしてある。縁は 2cm 幅のヘギを内外から 2 枚合わせにしてある。直径 56cm。



エビトリゾーケ

⑤シラスうなぎとりの網

中之下（郡原）

古市 栄

シラスうなぎを取るときに、使用する。網の中に、入ったものを、おたまですくう。全長 201cm 幅 102cm。



シラスうなぎとりの網

⑦五右衛門風呂

平山（西之町）

西田 カメ

現在でも使用されている。



五右衛門風呂

⑧神棚



神棚（遺影）

6. さいごに

今回の実習が、私にとって初めての民具調査でした。信仰具を調査したはずが、私の技量の足りなさで偏った報告となってしまったことを、まずははじめにお詫びしたいと思います。また、私のテーマが「屋内神」ということで、家に上がらせてもらわなくてはならず、お忙しいところを大変ご迷惑をおかけしました。しかし、お訪ねしたどのお宅でも、温かく迎えてくださり、また大変親切にしてもらいまして感謝の気持ちでいっぱいです。

本当にありがとうございました。

今度は、観光という目的で種子島を訪れてみたいと思っています。

信仰具 II (屋内神・屋外神)

是枝智美

1. はじめに

種子島は鹿児島県大隅半島の南40キロに位置する、南北に長い島である。今回の実習は種子島でも特に南種子町に的をしぼって行われた。

「信仰具」というテーマは私にとっては初めて挑戦するテーマであり、また、一年ぶりの有形調査ということもあって、少々不安を感じつつ出発の日を迎えたのだが、いざ種子島に降り立つてみると、種子島の人々は見ず知らずの私たちにとても親切してくれだったので、9日間の実習を無事終えることが出来ました。

2. 概観

(1) 仏壇

実習中は法華宗、日蓮宗、浄土真宗の仏壇を見ることが出来た。法華宗は日蓮宗の俗称の場合と、その一派を指す場合がある。今回それらを明らかにしていかなかったのだが、おそらく同じ宗派とみて良いだろう。

全体的に見て仏壇の設置場所は上座となっている家が多い。

仏壇に供える花は決まっておらず季節の花を飾るところがほとんどだが、島間の田尾では椿の花はあげないとのことだった。他の地域でも、椿はあまりあげないようである。

普段の仏壇への供えものはお茶と水で、新しいご飯を炊いたときにはご飯も供える。これらの仕事は特に誰がすると決まっているわけではないが、主に主婦がしているようだ。島間の仲之町に住む山小田キトさんのお宅では、普段の仕事は主婦が、正月などは男性がすることである。

浄土真宗では、正月には餅やダイダイを、盆には菓子類や団子を供える。法華宗では、盆に精進料理を供えるが、浄土真宗は精進料理は供えていない。ちなみに、法華宗である西田キミさんのお宅では、盆にはスイカやカライトモ、里芋などの初物を供えるようになっている。その他に揚げ豆腐、竹の子、昆布、茄子、もやしなどを煮しめにしてお供えする。

(2) 神棚

仏壇と同じで神棚も上座にある家が多いようである。

神棚に供える花はケダ(ヒサカキ)、サカキ、椎の葉、季節の花々である。椿はあげない。

普段の供えものはオブキゴキ(仏飯椀)、果物、お茶などである。



西田家の仏壇(法華宗)

(3) 大麻

大麻入手するのはたいてい年末のようである。中之下の郡原では村落館長が配つてまる。中之上の本町でも村落の各班長が配布する。毎年正月に替え、古いものは自宅の庭、もしくは寺などで焼く。正月といつても、きちんと元旦にかえる人もいる。古い大麻をどこにでも捨てるのは良くない。そのため、茎永の宇都浦では古いものは集めて持っていくようになっている。平山の

広田では足で踏んだりするといけないので焼き捨てるのが一番と聞いた。

大麻をそのまま飾っておくことはほとんどなく、木製の箱に入れてある。この箱は以前は店に売っていたが、現在ではないそうである。中には自分で作った箱に入れている人もいた。大麻を入れた箱は床の間や仏壇、神棚の上などに設置されている。神棚に置いてある人もいたが、毎日大麻を拌むということはしていない。

ただし、西之の平野に住む植田ツカさんは、一時期実家のほうの位牌を預かっていた頃、玄関口横に大麻を祀る場所を作っていた。坊さんは仏と一緒にしてもいいと言っていたが、気になるので別にしてしそうだ。欄を作って位牌と一緒に置き、花も供えていた。花は椎の葉を供えていたが色花でも良かった。仏教では赤い花をあげない人もいる。拌む順番としては仏壇を拌んでから大麻という順にしていた。大麻は町（？）から売りに来ていたそうである。



床の間の大麻いれ（中之上、吉永家）

（4）札

大麻と同じで、入手するのは年末から正月にかけてであり、貼り替えるのは正月になってからである。吉永の宇都浦では各村落の代表が宝満神社に行き、ホイドンが祈祷した札を公民館長が配ってまわる。また、中之下の郡原では毎年正月の4日前に公民館に

集まって祈祷してもらう。1年交替で下中のシショウと八幡神社のホイドンが祈祷する。このことを町祈祷といい、このときに札をもらってくる。

札を貼る場所は神棚、仮壇、火を使う場所（台所）、ティスバシタ（亭主柱=大黒柱）などであり、家の入り口（玄関の内側）に貼ってある家もある。また、神棚や仮壇には両脇に貼ることが多い。古い札ははがして、自分の庭でただけ焼く。風呂などにくべたりしてはいけない。

屋内に貼られている札は仏教と神道では違っているようである。また、浄土真宗の家には札は貼られていない。

なお、札は札でも中之下の郡原で辻札の話が聞けた。郡原では4か所（村落の入り口）に辻札が立つ。村落の人が二人で元旦に札を立て、旧暦の1月14日にははずす。辻札は、長さが1.5メートルほどの竹の先を割って、魔除けのまじないがかかれている札を挟んだものである。20年ぐらい前までは鍋の蓋をワラで編んで、その上に竹（ニガ竹）を立てていたそうである。

（5）火の神様

台所に祀っている。札を貼ってあるだけの家や、山ヶダなどの花を供えてある家などそれぞれである。しかし、今は札を貼っているだけの家でも、以前は山ヶダ（ないときは浜シキビ）を飾っていたということであり、また、島間の仲之町に住む山小田キトさんの母親は、火の神様に時々線香とお茶、ご飯も供えていたという。昔は火の神様を今より重要視していたことが伺える。

現在では火の神は台所に祀られているが、もともとはかまどの上に棚を作り、そこには花などを供えて火の神を祀っていた。火の神に供える花はほとんどの家がケダや椿などの柴花である。色花はあげないというところが多いが、特に赤い花はあげたらいけないといわれているところもある。花を供えるのは主に主婦の仕事である。

なお、火の神は仮壇や神棚などと違って毎日拌んだりしてはいないようである。

(6) 大黒様

七日間の調査期間中、大黒様を見かけたのは二回だけだった。しかもそのうちの一体は信仰の対象というよりは置物としての大黒様である。もう一体のほうも現在ではテレビの上に置かれた雛人形のケースの中に入れられ、祀られているといった様子ではなかった。以前は仏壇に置かれ、正月には餅を供えていたそうである。

(7) 恵比須様

大黒様と同じで、恵比須様もほとんどなかった。個人で祀る恵比須様は島間の仲ノ町で見せていただけただけである。

個人で祀る恵比須様は一か所だけだったが、各集落ごとで祀る恵比須様は結構あるようだ。西海の海岸沿いではいくつかの恵比須様を見ることが出来た。これらは別の方で調査しているので、そちらのほうを参照していただきたい。

(8) 囲炉裏

南種子町では囲炉裏のことをジロ、自在鉤のことをザーギ、囲炉裏の縁のことをジロブチ（ジロゲタ）と言う。ジロには火の神様がいると思われているので、ジロを粗末に扱ってはいけない。台所の火の神と違ってこの火の神に対しては供えものはない。特に祀ったりしてはいない。が、酒を飲む際には必ず囲炉裏に少し酒をたらしてから飲んでいた。神道のある伝承者の家では、朝お茶を飲むときや酒を飲むときには必ず「とおかみえみため（十神笑みため）」と唱え言をして、囲炉裏に数滴あげてから自分たちが飲むようになっていたそうだ。ただし、食べ物を供えることはなかった。

囲炉裏端での決まりとしては、家庭によって切った爪を燃やしたらいけないとか、ジロブチより先に足を出したらいけないということがある。ジロブチには茶碗などをおくからである。ジロブチに足をのせてさんざん怒られたという話をあちこちで聞いた。また、島間の仲之町では囲炉裏は火を焚くところなので、行事など何かあるときには線香をあげることもあったという話が聞けた。

平山の広田、西田キミさんのお宅では夏は囲炉裏にフタをかぶせて使わないと使うのである。

(9) 床の間

床の間には松や色花などの花を飾る。子どもたちの写真を飾ることもある。正月には餅やダイダイ、ウラジロ、ユズリハ、松の枝、焼酎などを供え、お盆には米、里芋、野菜、果物、ソーメン、酒などを供える。しかし、浄土真宗の家では床の間には大中小の餅とダイダイだけしか飾らない。中之上の本町では正月の餅は3つ重ね（大中小）であり、お盆（14、15日の2日間）には床の間に膳を作り朝、昼、晩料理をかえていたという話も聞けた。料理はご飯、おつゆ、煮しめ、里芋、ソーメン、果物、酒などご馳走の品々である。また、平山の広田では年の晩の夕方にご飯と吸い物、なます、1合瓶の御酒を供え、年の晩にはそれらの品を少しづつ門に供える。正月になってしまってはおいたままにしておき、さらにユズリハとモロバの上に三段の餅とダイダイを供える。

(10) テイスバシラ

テイスバシラもしくはテイスバシタ（亭主柱・大黒柱）にはほとんどの家が札を貼っているようである。



テイスバシラに貼られた札

島間の仲之町では旧正月の年の晩に柳の木に団子をさしてテイスバシラに結びつけていた。子どもが小さい頃は日がたてばその団子を囲炉裏で焼いたりして食べた。これは主に主婦の仕事だったようである。また、中之下の郡原ではテイスバシラにユズリハとウラジロと餅をさした注連縄を結ん

でいる。餅は3つか5つを適当にさして元旦に縄に差し込み、新暦の1月20日に取り外す。平山の広田でも正月に餅をユズリハの枝に差し、モロバもつけてある小さな注連縄をテイスバシタに結びつける。

なお、テイスバシラに関連する行事としてはカーゴマー（蚕舞い）がある。

平山の広田の西田キミさんによると、広田では新暦の1月14日に餅をつき、ニガ竹に丸い団子と長い団子をさしてテイスバシタに結びつける。ニガ竹のかわりに唐竹にさす人もいるが、餅をさす枝はなんでもよい。昔は柳の枝にもさしていた。丸い団子は蚕の繭を意味し、長い団子は粟や米の穂が長くできるようにという願いが込められている。西田さんは農業の祝いだから団子も大きくつくるようにしているそうだ。カーゴマーは15日か16日の夜にやってくる。家の中には女装した男性の踊り手と道化役の人が入ってきて舞い、庭には太鼓や歌い手などが5、6人いて、子供がついてまわってはやしをかける。この舞いのときにテイスバシタにさした団子を踊り手がもらって帰るのである。なお、道化役の人は瓶を担いでくるので、それには焼酎を入れてあげていた。何年か前からは千円を封筒に入れて枝にさげておくようになり、焼酎も一升提供するようになった。カーゴマーのときの団子をさした枝のことをコノミヤショウと言い、踊りのときにとりやすいようにテイスバシラとは別につくっておく。新しくて枝ぶりのいい7~80センチの竹をとってきて、竹の枝に団子をさす。この団子はテイスバシラのほかにも家の隅々に飾っておく。

西之の平野ではオカロギ様（お門木様=門松）に14日に餅を立てる。ダゴサンの木で一番しだれたのをテイスバシラの注連縄（大晦日に張る）にさす。14か15日にカーゴマーが行われ、舞いを舞った人がテイスバシラのダゴサシの木を持って帰る。一方、オカロギ様の団子は子供たちが取に来るのを、主人がワーレワレと追いかける。そうすると子供が倒れてしまうのだが、水田の

稲穂のように倒れると言って、子供が倒れるほどよかったです。木にさす団子も餅を長く切ってさし、稲穂のようにしていた。

(11) 井 戸

井戸には水神様がいる。古井戸をいじって罰があたったりするのはそのためである。この水神様は特別に祀ってあつたりはしない。しかし、井戸を埋めるときは神主を雇って祈祷する人もいる。そうしないとがめがあるからである。

平山の広田で井戸は西田家の管理下にあった。以前はかなりの数のひとがこの井戸を利用していたが、水道の普及により現在は使われていない。この井戸にも水神様が祀ってあり、西田家の人がお祀りしていた。普段の供物はないが、毎月1日にはシュエー（潮井）をふる。井戸にはいろいろな人が来るためにには汚れがある人もいるので、シュエーでお祓いをするのである。このシュエーは海水である。ただし、正月には御酒もふるった。この井戸も埋める際には和尚さんを呼んで祈祷してもらったそうである。

広田では元旦に「水迎え」をする。年が明けると同時に井戸に行き、「黄金汲む黄金汲む」と言って、杓で上澄みを退けてから水を汲む。この唱え言には米が良くできますようにという意味とお金が入りますようにという意味が込められている。水迎えのときには各々餅やダイダイを持参するが、人に会ったらいけないとか喋ったらいけないとか言う。このときに汲んだ水は、まず仏様の水を替え、お茶を沸かしたり顔を洗ったりするのに利用する。

同様に西之の平野でも元旦に「水迎え」をする。一番最初に汲んだ人が福が多いと言われている。ここでは「年取り男が水汲み始めるときは水は汲まずに黄金汲む黄金汲む黄金汲む」と唱え、「黄金汲む黄金汲む黄金汲む」と言うときに水を汲む。水を汲みに行くのは年が明けたらすぐだが、朝にはその水でお湯を沸かし、そのお湯の中に少々の米とユズリハ、モロバを入れて顔を洗う。

(12) トイレ

昔のトイレは木の板を渡しただけの簡単なものであり、トイレのことはチンヤ、便所などと言っていた。私としては意外だったのだが、南種子では便所に神様がいるという伝承は見つけられず、「トイレに壁を吐いたらいけない」という伝承もなかったようである。トイレ関係の伝承としては以下の2つが聞けた。1つは便所掃除をしたら「めめよか子を持つ」と言って、きれいな子が生まれると言われる所以で、妊娠したときはトイレ掃除をしたりするというもの。もう1つはトイレで倒れると危ない（助かりにくい）というもの。私がかつて実習を行った薩摩半島の加世田市や川辺町に比べ、トイレに関する伝承はかなり少ないようである。

(13) その他

中之下の郡原では仏教と神道は半々ぐらい、平山の広田では一軒が神道なのを除いてあとはすべて仏教である。

葬式のとき、仏教ならシショウ（和尚）、神道ならホイドン（神職）をお願いする。全員集まって花を奉納するとき、ホイドンなら玉串（椎の葉に神垂をつけたもの）、シシヨウなら線香をあげる。

シショウやホイドンは葬式その他の際、家の玄関からではなく縁側から出入りする。

3. 民具解説

(1) 仏壇

○仏壇 平山 広田 西田キミ
法華宗。朝は火（灯明）をつけてから、水・茶・供物（饅頭など）・ご飯とおかず（野菜など）の順でお供えする。ご主人がなくなつて3年忌もまだなので（平成六年三月現在）、現在は朝昇晚お茶や料理をかえる。夜はお茶のかわりに御酒（焼酎）を供える。

仏壇には先祖様も記っているが、先祖様には朝だけ料理などを供え、夜は御酒だけ供える。ただし、豆ご飯などを作った場合

には先祖様にもお供えする。

最近亡くなった人の位牌は大きなものだが、先祖の位牌は小さな札にしていれものの中に入っている。これがいっぱいになつたり、長いこと祀っていていらなくなつたりしたら、年忌まつりなどをした際に焼き捨てたりする。

供える花はケダで、そのほか菊なども飾る。彼岸のときには、三月にはイセビの花、9月には彼岸花を飾る。



西田家の仏壇

また、米が出来たら稲を刈る前に一株か二株、先祖様に初穂を供える。カライモなどもきれいなものが出来たときには仏壇脇にさげておく。現在仏壇の脇に供えられている稲穂の長さは約88センチである。



初穂儀礼の稲穂

○仏壇 西之 平野 植田ツカ
日蓮宗。毎日の供物はお茶である。水も置いてあるが、毎日かえるわけではなく、減

ったときあげるようにしている。新しく炊いたときにはご飯も供える。その他生臭いものは仏壇に供えては駄目で、果物や団子を供える。また、人からもらひものをしたときにはまず仏壇にお供えする。

仏壇に供える花はなんでも良く、あげたらいけないものはないが、赤い花をあげない人もいる。季節の花を供えるようにしている。



植田家の仏壇

昔は正月になれば仏壇の両脇に餅を飾っていた。今は1か所だけ。紙の上に大きな餅を置き、その上にユズリハとモロバをのせ、その上に小さな餅を3つのせる。更にその上に大きな餅をのせ、その上に小さな餅を3つのせ、一番上にダイダイをのせる。

また、お盆には仏壇の道具を洗ったり拭いたりしてきれいにしておく。

仏壇には日蓮上人の掛け軸がかけられ、札も貼ってある。また、木製の日蓮上人の置物が置かれている。植田家は大正12年に静岡から移住してきた家であるが、その当時からある、かなり古い置物である。



日蓮上人の置き物

仏壇には最大で7.5センチほどの幅がある位牌が4柱と昭和61年の5センチ幅のもの

が1柱、かなり小さな位牌(4柱ある位牌の4分の1ほど)が1柱置かれていた。

朝はろうそくに火をともして線香を立て、室内安全を祈って南無妙法蓮華経を唱え。夜は線香を立てて、一日の無事を感謝して南無妙法蓮華経を唱える。

20年ぐらい前までは初穂儀礼をしていた。初穂はうるち米の出来のいいのを選んで、仏壇の両脇にかける。初穂は根っ子から抜いてくる。カライモも出来のいいのを選ぶが、これは仏壇ではなく墓に供える。



仏壇の様子

○お釈迦様 西之 平野 植田ツカ

普段は仏壇に置かれている。これも植田家が移住してきたときに持ってきたものである。高さが7センチあり、釈迦本体の幅が1.5センチ、奥行が1.2センチほどある。裏(背中)には縦に「釈迦仏口」と彫ってある。口にはいる文字は施に似ているようだが、私には断定できないのでとりあえず空白にしておく。

この釈迦像の印相は、右手が施無畏印、左手が与願印になっている。施無畏印は恐れの心を除き、与願印は願いを叶えることを意味する。また、両方が仏の救いを示している。

姑が「死んでまた来るお釈迦の身なら死んでみせましょ、みせしめに」とよく言っていたそうである。この像が、「天にも地にも我一人」というのを意味しているとのことだ。



(2) 神棚

○神棚 中之下 群原 中國亮彦
神棚は上ノ座にある。

神棚には柳、椎の葉、季節の花などを供え、椿はあげない。神棚と火の神には主に白と黄の花を供える。供物はオブキコキ(ご飯)やお茶・果物などである。

写真では神棚に大麻が置かれているが、普段は引き出しの中にしまってある。

先祖の位牌はここにはなく、長男の家にある(中國氏は次男)。現在は亡くなられた奥さんの位牌だけが置かれている。

神棚にはろうそくをともすが、以前はコトボシという小さなランプに火をともしていた。



中國家の神棚

○神棚 中之上 本町 岩坪安昌
神棚に供える花は、柳を基本にして季節の花を供える。枯れ具合をみながら一週間ほどでかえる。神棚にあげたらいけない花はない。昔は柴花のみだったが、昭和30年頃から花もあげるようになった。お茶と水は毎朝供えるが、ご飯は新しく炊いたとき

だけ供える。その他の供物はお菓子、団子、餅、果物などである。また、人からものをいただいたときは、神棚に一部お供えしてから自分たちでいただく。

神棚に供物をする人は特別決まっていないが、主に主婦の仕事となっている。

神棚の注連縄についている御幣は、知り合いの神主がいる国分の神社から送ってもらったもの。注連縄は毎年替えるわけではない。



岩坪家の神棚

神棚には先祖の位牌を置く。戦前は位牌が一人一柱ずつあったが、場所を取るので神主を呼んでおはらいし、焼いてもらった。それ以前のものは一つの位牌にまとめて一柱とかいてある。戦後は記憶に残る人だけ位牌をとっておく。新しく死んだ人は大きな位牌を置いておくが、10年ほどしたら小さいものに替え、それまでのものはおはらいをし、祝詞をあげてもらってから自分の庭で神主に焼いてもらう。

神棚は床の間に置いてあるが、茶の間に置いて朝晩拝む人もいる。



扉を閉めた状態

(3)大 麻

○大 麻 墓永 宇都浦 國田辰夫
木箱に入れ、神棚の右隅に置いてある。毎年正月の5日頃に新しいものと取り替える。
大麻に供える花はケダだが、時期的には菊なども供える。



國田家の神棚。右隅に大麻がある。



大麻入れ

○大 麻 島間 仲之町 山小田キト
年の晩2、3日前に配ってもらう。タダというわけではなく、お金を払う。古いものはとつてある。



大麻



包みから中をとりだしたところ

○大 麻 中之上 本町 岩坪安昌
毎年替える。以前は強制的だったが、現在では必要な人だけが購入する。暮れ（大晦日の4、5日から一週間前）に配布されるので、正月に取り替える。古いものは自分で焼くようにしている。



神棚の上に出雲大社の額。その左側に大麻がある

大麻を入れた木箱は床の間と神棚の間の柱上部に設置してある。この木箱は手作りのものである。



岩坪家の大麻

○大 麻 中之上 本町 吉永早志
木箱に入れてあり、床の間のちょうど真ん中に設置してある。押んだりはしない。



吉永家の大麻

○大 麻 平山 広田 西田キミ
年末、豊受神社より配布される。古いも

のは焼き捨てる。

木箱に入っており、仏壇に向かって右側の柱上部に設置されている。



西田家の大麻

(4) 札

○札 島間 仲之町 山小田キト
本妙寺から購入する。年末(年の晩の2,3日前)にもらい、正月に貼り替える。貼り替えるのは主人の仕事である。

札は4枚買い、このとき同様に大麻も購入する。1枚はテイスバシラ(亭主柱)に、1枚は火の神に、残りの2枚は仏壇の両脇に貼る。

札は幅が7.7センチ、長さが27.2センチあり、写真右からテイスバシラ、火の神、仏壇に貼るようになっている。



それぞれの札ははる場所がきまっている

○札 中之上 本町 岩坪安昌

札は寺や神社から祭りや行事が行われた際にもらってくる。または、寺や神社に寄

進するときや、年忌まつり等をするため神社などでおはらいをしてもらったときにもらってくる。買うわけではない。古い札は焼く。

札はテイスバシラと神棚には必ず貼ってあり、火の神様にも貼ってある。また、家によっては玄関口に貼ってある家もある。



神棚左側に貼られた札



西田家のテイスバシラに貼られた札

最近では、善福寺や豊受神社に毎年出すお金が決まっているが、昔は米・麦が出来たときは初穂をあげていた。カライモをソーケ(ショケ)1つ分出したこともある。以前はお金のかわりに品物で出していた。

西田家には仏壇の左右に札が貼られている。写真は向かって右側に貼られた札。4種類の札が貼られている。左側には1枚だけ札が貼られている。写真の一番右側の小さな札は星祭りのお守りだと言っていた。1年間の運気を調べてもらい、「黒星」のときには体が健康でないでお守りを買ってきて仏壇に貼っておくのだそうだ。星祭りとは、節分の日に寺に行って運勢を調べてもらうことで、この日はケナーブラ(家族中)の運勢を見てもらう。もしあまりいい運勢でなかったときは、オシショウサン(和尚さん)がお経を読み込んでくれた札を買ってきて家の仏壇に貼る。この日は室内安全や交通安全などの札も売っている。



テイスバシラに貼られた札

○札 平山 広田 西田キミ
札は寺(善福寺)からもらってきて、年の晩に貼り替える。米2合と大きめの餅を持って年末の30日か31日に札をもらいに行く。札は仏壇とテイスバシタ(亭主柱=大黒柱)と火の神の3枚もらってくる。古い札は自分の家で焼き捨てる。



仮壇には左右にお札が貼られている



部屋の入口の札

○札 平山 広田 西田キミ
玄関の内側に、家の中を向いて貼られて
いる。家によっては外に向けて貼ってある。
善福寺のものがあればいいのだが、ないので
別の場所から売りに来るのを買っている。



玄間の内側に貼られた札

○札 西之 平野 植田ツカ
家の入り口（玄関の内側）、仮壇、火の神
様、ティスバシタに札を貼る。仮壇には4枚
も5枚も貼る。古い札ははがして自分の庭で
札だけ焼く。お風呂などにくべたらいけな
い。



ティスバシタに貼られた札



玄間横の札

(5) 火の神様

○火の神様 勝永 宇都浦 大崎蘇市
火の神の札は宝満神社で正月におはらい
をして持ってきてもらう。古い札は本来な
ら集めて処分するのだろうけれど、自分で
処分している。



大崎家の火の神様

供物は花と水で、正月には餅も飾る。花は柳を飾ってもいいのだが、めったに手に入らないので神様にはケダを供える。柳は正月と盆に供える。火の神には赤い花はあげない。花を替えるときだけ拝み、毎日はしない。



台所の勝手口の上に貼られている

○火の神様 中之上 本町 岩坪安昌
寺か神社からもらってきた札が貼ってある。台所に花瓶を置いて柳などの柴花を供え、ときには色花も供える。火の神様は主婦が祀り、朝晩お参りする。昔は台所のかまど近くの柱や壁に板を打ち付けて祀っていた。



岩坪家の火の神様

○火の神様 平山 広田 西田ミキ
以前はかまどの上に棚を作っていた。供えるのはケダの花だけで色花はあげない。正月には餅を供える。盆にも仏壇に供えるようものは供える。花を供えるのは仏壇や氏神様の後で、一番最後である。拌んだりはしない。

火の神には2種類の札が貼ってあり、火の神の祀られている棚の横にある冷蔵庫には、火の神に供えられた団子が置かれていた。



2種類のお札が貼ってある

(6) 大黒様

○大黒様 中之上 本町 岩坪安昌
20年ぐらい前から床に飾ってある。供物なし。特別に拝むわけではないが、見るたびに心がおおらかになる気がする。書を書くかわりに行商人にお礼としていただいたもの。



床の間の大黒様

○大黒様 西之 平野 植田ツカ
高さ 7.5センチ、幅、奥行が5センチほど
の木製。現在はテレビの上の雑人形（内裏
雛のみ）のケースの中に入れられている。昔
は仮壇に置いてあった。めったにおまつり
はしないが正月には大きな餅を供えた。20
日頃にはその餅をいただく。

は珊瑚礁が入っている。



御神体はサンゴ礁である



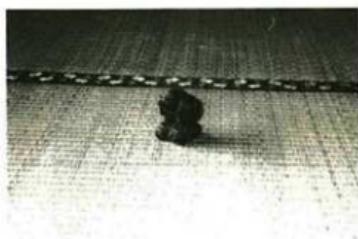
祠の前には木製の恵比須像が置かれている

(8) その他

○不明（出雲大社の額）

中之上 本町 岩坪安昌

これも大黒様と同じで15年ほど前に行商
人にもらったもの。供物なし。神棚の上に
飾られ装飾的意味合いが強いが、いくぶん
心のよりどころにしている。



植田家の大黒様

(7) 恵比須様

○恵比須様 島間 仲之町 船川勝
台風で家が壊れたままになっているため、
現在は放置してある。家がなおりしだいま
たお祀りする。祠の前には高さ 7.1センチ、
幅4.8センチ、奥行4.5センチほど
の木製の恵比須様が置かれている。また、祠の中に

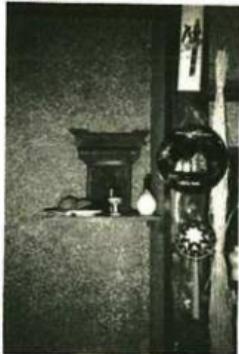


○氏神様 平山 広田 西田キミ
氏神様は床と仏壇が接する壁に棚を設け、その上に置かれている。御神体は一枚の鏡。神様（祠）は開けたらいけない。両親に言わされたわけではないが、手を入れたりしてはいけない。床は上の座にあるが、昔から女性は生理のときは上の座に入ってはいけなかった。



— 西田家の氏神様

普段の供物は水とご飯と饅頭。花は棚にのりきらないので棚の下に（床）に置いてある。花はケダや季節の花を飾る。仮壇と同じである。供物は朝は仮壇（先祖様）に供えてから氏神様に供え、夜は氏神様にお



床の間の一角にある氏神様

御酒（焼酎）を供えてから仮壇に供えものをする。



氏神様に供えられた花

神様を記っているので、月に一度1日に海水を汲んできて、家中の中と外に木の葉を使ってまいた。海水（シュエー）は1日にご主人が汲みに行く。シュエーを茶碗に入れ、木の枝を小さく折って、それに海水をつけて家の中にふっていく。その後家のまわりにまいて、ツルベ（井戸）にもまく。



床の間の様子

○山の神 中之下 郡原 中國亮彦
2~3年前から易者に言われて自宅前のアコウの大木に山の神を祀るようになった。このアコウの幹周りは大人が12人ぐらい手をつないだほどの大木である。郡原の南に立っているため風除けとなり、村落の守り神になっている。しかし、昨年の台風で折れてしまった。

供物は柳だけであり、その他には何もない。ただし、正月には注連縄を張る。

山の神（下中の郡原にて）



中國家のアコウの大木



山の神の両脇には蛙の置き物



平成5年の台風で先が
折れてしまった



根元には山の神を祀ってある



アコウの大木の根元に
祀られている山の神様

○岩下ガロー（阿多羅經のガロー山）

基永 阿竹（阿多羅經）

200年以上立っているユスの大木がある。幹周りは地上高1メートルのところで約230センチある。大木の前には祠があるが戦後のものでまだ新しい。もともとは珊瑚の祭壇があったが、セメントの祠を作ったときに珊瑚を協にどけたようである。珊瑚礁片はガル石といい、穴が開いているのは菊目石という。これらは消らかなもので聖地を表す。もとはガル石と大木しかなかったが、参拝するたびにガル石を持ってきた。ユスの大木はガローの神の取木もしくは依木と言う。これは巨木信仰にあたり、種子島が南限地となる。沖縄では一本の大木に神を祀ることはない。また、珊瑚礁をおいてあることから潮に対する靈力、海に対する浄化力に期待していることが伺われる。更に森の中にあることにより、背景に樹靈信仰（アミニズム）があるのがわかる。つまり、このガロー山は巨木信仰と潮の浄化力とアミニズムの3つからなっているのである。そこにガローの神を祀る。そして門の家々を守る地神（土地神）としての役割を持たせ、伽藍信仰ともなっている。ここは岩下門の人々が祀っているのである。

御神体は高さが29、最大幅20.5、厚さが9センチ程の珊瑚礁である。本来ユスの大木とガル石だったのが、ガル石の中からきれいなものを選んで御神体とし、やがて祠が出来てガル石から別の石に変わっていったことがわかる。民俗神発展の過程と言うことが出来るだろう。

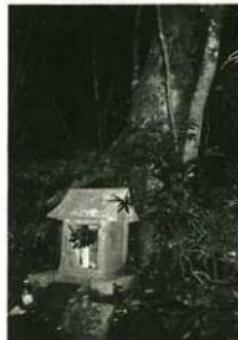
周囲には椎、椿、琉球竹（ニガ竹）、杉、その他の植物が自生しており、十メートルほどの参道が設けてある。

（調査協力 下野教授）

岩下ガロー（基永 阿多羅經）



阿多羅經のガロー山



ユスの大木と祠



セメントの祠



ガロー山を祀る岩下門



司の前には参道が設けてある

○石敢當 島間 河東時徹
自然石を利用している。長さが約66センチ、幅が35センチである。

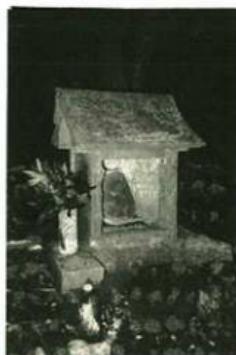


石敢當

○石敢當 島間 元川卓雄
高さが約53センチ、幅が約31センチである。



島間仲之町の石敢當



御神体

4. おわりに

今回の実習で一番印象に残っているのはやはり、種子島の人々が皆とても親切だったことである。突然の訪問にもかかわらず長時間相手をしてくださり、もし都合が悪くてもかわりの人を紹介してくださったので、1日1日を有意義に過ごすことが出来た。親しみやすい方達ばかりで、またいつか種子島に来たときにはぜひお会いしたいと思う。

今回の実習では町民の方はもちろん、いろいろな方のお世話になった。宿舎やマイクロバスの手配その他をしてくださった教育委員会や役場の方々、毎日お風呂を使わせていただいた上中の南荘の皆様、この場を借りて感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

各村落の諸相（信仰・社会組織を中心として）

大学院院生 楠本 智郎

《はじめに》

今回の調査の目的は同一村落におけるガローヤマ祭祀組織とその他の社会組織との相関関係を考察するための手掛かりを得ることであった。しかしながら我々全員の共通テーマであった有形という枠にこだわりすぎたのか、なかなか要領を得ず結局終わってみると何ともまとまりのない調査となってしまった。そこで、今回は村落の諸相という具合に地域別にまとめることでお許しいただきたい。

《村落別実態》

○野尻（西之）

野尻はさらに5戸から6戸ずつのグループに分かれる。これは組ではないというが、それぞれに輪番の五人組長がいる。村落会費はオーギヤカライモの共同栽培によって捻出する。

昔、大脇次郎七氏の屋敷にガローがあった。それは三角形の山でタブやシイの木が生えていた。上西目神社は野尻だけで、中西目神社とエビスは木原と合同で祀る。

現在、野尻には漁船が一艘あり、ベンザシがいる。ベンザシは漁を指揮したり漁具の購入に携わったりする。ベンザシのことと浦頭ともいって。

○西之町（平山）

現在、山田・前田・西之園・牟田で西之町を形成する。しかし、山田という呼称は通常は西之園も含む。これは西之園が旧山田の戸数増加により分離したものであることに因る。山田と西之園それぞれに1年交代の連絡員を兼ねた組頭がいる。

葬式は同じ組のものが手伝い、昔は小町（旧南之町=現在の西之町）の範囲で行なって

たが、現在はこの範囲については特に決まっていない。

転入者のなかでも永住見込みのある者に対する対応は共有地の権利を与えた。この権利に関しては本家と分家の差はない。

頬母子講は10人から15人ほどで金を出し合い、必要な者がとて、必要な人がいない時にはクジビキで誰かがとる。

前田は、さらに東組と西組のふたつに分かれる。それぞれに1年交代で務める組頭があり、連絡員を兼ねる。

役場からの連絡は西之町の公民館長を通じてそれぞれの組頭に伝わる。組頭はそれを各戸に伝える。現在は電話を用いるが、以前は各戸を廻り口頭で伝えていた。

前田の中畠泉氏の屋敷の北東にガローがあり、これは山の神ともいう。正月には家の者が焼酎・米・餅を供える。昔、このガローに祟られたという人が1度拝みに来たこと



ガローヤマ（前田）



ガローヤマ全景（前田）

とがあったが、普通は他の家の者が拝むことはない。

○牛野（中之上）

牛野という名称は、小字で形成される生活共同体を指す場合と、さらにそれを三つに分けた村落のひとつを指す場合の両方に使われる。前者は後者を含めた小田、牛野原から成り立っている。長小田は牛野の者が耕地を求めて開いた村落だが、牛野原は牛野で火事を出した家が追放されたことにより、開かれた村落だという。長小田、牛野原を含めた牛野には1年交代の公民館長が1人おり、さらに各村落には五人組長という世話役がいる。昔は町頭というのがいたらしく、死人がでたときなどに各戸にふれてまわったという。

牛野は半農半漁の村落であり、漁労全般を取り仕切る浦頭が1人、現場で漁を指揮したり、丘で漁網の管理をするベンザシが4人いた。これらの役職は漁の際の獲物の配当が他の者よりも多かった。

昔は共有地がなかったが、現在はすでに個人に分配してしまいほとんど残っていない。当時はこの共有地の薪で製塙し、殿様に献上したという。この共有地の権利が所有できたのは長男株のみであり、また他の面でも長男株は優遇されていたため、これを不満とする次男株によるトラブルが戦後に起きた。これを機会にすべて平等になったという。共有地の権利は、転出し戻る見込みのない者の場合は村落で買い取ったが、一時的な転出の場合は村預かりとなった。

牛野の家筋は長小田、園田それぞれ1筋と牛野2筋の計4筋から始まったといわれており、本株は当初17人に限定されていたといふ。墓にはこの他の姓が刻まれた墓石があるが、中川姓は甑島、西島姓は大分県、廣瀬姓は南種子町立石からの移住者だという。

昔は夏になると牛野の浜にあるエビスの前に瀬風呂がつくられた。当時は混浴で、他の村落からも大勢の人が入りに来ていた。

村の鎮守として塩屋天照大神がある。春と

秋の祭りには他の村落からホイドンを頼む。昔は牛野にもカミヌシという神社の世話係がいた。カミヌシは毎年代わったらしい。選出方法は数人の候補者が手に玉串を持ってホイドンの前に並び、手に持った玉串が揺れた者がその年のカミヌシとなるというものだった。これは神様のお告げによるものだという。日蓮宗は10戸程度で他はほとんどが神道らしい。

戦前は新年になると村落の両端に薬の的を置き、これを竹で作った矢で村落の外へ向かって射った。

講は互助的金融組織である頼母子講がある。



牛野村落全景（牛野）



塩屋神社（牛野）

○本村（西之）

北から宇都組・夏田組・中脇組・大脇組みに分かれる。それぞれに隣保班長が1人おり、さらにそのまとめ役として本村全体の公民館長が1人いる。これらは1年交代の輪番制となっている。連絡事項は公民館長から隣保班長へ、隣保班長から各戸へと伝えられる。現在はすべて電話を用いるが、昔は隣保班長から各戸へはイツギという隣から隣へ口頭で伝える方法が用いられた。また小町とは宇都組と夏田組、中脇組と大脇組のそれぞれを指した。

現在は農村であるが、明治34年に崎村（本村からの移住村落）と合同で漁業組合を組織し、当時は半農半漁の生活を送っていた。当時の名残もあり、今でも年に数回崎村と共同で漁を行う。昔はムラギミは浜（地引き網など）を、ベンザシは磯（刺し網など）を管理する役人のことを指した。現在はムラギミはおらず、ベンザシが5人とウオミが2人いるが双方とも民間人である。ベンザシは漁の指揮や網の管理を行う。ウオミは浜の檣で海を見張り、魚群が押し寄せるべんざシに知らせる。現在、ベンザシは1年交代の輪番制だが、ウオミは拘束される時間が長いため時間的に余裕のある人が任されることになっている。もっとも、昔は経験が求められるウオミには同じ者が継続して任に就くのが普通であった。ベンザシ、ウオミの手当は漁の獲物で支払われる。配当はベンザシが5つ、ウオミが6つ、カコが2つ、船主が5つ、隠居が1つ、船が2つとなっている。船の2つというのは船主のものになるので船主は結局7つもらうことになる。

村落のほぼ中央に農業の神様を祀る神社がある。毎月1日と15日に社人が掃除をし、シュエーを供える。社人は1年交代の輪番制となっている。公民館の裏には水神がある。また防砂林の中には山の神があり、正月と盆には花と共に海岸から拾って来た石を供える。海岸には千人熊という塚があり、これは昔クロンボが沖から攻めて来た時に彼らを殺して埋めた場所だという。3月にシオ

祭りを行うが、この時は島間からホイドンを頼み、これら山の神・水神・千人熊・そして門倉岬を順に拝む。昔はエビスも祀っていたが、現在はこれは崎村集落の人が祀っている。

公民館の脇にガジュマルの木がある。詳細は不明だが正月には、この根元で祈祷した札を竹の棒に挟み、5ヵ所の村境に立てる。また、笹川ながこ氏の屋敷の南側にガローがある。雑木林の中に高さ120センチほどの石板があるが、金石文は風化により判読できない。非常に性格の荒い神様だというが詳細は分からない。

転入者は親分という保証人を頼み定住を許される。ただしこの場合でも通常は共有地の権利は永久に与えられず、漁業権も1年ほど様子をみた後に与えられた。現在は3ヶ月ほど居住するという保証があれば漁業組合に加入することができ、漁を行える。転出者は漁業権は放棄するが、共有地の権利は所持し続ける場合が多かった。



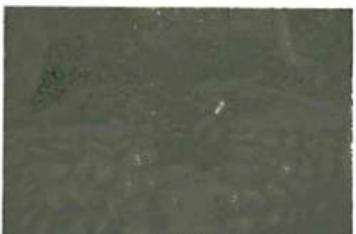
農業の神様を祀る神社（本村）



水神（本村）



ガローヤマの石板（本村）



山の神（本村）



千人熊（本村）



公民館横のガジュマル（本村）

○宇都浦（基永）

吉原の後迫仁十氏の畠付近にガローがあったという。現在は木が生い茂り、近付くことはおろかはっきりとした場所もさえも確認できない。昭和58年刊行の宇土浦郷土誌には、昔はガローには柳の木があり、ここで集落の集会や祭りなどが行われていたと記されている。また小便をすると祟るとされたらしい。



ガローがあったとされるあたり（吉原）

《さいごに》

今回の調査は9日間とはいえ、当地の風土を肌で感じることができた。私にとってはこれが何よりの収穫であったといえる。

冒頭に述べた理由により、非常に皮相的な報告となってしまったことをお詫び申し上げるとともに、多忙極まる中、我々の調査にご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げたい。

南種子町の浦とエビス

鹿児島民具学会会員 砂田 光紀

はじめに

本稿では、南種子町の全域にわたる浦とエビスの現況調査の結果について、写真を副材に紹介する。尚、写真頁は東シナ海側の北端から海岸線に沿って南下し、門倉岬より太平洋側を北上するルートで中種子町との境界線まで順番に構成している。ただし屋久津と梶渦に関しては中種子町の行政区域ではあるが、南種子町との比較資料として重要と考えたため、調査ルートとの位置関係を考慮して冒頭に掲載したものである。

今回の調査に費やした期間は平成6年3月16日午後から3月18日午前までの正味2日間である。このような時間的制約の中で雨天、曇天続いた悪条件のもと十分な調査ができようはずもないが、幸いなことに昭和60年以来、南種子町を訪れるたびに浦関係の聞き書き調査や写真撮影を行った資料があるので補充して報告に供したい。

以下、各浦とエビスの現況について浦ごとの概要を紹介し、聞き書き調査を実施したところについてはその結果を順次掲載する。

浦とエビス概観

1. 中種子町屋久津の浦とエビス (写真1参照)

中種子町の東シナ海側海岸線は町境を越えて南種子町の海岸線へと連続している。屋久津の漁港はその名通り屋久島を望む緩やかな入り江にあって、周辺に集落を形成している。写真に示すようにエビスの小祠は屋久津の浦を望む標高20メートルほどの高台にあって、赤い鳥居の奥、瓦葺きコン

クリート造りでアルミ扉を有する新しいものである。祠の全高は約2メートル、全幅は屋根部が178センチメートル、胴部が124センチメートル、奥行きが135センチメートルで、屋久津漁港の方を向いた建造である。小祠内部には壇が形成され、砂利の上に御神体を立ててある。御神体の自然石は先の尖った円筒状で腹部をめぐる凹状の陰刻を認め、形態からはある時期の五輪塔の空風輪部であろうかと思われる。壇上からの高さは45センチメートル、直径は25センチメートルを測り、壇上の砂利中に御神体を挟む形で2個の小石が埋めてある。壇下の木製の台上には供物として神柴や焼酎を見るが、壇上には賽銭も置かれている。

さて、この新しい小祠の前庭部脇は藪になっているが、エビス小祠に向かって右側に山川石で削り出された小祠が放置されている。新しいエビスの建造に伴って移動されたものであろうか。台座を含む全高は72センチメートル、台座全幅は44センチメートル、胴部の全高32センチメートル、全幅は20センチメートルである。胴部石材には中央に四角形の彫り込みがある。屋根部の石材には垂木の表現なども施され、稚拙な造りではあるが小祠としての趣を感じる。藪の中に倒された形で放置されているが、旧小祠としての価値を考慮してせめて敷地内に立てて保存できないだろうか。全容をとどめる祠であるだけに、このまま埋もれてしまうには惜しい気がする。

2. 中種子町梶渦の浦とエビス (写真2参照)

前述の屋久津と同様に中種子町の行政領域に属する漁港であるが、ここより南の浦は南種子町となり、東シナ海側では中種子町南端の漁港である。半農半漁の集落では

あるが、操舵室付きの小型漁船が多く見られ、スロープなど港の設備も充実している。さて、梶渦のエビスであるが、県道より山手の崖の中腹にあって、なかなか見つけだすのが難しい場所にある。照葉樹に囲まれた祭場には自然石（砂岩）の御神体が立てられているが祠等はない。御神体は地上部で高さ25センチメートル、径17センチメートルを測る。御神体の周辺にはサンゴ石が環状に埋められている。供物には空き缶を利用した神柴立てがあるのみである。エビス祭場は崖面を削って作られた狭い空間で、海側（梶渦浦）を切り開き、柴立ての向きから判断すると海側から拝むエビスである。

3. 稲子泊の浦とエビス

（写真3参照）

東シナ海側では南種子町最北のエビスであるが浦と呼べるような入り江や漁港は現在認められない。海岸沿いに点在する民家の前に築かれた堤防に挟まれた岩礁にエビスを見ることができる。エビスは岩礁のくぼみを利用して祀られているが、御神体を閉む形でコンクリート打設による小祠状の空間を形成し、その入り口は海側に解放している。御神体はサンゴ石で、30~40センチメートルほどの径を測る。御神体の前面に、祭祀に用いたと思われる湯飲みや焼酎瓶が散乱する。小祠の右側には竹製の幟竿が立てられている。地上高は1メートル8センチ、横棒は長さ55センチメートルを測る。幟旗は赤布で、縦70センチメートル、横30センチメートルである。墨によって「平成六年三月十八日 大漁祈願」とある。

4. 島間の浦とエビス

（写真4上段参照）

島間漁港は島間港の東端にあって、漁協、市場施設を備えた良港である。しかし、分佈地図に示すように現在のエビスはこの漁港から東へ約700メートル、幼稚園の隣の樹林の中にある。地元の方のお話によると、戦前はこのエビスは宮松原にあって、海の

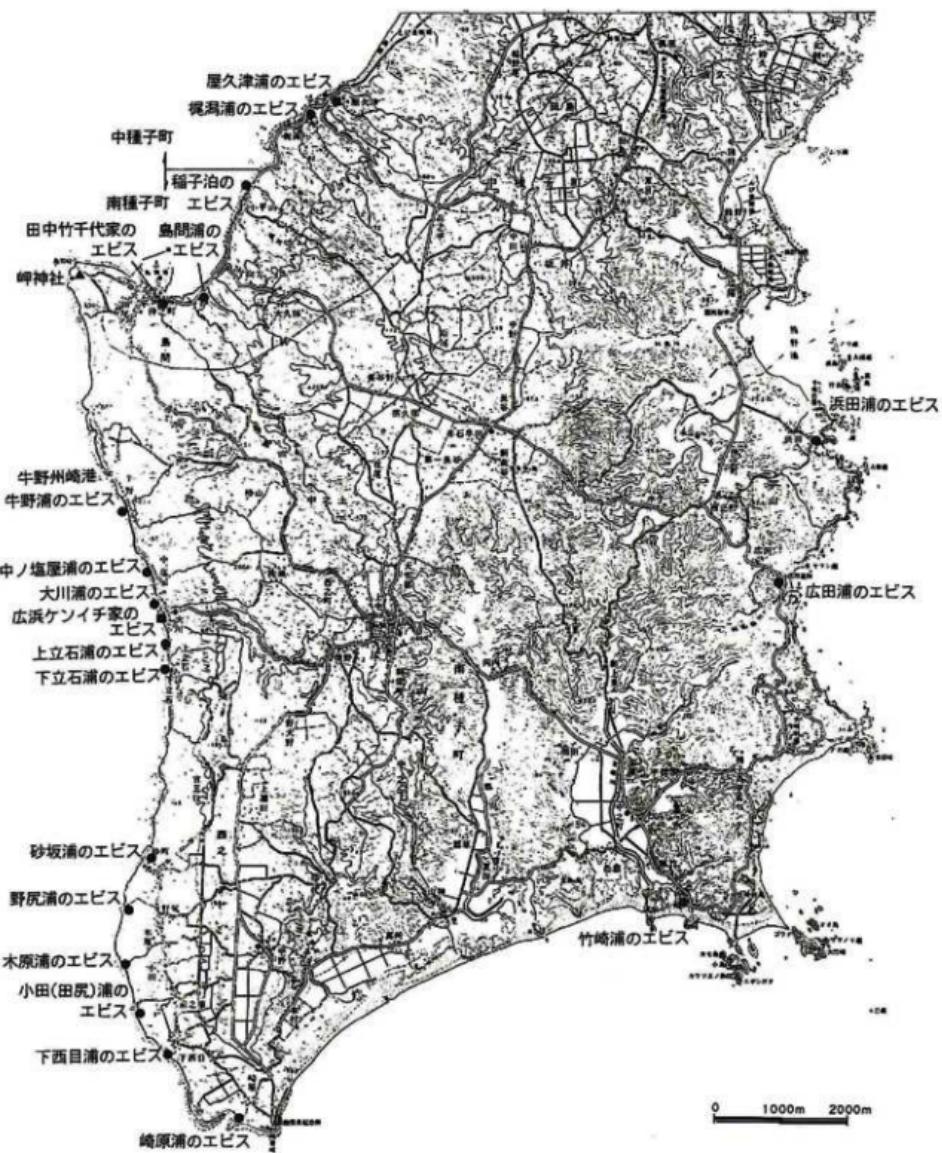
方を向いて建立されていたらしい。その後島間の市街地や港湾は大きく変容し、現在のような位置づけになっている。調査時にエビス祠の扉が閉まっており、御神体や供物は確認できなかった。

5. 田中竹千代家（島間）のエビス （写真4下段参照）

島間仲之町の田中竹千代家には写真に示すような祭壇があり、2体のエビスを祀っている。写真を参考に解説を加えたい。祭壇に向かって左側の異形のサンゴ石は田中家の個人のエビス御神体である。高さは35センチメートル、頂部に赤布をかけてあるが、常時露出した状態で祀られている。中央の木製祠には「ヒキノメノ神様」が祀られている。これはエビスではないが、岬神社（島間崎の岬神社、写真5参照）の神主さんのところと田中家だけにある祈祷の石であり、以前は神主さんのところに保管をお願いしていたが、竹千代氏の母親が病気になってからこちらに引き取って祀っているという。上の祈祷師の方が欲しがったほど効力のある御神体である。右の黒っぽい木製祠（高さ35センチメートル）の中には以前の宮松原のエビスの分神が祀られている。通常は扉が閉められているが、これを開けるときには息を吹きかけると良いと伝える。撮影時も竹千代氏は「フーッ」と何度も息を吹きかけながら御神体を取り出してくださった。御神体は写真に示すとおり、径10センチメートルほどの自然石で、赤い布によって丁寧に包まれている。祭壇上には他に供物として焼酎、水、蠟燭などがあり、花立てには椎の枝が差されている。ただし本来は柳を上げるべきもので、このあたりでは柳が手に入らないために椎の枝で代用しているということであった。祭壇前面には注連縄が張られている。

竹千代氏の説明によると、旧暦1月9日には九日祭りを行い、エビスの着物（赤い布）を取り替え、注連縄も取り替える。その他の時にも魚とりをすると祭壇の一番右のエ

図版1 南種子町の浦とエビス分布地図



ビスに対してはカケノイオを供える。その時に捕れた魚なら何でもよく、雄雌どちらでも良いが、2匹の魚を頭のところでつないだものである。また、塩をする場合にはこの尻尾（尾ひれ）を切り取る。昔は浦ガシラ（浦頭）がカケノイオと御神酒を供えていた。このあたりではベンザンは知らないと言う。

御神酒を運ぶための木箱は現在竹千代氏が大切に保管している。箱は丁寧な造りで、高さ21.5センチメートル、幅23センチメートル、奥行き10センチメートル。内部は2つに仕切られていて蓋付きである。宮松原があった頃にはそこのエビスで「タノミノセク」をやっていた。旧暦の9月9日、「カジョウガネ」と「オーニサー、コニサー」という2つの踊りを奉納していた。昨年この踊りを復活しようと皆で練習したが、結局できなかった。田中家のエビスも以前は屋外にあって、漁協のガジュマルのところ（現船川ガソリンスタンド付近）に祀られていた。当時も田中家のエビスであったが、付近の人々は拝んでいたという。竹千代氏によると、島間のエビスは親分として幼稚園の隣のものがあるが、他に稻子泊、田中家、小西家のものがあるということである。女性はエビスを触ることができない。また、月のものがある時には更にエビスに近づくことはできない。

調査日：平成6年3月16日

伝承者：田中 竹千代氏

大正15年10月20日生

6. 船川勝家（島間仲之町）のフナダメ（エビス）

島間仲之町の漁港裏にある船川家には写真5（下段）に示すような木製小祠がある。小祠内部にはサンゴ片が祀られていて、その前面にはエビス木像が置かれている。船川氏はこの神様の機能を「ふなだま」と説明されたが、エビスであるか船靈であるか、明確には認識されていないようである。た

だ、エビス木像が置かれていることから本来エビスとして機能していた可能性は高い。伝承の課程でその意味が失われたものと考えられる。

調査日：平成6年3月18日

7. 牛野の浦とエビス

（写真6、7参照）

南種子町牛野は島間崎の南約4キロにあって、海沿いの狭い平地に南北に形成された集落である。浦は以前、牛野集落の前にあった。現在はその形跡はなく、エビスのみが残されている。現在の浦は写真に示す州崎港である。この港は出入りが便利なために移されたもので、30年ほど前から使われている。牛野漁港は種子島で最後まで丸木舟（刺り舟）が使われたところである。現在も牛野春義氏所有の丸木舟は櫓漕ぎのまま使用されているが、これが種子島最後の現役丸木舟である。エビスは先述のとおり旧牛野浦の海岸でそのまま信仰されている。

牛野のエビスは海岸の堤防前にある岩礁上に築かれている。海側から岩礁に登ると2本の自然石の立石（高さ約1メートル）があって、その横に階段がある。階段上はコンクリートで張り床がなされ（幅1メートル、奥行き60センチメートル）、岩礁の前面に壁が作られている。壁の内側には岩礁のえぐれた部分があり、ここに御神体の自然石を納める。なお、岩礁の頂部には50センチメートルから1メートルほどの細長い自然石が何本も集積して立てられている。

さて、御神体や祭祀について牛野シンスケ氏にうかがったお話を述べておきたい。エビスの御神体は沖の石をメガネを使わずに拾ってきたもので、台風の時には流されたこともあった。以前は3月の神社の春祭りの時に牧の神と一緒に祀っていた。しかし港は港で別にしようということになり、5月にウラマツリとして行うことになったという。また、魚が捕れたり、ナガラメが解禁になった時点でも村の者や船主が集まってやる

ことにしていて。祭りの時に立てるハタは1本で、幅約20センチメートル、長さ3尺ほどである。このハタの色は祭りの内容によって決まっている。ウラマツリの場合は赤、秋の祭り（11月10日）には白、大漁の時には必ず赤、9月のガンドキには白である。正月2日のナマツリにはエビスには行かない。エビスの祭りに関する責任者は浦長が1人、ベンザシが4人決まっている。ベンザシは港での神様の接待役で、浦の役員でもあり、漁の時に分配に対して力を持っている。

調査日：平成6年3月16日

伝承者：牛野シンスケ氏

（大正13年3月15日生）

8. 中ノ塩屋の浦とエビス

（写真8参照）

牛野の浦から更に南下すると中ノ塩屋の浦がある。浦は周辺の岩礁を寄せて港状にした簡単なもので、漁港形成以前の原初的な浦の風景を彷彿とさせる貴重な様相を呈する。写真8に示すように干潮時にはその様子がよくわかる。さて、エビスは浦の南側にあって大きめの岩礁状に自然石を使って小祠が形成されている。岩礁はかなりの大きさがあるが、階段等の施設ではなく、よじ登らなくては祭場を望むことはできない。自然石の小祠は高さ約40~50センチメートル、幅40センチメートル、奥行き60センチメートルで海側には囲いや扉ではなく、御神体を直接押むことができる。御神体の自然石は小祠の床石とともにコンクリートで岩に固定されている。その高さは18センチメートル、幅は8センチメートルの砂岩である。

さて、このエビスに関わる浦役は2名いる。彼らはベンザシと呼ばれ、船や網を持っており人1名、これらを持たない準会員1名によって構成され、一年交代で1名がウランカシラ（浦頭）を務める。ウランカシラは会計役でもある。こうしたベンザシは中ノ塩屋と大川の両方の浦で4名いる。ウラマツリ

は大川と中ノ塩屋が同じ日にやる。前回は新暦の6月5日であったが、日は明確には決まっていない。下中の神主がやってくるが都合の悪いときには島間から来てもらう。秋のマツリもしているようだ。

調査日：平成6年3月17日

伝承者：大石ミチエ氏

（大正10年11月15日生）

9. 大川の浦とエビス

（写真9参照）

大川浦は現在、漁港として整備されている。集落は周辺の漁村と同様に海岸沿いの狭い平地に形成されているが、上中方面から降りてくる道が三叉路を形成し、交通上は便利なところである。港内には最近まで薩摩型などの木造船も多く見られたが、近年になってすっかりFRP船が台頭してきた感がある。エビスは港よりも北側の大きな岩礁の頂部に形成されている。エビス祭場は若干コンクリートで塗られてはいるが、自然石造りの小祠をオカ側では丸石の石積みで支えた素朴な構造である。自然石の小祠は高さ、幅、奥行きともに60センチメートルを測り、海側に解放している。御神体はコンクリートで固定された自然石であったと思われるが、風化著しく、尖った岩片の一部がかろうじてその形態をとどめている。エビス祭場にはエビスに向かって右側にハタが立てられている。これは白い布製で「平成五年九月吉日 エビス大明口（欠損、「神」であろう）大川浦」と墨書きされている。大川の漁民でも最も長老である大川助蔵氏のお話を記録しておく。

昔はトビウオがたくさん捕れたので一生懸命信仰した。昭和初めまで捕れたが大正7~8年が全盛だった。4月には祈願祭、10月には願成就を行い、このときには白いハタを立てた。赤いハタはマンノクヨウ（万の供養）の時に立てた。そして供養石を立てた。「イオ（魚）を万殺したら人を一人殺したと同じ」と言われていた。供養石は浜

でいい石を捜して赤いハチマキをしてエビスのところに立てた。神職さんか寺の人を呼んだ。漁があるときには港に入ったらまことにエビス様と氏神様に上げ、それから分配した。そのとき「カケノイオ」をして頭は神様の方を向けた。フナイワイの日は船のお祭りの日であり、このときにはエビス様には参らない。船の神様は女だがエビスはそうは言わない。海の方を向いているのは海を見てもらうためで、大漁祈願が中心である。願成就の時には「アンジョウオドリ」という踊りがあり、今でも行っているようだ。

浦の大将はベンザシである。ベンザシは順番が決まっていて1人前のアタリ（配分）が与えられる。ベンザシが浦に関係のある仕事はみなやることになっている。現在は4名である（うち2名は中ノ塙屋に関係するものか）。漁をする人はシソク（四つ足）ものは食べてはいけなかった。神主などはシソクもの、二足ものは食べない。西海岸、特に砂浜あたりは今でもこれを厳しく言う。

ガンジョウジ（願成就）には海の幸（魚、昆布）と山の幸（米、塩、大豆）を供える。漁をしたときの分配は「アタリ」と呼ばれ、個人用とイエクズに二分される。個人用は3人前の本アタリと1人半のダキゴに分けられ、親子で漁に行くと子どもの配分はダキゴになる。イエクズの分配は一家一軒に対し漁に行っても行かなくても1人前ずつが与えられる。また、自分の家の箱を持って行き、人数の分だけテクズと呼ばれる小石を入れておくとそれに応じた配分が与えられる。これらの分配はすべてベンザシの仕事である。最近ではカマスを分配することが多い。地引き網で捕って築港に引き上げる。魚をよく配当したらマンが良く、エビスが喜んで漁があると昔のじいさんたちは言っていたので、通りかかって手伝った人にもアタリを与えていた。高校からは1人前だったが、小学生は3分の1ぐらいだった。学校のない日は子どもたちも漁を手伝っていた。

調査日：平成6年3月17日

伝承者：大川助蔵氏

（明治36年2月10日生）

10. 広浜ケンイチ家（大川）のエビス （写真10参照）

大川漁港の側近に広浜ケンイチ家のエビス小祠がある。港の南側の岩礁上に築かれたコンクリート製の小祠は個人所有のエビスではあるが大切に信仰されている。写真是平成3年元旦に撮影したものである。したがって正月飾りと注連縄の状況を見ることができる。岩礁頂部に作られた小祠の中に御神体の自然石が置かれている。小祠前の両側にはビニールパイプが埋め込まれていて正月飾り等を縛り付けるようになっている。ここには笹、松、ユズリハ、ウラジロ、シイシバ（マテバシイ）がまとめて立てられており、これらが3本の縄で縛られている。そして向かって左側の飾りものに注連縄が結ばれているが、注連縄は元旦の戸隠には写真のように垂らされたままになっていた。注連縄にもダイダイやユズリハがつけられている。更に小祠内の花立てには松とウラジロが立てられている。御神体前にはウラジロに乗せる形でユズリハ、小石などが供えられている。ところで、このエビスの近くには同様のコンクリート小祠があって、丸石の御神体が祀られているが、これは上立石の水神であり、エビスとは関係がない。したがって正月に調査した際にも正月飾りの痕跡等は全く見られなかった。

11. 上立石の浦とエビス

（写真11参照）

大川浦から500メートルほど南へ行ったところに上立石の漁港とエビスがある。漁港は写真に示すように堤防と自然の岩礁を利用したもので、北側の堤防脇の岩礁上にエビスを祀る。エビスの岩礁にはコンクリート製の階段がつけられており、これを登るとコンクリート製の祭場があって御神体が壇上に固定されている。祠はない。祭場の

広さは2平方メートル程度で、左側に高さ70センチメートル、右側に高さ83センチメートルの立石を配し、御神体はその奥に立てられている。御神体の高さは地上部で57センチメートル、幅が最大で35センチメートルを測る。祭場の造りから、このエビスも海側から拝むものであることが明確にわかる。

12. 下立石の浦とエビス

(写真12参照)

上立石浦から更に若干南下すると下立石の浦に至る。ここもコンクリート製の防波堤と岩礁によって形成された小港で、浦の北側の大きな瀬にエビスが祀られている。この瀬の中腹にはエビスの御神体がコンクリートで固定されているが、祠等は見られない。御神体は自然石でちょうど人間の上半身のような形態を呈し、見ようによつては仏像(座像)のようにも見える。その高さは地上部で53センチメートル、幅45センチメートル、厚さ25センチメートルを測る。また、頭部に当たる部分の幅は18センチメートルほどである。石質はエビスのある岩礁とは違つて見えるが、砂岩のようである。岩礁の南側に位置し、エビス自身の向きは浦と海の両方を一望する状態である。

13. 砂坂の浦とエビス

(写真13参照)

下立石から南の海岸線は道路が殆どなく、集落や浦も砂坂までの長い距離にわたって形成していない。砂坂集落は海浜部よりもむしろ高台側にあって、緩斜面に形成されている。そこから降り立った浦は堤防に囲まれた整備された漁港である。その後背地の斜面中にエビスが祀られている。コンクリート製の小祠にはサッシの扉がついており、中には御神体の木製小祠が見える。今回、その木製小祠の内部までは実見するに至らなかった。

14. 野尻の浦とエビス

(写真14参照)

砂坂と同様に集落は高台の方にあり、浦の周辺に人家はない。野尻浦は堤防と岩礁に囲まれた小港で、設備等も整つてはいない。漁船の数も少ない。この港の後背に迫る丘の上に木製の鳥居とエビス小祠がある。小祠はコンクリートと木を使って作られ、高さ1メートル、幅80センチメートルを測る。内部に御神体の細長い自然石が納められている。御神体は幅5センチメートル、長さ80センチメートル~1メートルの鎧状の黒っぽい石で、横たえられた形で納められている。他に若干の丸石や酒瓶、猪口、小壺、賽銭などの供物を見る。小祠の前面、鳥居とともに注連縄を施されている。エビスは海側を向いていている。

15. 木原の浦とエビス

(写真15参照)

野尻浦の南の木原浦も高台にある集落から離れており、海岸に向かって下る一本の道路によって集落と連絡している。ここも岩礁と堤防で囲まれた小さな浦であり、漁船数もきわめて少ない。ちなみに写真撮影時には一隻のボート(伝馬)の係留を見るのみであった。浦よりも若干南側の海沿いの照葉樹林中にエビスが祀られている。写真に示すように木製のいびつな形を呈する鳥居をくぐるとコンクリート製の小祠があり、前面には板で蓋がしてあった。小祠の高さは93センチメートル、幅は56センチメートルで屋根の頂部にはサンゴで装飾を施してある。小祠内には御神体が納められている。御神体は高さ40センチメートル、幅35センチメートルの黒っぽい自然石である。更に供物として砂潮斎が御神体の両側に配され、前面には焼酎や賽銭、柴などを供える。小祠の裏には白いハタも見える。小祠の前面には左右に臼状の珊瑚を配してある。この小祠は丸石を積んだ壇上に形成されるが、祭祀空間全体は丸石を積んで作られ、コンクリートで張り床を形成している。

ここでも鳥居、小祠ともに注連縄を張っている。

16. 小田・田尻の浦とエビス

(写真16参照)

木原の浦の南、小田田尻の浦も集落から離れ、海岸に下ったところに形成されている。ここは野尻や木原の浦と比較すると大きな漁港の様相を呈する。エビスは港の後背地の斜面中にあって、ここも鬱蒼と茂る照葉樹林の中にある。コンクリート製の小祠は高さ95センチメートル、幅70センチメートルで、前面は海側に解放されている。小祠内の御神体は直径30センチメートルほどの自然石である。更に焼酎と賽銭が供物として小祠内に供えられ、小祠の外側には両側に木原浦の小祠内にあったような潮齋が供えられている。潮齋は3カ所で轉されている。潮齋を押さえる形で丸石2個が配され、小祠の前面には注連縄が張られている。

17. 下西目の浦とエビス

(写真17上段参照)

下西目浦は小田田尻の浦より更に南にあって、ここも集落から離れ下ったところに浦を形成している。コンクリート製堤防で囲まれた港であるが漁船数は少ない。港から道路沿いに登る途中の岩山にエビス小祠がある。ここは箱形のコンクリート小祠で、高さ73センチメートル、幅72センチメートル、奥行き62センチメートルを測り、わずかに家型に屋根を傾斜させてある。前面にはサッシの扉があり、注連縄を張っている。小祠中には御神体の丸石のみが2個納められており、それぞれ直径20センチメートルと30センチメートルである。小祠前面は海側を向き、その左右には柴を立てるパイプが埋め込まれている。

18. 峠原の浦とエビス

(写真17下段参照)

峠原の浦は南種子町最南端の浦であり、種子島で最も南の港である。砂坂以南の他の

浦と同様に集落は高台にあって、浦は集落から離れている。港は堤防が整備されているが更に工事中で、漁船数は少ない。エビスはここも浦の後背の照葉樹林中にあって、高さ93センチメートル、幅58センチメートルのコンクリート製小祠が築かれている。海側は解放されており、高さ48センチメートル、幅42センチメートルの開口部を有する。中には御神体のサンゴが2体納められており、片方は白いサンゴ、もう一方は朱色のサンゴでともに20センチメートルほどの径である。写真のとおり、御神体を囲むように潮齋が供えられ、その前面に蝦夷立て、湯飲み、線香立て、貝殻製の皿などが供物となっている。

19. 門倉岬～竹崎の海岸線について

(写真18上段参照)

鉄砲伝来で知られる門倉岬から東の太平洋側の海岸線は一部断崖を成すが、写真18上段に示すように長い砂浜を形成し、漁船の係留には適さない地形である。砂浜から続く平地には海岸線に並行して町道が走り、耕地を伴う集落が発達している。竹崎に至るまでのこの海岸線に現在、浦もエビスも全く認められない。しかしこの砂浜でも里集落の南の海岸には戦前には漁をする人もいて、エビスも祀られていたという。現在、里集落からは耕地の間と照葉樹林を抜けて海岸に出る未舗装の道がある。海岸に出てみると想像以上に広い砂丘が形成されていることがわかる。砂丘はここで一旦切れしており、ここから東には断崖が形成されていることがわかる。船を係留またはオカ上げして風や嵐から守るには周辺ではここが適地であったことが容易に想像できる。しかし、周辺を散策しても浦やエビスの痕跡は全く見当たらなかった。静かな砂丘が続くのみである。

20. 竹崎の浦とエビス

(写真18参照)

竹崎集落は宇宙センターの入り口に位置

する。ここに近年になってコスモリゾートが完成し、ホテル等が建設されている。竹崎浦のエビスはこのリゾートへの導入路の傍ら、海側に祀られている。以前は道路よりも山側の若干高い位置に祠が作られていたが、リゾートの浄化槽建設に伴って現在の位置に移転した。このエビスはロケット射場下の浦のエビスをも合祀したものである。現在、竹崎の漁船は竹崎射場下の漁港の方に係留されている。新しいエビス小祠はコンクリート製で彩色を施し、鳥居を伴う立派なものである。次に、旧エビス小祠に伴う碑文の概略を記す。

恵比須神社碑文

(表)

屋船久々能智神	手置帆負神
奉斎 八意思廉神	
社殿新築祈啓攸	
屋船豈受媛神	彦狄知神

(裏)

起工昭和三十七年一月十五日 建設委員
長兼弁指 山下重吉
上棟昭和三十七年二月三日
竣工昭和三十七年二月六日
以下略
本殿正遷座祭竣工に同

塙大崎集落はロケット射場の建設に伴い、集落が移転したために現在は浦もエビスもない。昭和48年に塙永公民館が発行した『塙永郷土誌』によると、大崎の浦があった頃には集落の氏神が恵比須神社であり、年に2回の浦祝いが行われ、亀の肉が振る舞われていたという。

21. 広田の浦とエビス

(写真19参照)

ロケット射場の関係で竹崎～広田間には浦やエビスはない。広田の浦は入り組んだ断崖の入り江を利用した良港である。現在も大規模な港湾工事が進んでいる。写真に

見るに太平洋とは高い崖によって隔離されており、風波に強い港であることがわかる。広田浦のエビスは港より北にあって、東側に広田遺跡に隣接する砂浜を望み、洞窟状の蒸し風呂を有する崖の中腹に形成されている。祠はコンクリート造りで内部には木製小祠を納め、焼酎や神などの供物が認められる。

22. 浜田の浦とエビス

(写真20参照)

大字平山周辺は入り組んだ海岸線を持ち、一見漁業の基地には適しているようにも見えるが地形が急峻なために人を寄せ付けず、集落や浦を形成していない。広田～浜田間に海岸沿いの道路もなく、一本だけ作られた温泉用の未舗装道路から海岸に出てみたが、周囲に漁船の係留地やエビス等はいらっしゃい認められなかった。したがって南種子町の東海岸、太平洋側の北端の港は浜田漁港である。高い断崖に囲まれた入り江に形成された浜田港は波の静かな良港で、市場や冷蔵などの施設も整っている。漁船数も少なくない。エビスは港の奥の低地にあって、漁協施設の隣に位置する。鳥居の奥にはコンクリート製朱塗りの祠が築かれている。祠の高さは1.7メートル、幅は1メートル54センチを測る。サッシ製の引き戸の奥には御神体の自然石が見られる。御神体は高さ約60センチメートル、多孔性の黒っぽい石で、石製の台座に乗せられている。御神体の脇には水色の幕布も下げられている。祠の前には両側に柴を立ててある。エビス小祠の開口部は港の方を向いている。

総括

以上、南種子町の浦とエビスに関する悉皆調査の結果を、概略で報告した。使用した写真は大部分が平成6年3月16日～18日の撮影であるが、旧西海地区の写真（牛野、中ノ塙屋、大川、上立石）に限っては一部、

昭和60年、61年、62年、平成2年、3年、4年、5年撮影のものを使用している。これまでの調査を通じて観察することのできた南種子町のエビスに関する総括をここに述べておきたい。

南種子町のエビスには形態的な一貫性が認められる。それは御神体の性質と向きである。全体を通してみると御神体は殆どが自然石である。大きさや形態には差異があるとしても、石に呪力を見いだしてエビスとして祀り上げた例が多いことは注目に値する。本土に一般的な、あの釣竿と鰯を抱えた「エビス座像」は今回の調査ではわずかに島間の個人蔵のものを見たに過ぎず、浦の守護神、大漁祈願の拝り所として多くの漁民に信仰される浦エビスには神の姿を具現化したいわゆる「恵比須」の偶像是伝承を見ていません。

下野敏見氏や川崎晃稔氏のエビスに関する報告、論文にもこれらのこととは指摘されている。これに対して同じ大隅諸島でも隣の屋久島の場合は若干様相が異なる。筆者自身も上屋久町から屋久町にわたる屋久島の海岸線についてかなりの数のエビスを調査、撮影してきたが、その御神体の多くは木製や石製のエビス神像であった。安房の北岸にある彩色された木製エビス像などは千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館にも複製が展示されている。こうしたエビス神像の伝播を見ないまでも、エビス信仰の神體である大漁祈願とその祭祀は南種子に普遍的に存在する。

南西諸島でも種子島以南の島嶼群の実状から考えると、下野氏の指摘のとおり神像を伴うエビス信仰の伝播境界を示す現象と考えるのが妥当であろうが、いつでも望めるほどの近距離にある屋久島の現状を考えると課題も残る。石を素材とするこのような信仰はこの地域におけるエビス信仰の特色を示すとともに、大川の供養石の例からもわかるように立石に意味を見いだす種子島独自の信仰觀とも密接な関係をもつものと考えられよう。実際、多くの場合に小祠

に納められた御神体も含めて自然石を縦位に自立させたものが多く、そのために御神体をコンクリートで固定したものが多く見られるのである。法華宗の台頭やその信仰觀なども考慮しながら当地のエビスが神像の形態をとらなかった理由を更に追求する必要があると考える。

さて、報告からわかるようにすべてのエビスは海側を向いている。これは下野氏の常々指摘されるエビスの性格であるが、今回の調査でも例外はなかった。特徴的だったのは旧西南海域のエビスに限っては、その祭場が海中に位置づけられていたことである。牛野、中ノ塩屋、大川、上立石、下立石ともに海中とも呼べる位置に祭場を設け、エビス越しに屋久島を望む。浦と最も近い位置にあると同時に、漁場と近い位置にエビスがあることを実感させた。この地域に関しては集落が海岸線に沿っており、海に迫っているという地形的な特性も作用しているのだろう。これに対して北の屋久津、梶渕、南の砂坂～崎原、更に東海岸の浦々のエビスは後背地の若干高台になったところにあって、照葉樹の合間から浦を見おろしている感が強い。集落との位置関係や地形的特性、そしてエビスの視点という観点からも地域性を示す現象であると思う。あるいは砂坂以南よりも波が静かと言われる西南海域が、御神体を波にさらわれにくかったという潮流の影響も考えられるのだろうか。

当該地域のエビス祭祀に関する有形的な視点での課題は、奉納旗の色である。牛野や大川ではエビス祭祀の際に立てられる奉納旗は白と赤を使い分けている。伝承によると大漁祈願や願成就の際には必ず白い旗を立て、万の供養や大漁時には赤い旗を立てている。トビウオ漁全盛期の供養石につけた赤いハチマキもこうした色の持つ象徴性を顕著に示している。これらの地域では白は魚群を呼び寄せる色であり、赤は魚雲を鎮める効力を持つ色として認識されているようだ。牛野では「メン（海上に現れる

妖怪)」よけに赤い実を持参するという伝承(1990年、海江田義広による調査)もあり、その関連性が指摘できよう。また、この地域は亀が陸に上がっても捕獲しない習俗があり、もし陸に上がった場合は焼酎を飲ませ、赤い布や糸を頭部につけて海に帰してやるという伝承も一般的で、亀を食する東海岸地域とは異なっている。このように、エビスの旗が示す色彩の特性には地域の人々の精神性も色濃く反映されているようである。

今回の調査では時間的な制約もあって各浦のエビスの形態調査に終始せざるを得なかったが、今後は伝承や祭祀の詳細調査の機会を得たいと考えている。稚拙な内容ではあるが、本報告が今後のエビス信仰研究ならびに南種子町の民俗に関する調査研究に少しでも役立てば幸いである。

最後に、これまでの私の調査に対し、ご協力を賜った多くの伝承者の方々、特に来島の度にお話をお聞かせいただいている牛野の皆様や、大川の大川助蔵氏、こうして発表の機会を与えてくださった下野先生、南種子町の皆様に心よりお礼申し上げたい。また、縁あって遺言により丸木舟を本土の博物館にご寄贈賜り、後世への貴重な遺産をご提供くださった故広浜孫七氏、その展示のために風雨をついて牛野浦の石を一つ一つ拾い、博物館に搬送してくれたものの、このエビス調査の直後にこの世を去った私の亡父、更にエビス、丸木舟の研究に偉大な軌跡を残しながらも志半ばにして去られた川崎晃穂先生の御靈前に、この拙い報告を捧げたい。

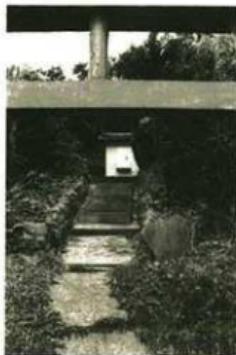
写真1 中種子町屋久津の浦とエビス（比較資料）
(写真1~20は撮影砂田光紀)



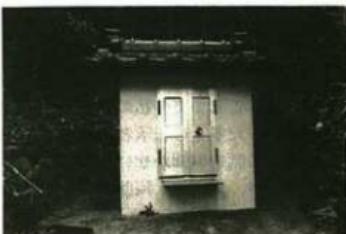
屋久津浦のエビス



屋久津漁港（エビスより望む）



同 上



エビス小祠



エビス御神体と供物



エビス敷地内に放置された
山川石の古い小祠

写真2 中種子町梶潟の浦とエビス（比較資料）



梶潟浦（南より望む）



エビス祭場より梶潟浦を望む



梶潟浦のエビス祭場



エビス御神体の丸石

写真3 稲子泊のエビス



稻子泊のエビス（海側より望む）



同 左



オカ側より見たエビスの岩



エビス祭場



エビスの右側に赤い折扇を見る



エビス御神体と供物

写真4 島間の浦とエビス



島間漁港



島間浦のエビス

田中竹千代家（島間）のエビス



エビスの祭壇



オミキ（御神酒を運ぶための箱）



田中家のエビス御神体
(赤い布に包まれている)



宮松原のエビスの分神
(赤い布に包まれている)

写真5 島間崎岬神社



島間崎灯台



岬神社



島間仲之町 船川勝家の小祠
(当家では、フナダマともエピストも解釈しているが、
木製エピス像も祀られている)

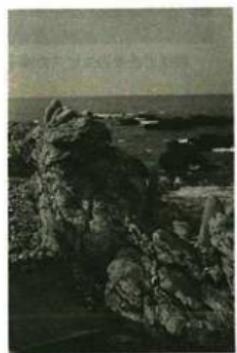
写真6 牛野の浦とエビス①



牛野・州崎浦（南側より望む）



牛野・州崎浦



旧牛野浦とエビス（才力側より望む）



夕刻の牛野浦のエビス頂部



牛野浦のエビス



牛野浦のエビス（海側より望む）



エビス頂部に積まれた石群

写真7 牛野の浦とエビス②



牛野浦のエビス（南側の海岸より望む）



願ほどき後のエビスの様子



通常のエビス祭場



祭祀後のエビス祭場



エビス頂部の立石群



エビス御神体

写真8 中ノ塩屋の浦とエビス



中ノ塩屋浦を南側より望む
(左側がエビス)



中ノ塩屋浦を北側より望む



中ノ塩屋浦のエビス
(オカ側より望む)



中ノ塩屋浦のエビス



中ノ塩屋浦のエビス (海側より望む)



中ノ塩屋浦のエビス祭場



自然石の小祠と御神体

写真9 大川の浦とエビス



大川浦（北側より望む）



大川浦（南側より望む）



大川浦のエビス



大川浦の漁船



オカ側より望むエビス



エビス様に立てられた白い折願旗



エビス祭場（自然石の小祠）

写真10 大川の浦広浜ケンイチ家のエビス



大川浦と広浜家のエビス
(右側・左は上立石の水神祠)



大川浦・広浜家のエビスを才力倒より望む



正月飾りを施した大川浦の漁船



エビス御神体と正月の供物



大川浦・広浜家のエビスを海側より望む



エビス祭場と正月飾り



エビスの正月飾りとシメナワ

写真11 上立石の浦とエビス



上立石浦



上立石浦のエビス（浦の北側にある）



上立石浦のエビスを南より望む



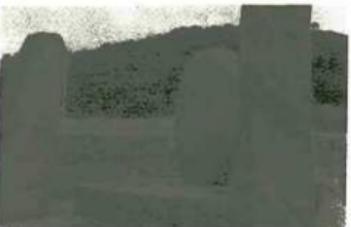
正月飾りを残すエビス



エビス祭場



海側より望む上立石浦のエビス



エビス御神体（中央の丸石）

写真12 下立石の浦とエビス



下立石浦（北側より望む）



下立石浦とエビスを祀る岩（南側より望む）



エビスを祀る大岩（立石）



エビス祭場



下立石浦のエビス（岩の中腹）



エビス御神体

写真13 砂坂の浦とエビス



砂坂浦（南より望む）



砂坂浦のエビス

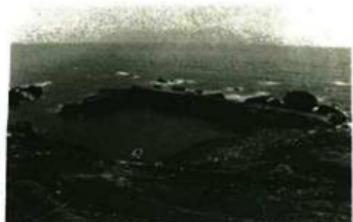


エビス小祠



小祠の内部

写真14 野尻の浦とエビス



野尻浦（エビスより望む）



野尻浦のエビス



エビス鳥居



エビス小祠



エビス祭場



エビス御神体（奥の横長の黒い自然石）

写真15 木原の浦とエビス



木原浦



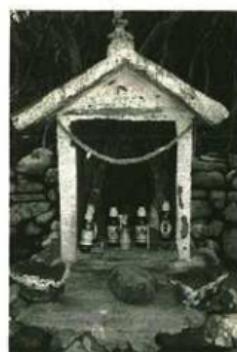
木原浦のエビス



エビスより東シナ海を望む



エビス小祠



エビス御神体（祠奥の石）と供物

写真16 小田・田尻の浦とエビス



小田・田尻浦（南より望む）



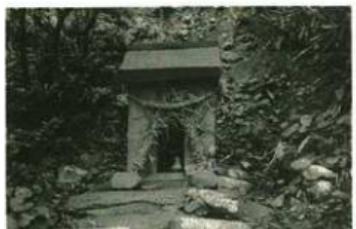
同 左



小田・田尻浦のエビス



エビス御神体（洞奥の黒い石）



エビス小祠

写真17 下西目の浦とエビス



下西目浦（エビスより望む）



下西目浦のエビス



下西目浦のエビス



エビス小祠（御神体の丸石2個を納める）



崎原浦のエビス小祠



崎原浦



エビス御神体

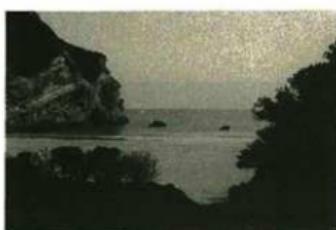
写真18 竹崎の浦とエビス



門倉崎から竹崎に至る砂浜の海岸線



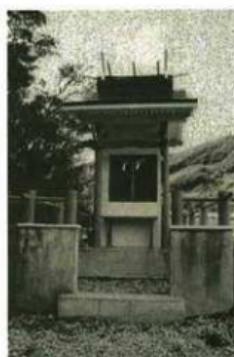
崎原浦のエビス跡



竹崎エビス前の入り江



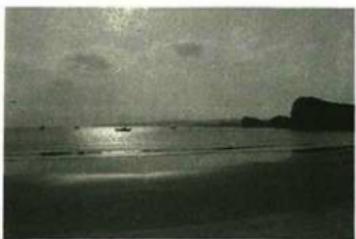
竹崎浦の新しいエビス



竹崎浦の新しいエビス小祠



— 竹崎漁港 (竹崎射場前)



竹崎沖で操業中の漁船

写真19 広田の浦とエビス



広田浦（南側より望む）



広田浦（西側より望む）



広田浦のエビス



エビス前の海岸（広田遺跡前）



エビス小祠の内部

写真20 浜田の浦とエビス



浜田浦（南側より望む）



浜田浦のエビス



エビス御神体（奥の黒い丸石）

遊び道具

首藤由美子

1. はじめに

子供が自分の部屋を持つようになり、買ったてきた物でしか遊ばない今の時代とは違い、昔は子供達自身が自然の中で工夫し、作り出しながら遊んだ。

そのようにして遊ばれてきた遊びには、どのようなものがあったのか、1つでも多く知る事が出来れば、と思い調査にあたった。

2. 概観

男の子は男の子同士、女の子は女の子同士で遊んだ。普段の遊びは沢山の種類が聞かれたが、正月や盆など行事のある時にする特別な遊びはなく、羽根つき、風あげ、カルタとりはほとんどしなかったという事だった。

次に主な遊びの解説をしていこうと思う。

○男の子の遊び

(1) ギッチャ

木の台に竹の棒を立て掛けておく。その棒を別の竹の棒で叩いて空中に飛び上がらせ、空中に上がっているうちにもう一度叩いて遠くへ飛ばす。一番遠くへ飛ばした人が勝ち。

図①



(2) ネン

木の先を尖らせたものを地面に投げて突き刺し、相手がこれを倒そうとしてまた木の棒を投げて突き刺す。2人で投げ付け合って競う。

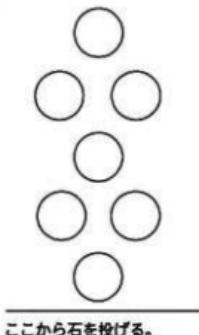
(3) ナンコ (箸戦)

木や竹で作った、丸くて平たい物や棒状の物を4,5個用意しておき、いくつかを手に握る。手の中に何個入っているかを相手が当てる。

(4) マルケン

直径1m程の円を地面にいくつか描き、手前の線から小石を投げる。小石が入った円までケンケン(片足跳び)をして小石を取りに行き、戻ってくる。成功すると点数をもらえる。5番目の円は5点、4番目の円は4点、という風に点数をつける。

図②



(5) 名称不明

5, 6人ずつの2チームに分かれる。一方のチームは1列に並んで、体をかがめ頭を前の人々の腰につけて、馬になる。先頭の人は立っている。もう一方のチームは、1人ずつこの列に走って行って、できるだけ遠くへ飛び乗る。飛び乗った所から、先頭に立っ

ている人とジャンケンをする。多く勝った方のチームが勝ち。次は、勝ったチームが飛び乗る方になり、負けたチームが馬になる。

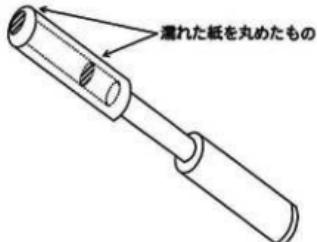
図③



(6) 竹鉄砲

マタケを切って、筒状のものを1本、片方の穴が節になって塞がっているものを1本取る。筒の方には、紙を濡らして丸めたもの（昔は杉やヤツデの実）を、両方の穴に詰める。片方が塞がっている方には、マタケの先の方の細い部分を穴に差し込む。これが弾を押す方になる。1つ目の弾を押すと、反対側の2つ目の弾が中の空気に押されて飛び出す。

図④



(7) その他

独楽回し、マゴマワシ（桶のたがを回す）、相撲、陣取り、布製の小袋に真砂を入れて投げ合ひ遊び、とりもちによる小鳥（主にメジロ）の捕獲、草笛。

○女の子の遊び

(1) お手玉

ズイダマ（数珠玉）を袋の中に入れる。麦や大豆、貝殻を入れることもあった。貝殻や小石を手の甲にのせて空中で握む、という遊びもあった。

(2) ハジコ（おはじき）

ガラスや瀬戸物のかけらの角を叩いて丸くしたもののや貝殻を使った。

(3) まりつき

縞や苔の枯れたものを糸で模様をつけながら巻いて、母親がまりを作ってくれた。その後、ゴムまりに変わっていった。これとは別に、草を丸めて紐で巻いてまりの形にし、落とし玉をしたり、投げ合ったりする遊びがあった。

まりつきは、普段から女の子が最もよくやる遊びで、正月の遊びもまりつきだった。

(4) 名称不明

箸を3本、手に軽く持ててじっとしていると、箸にキツネの神様が乗り移って箸が揺れだす、という遊びがあった。

(5) その他

ままごと、なわとび、下駄飛ばし（天気占い）。

3. 民具解説

竹鉄砲 宇都浦 大崎 蘭市

棒を筒に差し込んだ状態で、長さ21.7cm。筒の方の長さ12cm。直径1.6cm。弾を押し出す棒の長さ11.5cm。直径0.7cm。マタケ製。握る方の竹は手元が節になっている。筒の両方の穴に、紙を濡らして丸めたものを詰めている。1つ目の弾を押し込むと、中の空気に押されて2つ目の弾が飛び出しきみになっている。



竹鉄砲 宇都浦 大崎 蘇市



濡らした紙をまるめて詰める

竹鉄砲の製作過程



適当な長さに切る



細い棒を差し込む



抜けないように叩いて奥まで差し込む

4. さいごに

お話を伺った方、皆さんが子供の頃を思い出して楽しそうに話して下さり、私も楽しく調査することができた。遊びは誰もが経験するものであるだけに、どこかにその人の思い入れのようなものがあるのではないかだろうか。

今回はあまり力を入れられなかったが、時代の変遷との関わり、年代別の違い、成長に伴った遊ぶ場所の変化や遊ぶ仲間の範囲の広がりなど、掘り下げていけば、とても面白い調査が出来るのではないかと感じた。

最後になりましたが、親切にお話し下さいった南種子の皆様、御世話下さった関係者の方々に心から御礼を申し上げます。

伝承者一覧（敬称略）

茎永 宇都浦 大崎 蘇市 (M45. 3.26)

" " " アキ (T 2. 9. 2)

上中 上野 大脳 藤作

" " " トヨ (T12. 3.10)

民俗芸能——南種子町に伝承される民俗芸能の時代による変遷

鹿児島民具学会会員 馬込 恵里

1. はじめに

南種子町は現在もたくさんの民俗芸能を伝えており、芸能の宝庫である。(内容・種類については報告書末、"南種子町民俗芸能の分類"を参照)

その様子は昭和三十八年に出版された下野敏見先生の調査報告書『種子島民俗芸能集』に詳細に記録されているので、筆者はその報告をふまえ、当時伝承されていた芸能のなかでも何が残り何が絶えてしまったのか、また新しい芸能が生まれていないかといった"民俗芸能の時代による変遷"を追求することにした。

時代の急速な変化にともなう価値観の変化が農村を、高齢化や過疎といった共同体の解体に追いやっている。この報告書では、そもそも共同体と深く結びついた民俗芸能の今後を展望し、その伝承のために私たちがしなければならないことを少しでも理解できれば幸いである。

2. 現在の民俗芸能のあり方についてのまとめ(4.「民俗芸能の伝承状況——昭和30年代と現在の比較表」を参照)

4の表より読み取ることを以下にまとめてみた。()内は伝承者の話である。()内はその方の居住集落・生まれた年・性別である)

(1) 昭和三十年代と比べてたくさんの伝統芸能の伝承が絶えている中、その一方では今までその集落にはなかった芸能を踊り始め、伝承している芸能の数が増えた集落がある。絶えてしまった伝統芸能には中・小踊の手踊が多く、伝承されているものにはヤートセー、大

踊、盆踊が多い。

絶えてしまったもの：西之平野の石塔踊、砂坂の手踊・笠踊、上中上野の盆踊、島間小平山のしらさぎ、島間中之町のエビス奉納踊など

新しく踊り始めた集落：西之野尻、上中など

(2) 古老の伝承者の他界により、芸能が絶えてしまった。

上中上野盆踊

(3) 地域内の各集落で芸能を奉納する順番をきめ交代で踊るので、踊る機会が減り、さらには伝承はされているが長い間踊られていないことがある。

「西之の盆踊は東を平野・田代、本村・崎原の二組、西を下西目・中西目、上西目・砂坂の二組に分け、毎年その中の一組が踊るので各集落は四年に一度踊ることになる。」(西之平野、S20生、男性)

「島間校区で連絡をとり、大踊は五つの集落で交代です。(島間では願成就祭が二年に一回なので、長い時は十年踊らない集落が出るということになる)」(島間小平山、T15生、男性)

「上中の願成就祭りでは、上中にある集落を西と東の二組に分け西東で毎年交代で奉納するので、各集落は二年に一度踊ることになる。西は上野、共栄・焼野、中西、西之町で、東は河内・新栄町、本町、上之平、大字都である。」(上中本町、S2生、男性)

(4) 祭りの回数を減らしている。

「茎永の宝満神社の願成就祭りは二年に一度である。」

「茎永下之町松原、T3、T15生、男性」
「島間の宝受神社、瀧口神社、御崎神社

- の願成就祭りは二年に一度である
(島間小平山, T15生, 男性)
- (5) 願成就祭り以外の祭りが増え、村人の意識が他の祭りに拡散した。
「夏にはロケット祭り・みなと祭り、秋には農業祭がある。」
(島間小平山, T15生, 男性)
- (6) 学校単位で子供達が踊るようになり、踊りが伝承されている。西之小学校生徒によるしょんがばあ
西之中学校生徒による棒踊
上中上野の笠踊
島間中学校生徒による七九の竹
- (7) 地域に住む若者が減少し、踊り子が高齢化している一方で、伝統の継承に責任を感じている方もいる。
「戦前は青年団（十五才から三十三才までの若者が加入）が中心になって踊っていたが、現在はオセ（年寄）も踊る。」
(島間松原, T15生, 男性)
「大踊は歌がむずかしい。現在六十五才から七十才位の人が歌っている。」(島間下之町松原, T3生, 男性)
「踊が好きだし、次世代に残していくなければならない。また毎年踊るので踊り方を忘れない。」
(島間小平山, S26生男性)
- (8) 開拓地も数は少ないが伝統芸能を持っている。
西之野大野・上瀬田のヤートセー、御縁節
西之本村・崎原、砂坂・官蔵牧の盆踊のように、開拓した集落とされた集落が合同で踊っている。
上中全城
上中長谷の琉球人踊（平成四年度ふるさと祭りの郷土芸能発表に出演『みなみたねの散歩道』より）
- (9) 集落の人口が増え複数の集落に分かれると、分かれてできた新しい集落は伝承している芸能の種類が少なかったり、また分かれた集落同志は似通った芸能をもつてたりする。
上中西と西之町
- (10) 昔は門外不出だった芸能が、移住や地域間の交流によって他地域に伝承されている。それは町部に顯著に見られる。また最近の話であるからか、伝承経路がはっきりしている。
「上中山崎は昭和三十九年の台風被害対策住宅としてできた町で、その後も様々な地域から人が移り住む。平成元年、野尻出身の移住者を介して野尻の人々から棒踊を習い、上中の願成就祭りに奉納した。それまではヤートセーが行われていたが、いつもとは違うものを踊りたかったからだ。」(上中山崎, S23生、男性, S65に山崎に入居)
上中焼野のひょうたん踊
- (11) 過疎集落と新興集落が合同で踊りの奉納をし、その結果過疎集落で絶えてしまった芸能が新興集落に伝承された例がある。
(過疎集落) 上中河内と（新興集落）上中新栄町

3. おわりに

筆者の準備不足で、南種子町全域を網羅できなかったことはとても残念である。今後は以上をふまえて、民俗芸能と社会との関係また芸能の伝播経路などの解明をしたい。

ところで、今回の調査は大変楽しかった。というのもお話を伺いながら、南種子の方々の芸能を愛する気持ちが伝わったからで、強制ではなく心から楽しんで踊ることのできる明るさに感激しました。

最後になりましたが、お世話になりました南種子町教育委員会の方々、またお忙しいにもかかわらず温かく迎えて下さった南種子町の方々に深くお礼申し上げます。

参考文献

- 下野敏見著『種子島民俗芸能集』（昭和三十八年、種子島博物館発行）
南種子の散歩道編纂委員会編『みなみたねの散歩道』（平成五年、南種子町発行）

4. 民俗芸能の伝承状況—昭和30年代と現在の比較

(昭和30年代に伝承されていた芸能は下野敏見先生の『種子島民俗芸能集』から先生の許可を得て転載した)

伝承地区	昭和30年代に伝承されていた芸能の種類		平成6年3月の芸能の伝承状況 (左欄の芸能が伝承されているか否か)	平成6年の結果の 依拠するもの
茎永下之町	大中踊	比翼達理（此の寺、比翼達理、紺むれば鳴る） 山口踊 ヤートセー（伝七口説） ひょうたん踊（別名：金山節） 棒踊	踊っている 踊っている 戦前から踊っていない 踊っている 戦後1回踊ったきりで最近は踊っていない	松原の伝承者 (T15, T3生男)
西之		さんご踊 本村 ヤートセー 本村、平野、田代、野尻・木原、中西目、下西目、砂坂、野大野（西之全地区） 甚兵衛口説 田代 棒踊 本村、平野、下西目、砂坂 盆踊 本村、平野、田代、野尻・木原、中西目、下西目、砂坂	本村・崎原で踊る 平野、田代、野大野・上瀬田で踊る 平野で踊る 十七、八 田代で踊る 棒踊 西之中学校生徒が踊る しょんがばぁ 西之小学校生徒が踊る 御縁節 野大野・上瀬田が踊る 本村・崎原、平野、田代、野尻・木原（上西目）、中西目（前ノ原・小田）、下西目、砂坂・官蔵牧、野大野・上瀬田は盆踊ではない芸能を奉納する	H1.10.18に西之御崎陣社で行われた願成就祭の記録 西之平野の伝承者 (S20生男)
西之平野	大踊 中踊 中踊 中小踊	安城踊（国土安穂、寺踊、北踊、北之町、紺むれば鳴る、佐渡と越後） 棒踊 ヤートセー 盆踊（つんたん拍子） 石塔踊	踊っている 西之中学校の生徒が踊る 踊っている 四年に一度きのぎのを踊る（他集落と輪番） 踊っていない	平野の伝承者 (M40生男)

伝承地区	昭和30年代に伝承されていた芸能の種類		平成6年3月の芸能の伝承状況 (左欄の芸能が伝承されているか否か)	平成6年の結果の 依拠するもの
西之野尻・木原	大踊 中踊 中踊	しんご踊 ヤートセー ¹ 盆踊(たけなが、きのぎの)	踊っている 踊っている たけながのみ踊っている お前はたが子 御縁節 なぎなた踊 弁慶踊 棒踊 平成5年の願成就祭りはヤートセー、 お前はたが子、御縁節を踊った	野尻の伝承者 (T14生男、S3生女)
西之中西目	大踊	安城踊(国土安穏、此の寺、月日かけ、紡むれば鳴る) 盆踊(たけなが、きのぎの) ひょうたん踊 ヤートセー(清左衛門口説)	踊っている 3年に一度きのぎのを踊る(他集落と輪番) 田代で踊る(田代は昭和30年代には踊っていない) 踊っている しぶし千龜女を踊っている しょんがばあを踊っている 弁慶踊 昔踊った 棒踊 昔踊った (平成5年の願成就祭では安城踊、ヤートセー、 しょんがばあを各20人程度で踊った)	中西目小田の伝承者 (T9生男、T15生女、S26生男)

伝承地区	昭和30年代に伝承されていた芸能の種類		平成6年3月の芸能の伝承状況 (左欄の芸能が伝承されているか否か)	平成6年の結果の 依拠するもの
西之砂坂	大 踊	安城踊(国土安穩、寺踊、月日かけ、北之町) ナギナタ踊(団七口説) 棒踊 ヤートセー ¹ 手踊(浜の竹崎、ちりん小島、上のよるね) 笠踊(今年は御新田) 扇子踊 お前はたが子、あがりさし、御縁節、鳥壳り、 馬子踊 盆踊(たけなが、きのぎの)	安城踊(国土安穩、これのお庭、月日かけ、締む れば鳴る) 2、30年前から踊っていない 西之中学校生徒が踊る 踊っていない 踊っていない 踊っていない 踊っていない 踊っていない 御縁節のみ踊っている たけながのみ踊っている	砂坂の伝承者 (S9生男)
上 中			安城踊 上野 ひょうたん踊 焼野 ちくでん 西之町 棒踊 山崎	平成5年の願成就 祭りの記録
上 中 上野	大 踊	安城踊(寺踊、北之町、月日かけ、締むれば鳴る)	安城踊、笠踊、棒踊のうち1つを上中地区の願成 就祭りに奉納する	上野の伝承者 (S27生女)
	中 踊	ヤートセー(清左口説)	最近は踊っていない	
	中 踊	棒踊	踊っていない	
	カーゴマー			
	座 踊	盆踊	2、30年前から踊っていない	上野の伝承者 (S27生女、S18生男)

伝承地区	昭和30年代に伝承されていた芸能の種類		平成6年3月の芸能の伝承状況 (左欄の芸能が伝承されているか否か)	平成6年の結果の 依據するもの
上中河内	大踊 中踊	しんご踊 山口踊(げんだら) ヤートセー(清左衛門口説) 棒踊 カーゴマー	20年前位から踊っていない 上中地区願成就祭りのときには山口踊・ヤートセー・棒踊の中からどれか1つ奉納する 14、5年前から踊っていない	河内の伝承者 (T8生男)
上中新栄町		不明	上中河内と合同で奉納するので、以上の河内の芸能があることになる カーゴマー ひょうたん踊	河内の伝承者 (T8生男)
上中焼野		不明	ひょうたん踊(H5の上中地区願成就祭りに踊った)各集落から芸能を1つ出せばいいということで、昔はひょうたん踊、ヤートセー、ナギナタ踊の中から交代に1つ出したが、最近は要望が強いひょうたん踊しか出していない	焼野の伝承者 (T5生男)
上中共栄町		不明	上中地区的願成就祭りでは焼野と合同で奉納する 一般的なヤートセーを踊る	河内の伝承者 (T8生男) 焼野の伝承者 (T5生男)
上中上之平	大踊 中踊	安城踊(寺踊、北之町、月日かけ、締むれば鳴る) ヤートセー(清左衛門口説) ナギナタ踊(団七口説) 棒踊	安城踊 踊っていない 踊っている 踊っている	河内の伝承者 (T8生男)

伝承地区	昭和30年代に伝承されていた芸能の種類		平成6年3月の芸能の伝承状況 (左欄の芸能が伝承されているか否か)	平成6年の結果の依拠するもの
上中西之町			安城踊 棒踊 ヤートセー	河内の伝承者 (T8生男)
上中中西	大踊 中踊	ナギナタ踊(団七口説) 棒踊 カーゴマー	安城踊 踊っていない 踊っている(加世田録を使っている) 不明	河内の伝承者 (T8生男)
上中本町		不明	ヤートセー 棒踊 カーゴマー	河内の伝承者 (T8生男) 本町の伝承者 (S2生男)
上中山崎		不明	ヤートセー 棒踊	山崎の伝承者 (S2生男)
上中長谷		不明	平成4年ふるさと祭りの郷土芸能発表において 長谷校区婦人会が琉球人踊を踊った	『みなみたねの散 歩道』の記述より
上中長谷赤石			神社もないし、年中行事や祭りはない	赤石の伝承者 (S2生男)
島間			さんご踊 上方 ヤートセー 上方、仲之町、小平山 十二提灯 上方 弁慶踊 小平山 七九の竹 島間中学校生徒による	H5.10.23島間上方 豊受神社願成就祭 りの記録 島間中学校文化祭 の記録

伝承地区	昭和30年代に伝承されていた芸能の種類		平成6年3月の芸能の伝承状況 (左欄の芸能が伝承されているか否か)	平成6年の結果の 依拠するもの
島間小平山	大踊 中踊	安城踊（此の寺、北之町、月日かけ） ヤートセー（伝七口説） なぎなた踊（おつや口説） 棒踊 弁慶踊 しらさぎ たんばら踊	此の寺、北之町のみ踊られている 踊っている 踊っている ない 踊っている 10年近く踊っていない 現在踊っていない。上方で踊っている	小平山の伝承者 (S7生女)
島間中之町	中踊 中踊	棒踊 エビス奉納踊（かじょうがね、おかげ参り、四国山、三味は稽古、恋仲は）	踊っている 20数年踊っていない ヤートセー 盆踊	中之町の伝承者 (S5生男)

民俗芸能写真 I

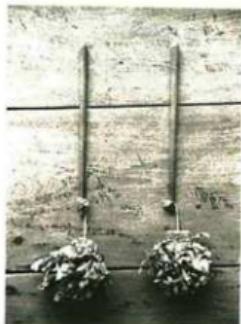
(撮影 馬込恵里)

島間 小平山

①～④ 安城踊に使うもの



① 入れ鼓とバチ



② バチ（入れ鼓用）



③ 笠をかぶる



④ 笠（上から見た図）

上中 上野



⑤ 「郷土民謡集」の表紙
故日高傳氏が御家族に残されたもの。
中には盆踊の歌詞などが詳しく
書かれている。

民俗芸能写真 II

(撮影 馬込恵里)

上中 上野

⑥～⑩ 安城踊に使うもの



⑥ 太鼓とバチ



⑨ 竿



⑦ 入れ鼓とバチ



⑩ 棒踊に使う棒



⑧ カネ 二種
バチ 二種

参考：南種子町民俗芸能の分類

1. 風流

種子島では踊りのことを構成人数の多い順に「大踊」「中踊」「小踊」と呼ぶ。太鼓踊はほとんど「大踊」である。

盆踊、島間エビス神社奉納踊を除いて旧暦九月九日、願成就祭りの際に踊られる。

踊りの種類	踊りの名称
太鼓踊り	<p>【総称】 しんご踊、さんご踊、安城踊、げんだら踊（山口踊、山口くだりー※南種子町では中踊として踊られる）</p> <p>【各踊の名称】 寺踊（此の寺、めでたお寺、これのお寺）、国土安穩、北之町、月日かけ、武藏野、佐渡と越後、締むれば鳴る、とだか千代女、比翼連理、東山、思いたした、こえびら、これのお庭、思いかぶり、松様、しんご、吉原通い、これの御門に、わは備前の、浜ち通い、我は池水</p>
盆踊	きのぎの、たけなが、つたん拍子
口説物	ヤートセー（伝七口説、おくめ口説、八兵衛口説、彌市口説、清左口説） なぎなた踊（団七口説、おつや口説）、甚平口説
採り物踊	弁慶踊、棒踊、なぎなた踊
その他	<p>【小歌舞踊系と思われるもの】 わしがさき山（徳若、船は出ていく）、伊勢音頭、お前はたが子、石塔踊、ごえん節、せんがめ女、浜の竹崎、知林小島、上のよるね、今年や御新田、センス踊、あがりさし、馬子踊、笹踊、島間エビス神社奉納踊（かじょうがね、おかげ参り、四国山、じゃみは稽古、恋仲は）、七九の竹</p> <p>【田楽系と思われるもの】 ひょうたん踊、げんごばあ、くらまぐち、たんばら踊、十二提灯、白さぎ</p> <p>【芝居仕立てのもの】 げんごばあ、十二提灯、オガ踊、島売り</p>

2. 祝福芸

座踊、祝賀の席で余興として踊られるもの。1人～少人数

イ、狂言系（仏舞、蟹舞、味噌舞、鳥刺し舞、婆上舞、ばっくう舞）

ロ、その他（蚕舞、西目出し、弥吉シオ女）

3. 琉球伝来の芸能

ちくてん、知林小島（琉球下り口説）、あがりさし

4. お田植え祭りに踊られるもの

お田植え歌、お田植え舞

民間療法

鹿児島民具学会会員 近藤 津代志

民間療法

民間療法 西之 田代 日高 実雄
スミエ

茎永郷土誌を参考にして、日高実雄さん
夫妻に民間療法をお伺いした。

傷

三歳の頃、母の草刈りについて行ったとき、中指を怪我した。母は草刈りしながら、手を濡らしてはいけないと言っていた。川にゴウミナと呼ぶ直径1センチ程度の貝がいる。その貝を取っていたら手が濡れてしまい、痛かった。母がヒエ抜きに、クチナシの花を付けてくれた。

吸い出し

腫れ物にオンバク（車前草）の葉をつけると、吸い出しになる。

百足に刺されたとき

歯糞を付けるとよい。

目が痛いとき

イヌガラビの茎から出る汁を吹きかけるとよい。イヌガラビは山葡萄に似ており、青くて山葡萄より大きな実が成り、食べられない葛状の植物。

食中毒

1センチ程度のカンランの実は、食あたりに効くといって、売りに来ていた。この実は何處でも生えているわけではなく、少なかった。

臭木

臭木の汁は、下痢止めになる。

食べ合わせ

梅干しとタコを食べ合わせると、よくない。
蟹と氷を食べ合わせると、よくない。

民俗知識

スミエ

朝露を踏むと、身体が強くなる。
鼻の穴の下が赤くなると、お腹に虫がいる。虫下しを飲ませる。
夜に爪を切ると、縁起が悪い。
爪は、囲炉裏や火鉢の火の中に入れてはならない。父から厳しく言われていた。
春が遅れると、秋も遅れる。
石蕗の花が咲く頃が、麦の種蒔きの頃である。

雨の日に蕎麦の種撒きをしてはならない。
蕎麦は水を嫌う作物である。
家の内で口笛を吹くと、悪魔が入って来る。
雀は粗末にするものではない。雀を捕ると、実りが悪くなる。
生姜はホイトウの声を聞いて、芽が出そろう。ホイトウとは、農地に牛か馬を追いかんで踏ませることで、その時に「ホーイホイホイトウ」と言っていた。

民間療法 茎永 松原 日高 ユキエ

茎永郷土誌を参考にして、日高ユキエさんに民間療法をお伺いした。

民間療法のことを、ヤボヨウジョウと呼んでいる。

岩風呂

「松原に岩穴があって、中で火を焚いて熱し、風呂として中に入っていた。」と、話には聞いていたが、戦後は使っていない。

潮風呂

知らない。

まくり

虫下しになる「まくり」という海草が、茎永の沿岸に生えている。6~7月に海に潜ってとる。煮じて飲むと虫下しになる。学校で煮じて集団で子供に飲ませている。現在でもPTAの人たちが、採りに行って学校で飲ませている。顔に白い斑点ができたり、苦い胃液が出てくると虫の小便だと言って、まくりを飲んでいた。

赤ちゃんが生まれた月の月初めに「まくり」を飲ませると、虫が出来ないとと言われている。

昔の人は生野菜を食べていたせいか、回虫等の虫がいた。最近では生野菜も食べないので、虫がいたと言う話は聞かない。

焼き火箸

傷が出来たら火箸を焼いて、傷口にジーと当てていた。私は行ったことはないが、聞いたことがある。

傷

傷口に味噌を乗せて、焼き火箸で味噌を焼くと傷が治る。

ヤキジン

私は実行したことはないが、聞いたことがある。化膿したら、火箸を焼いて、ジーと焼く。深く焼き火箸が入っていかないように、竹のズンギを切って（竹の幹を切って）、止めを作っていた。

車前草

コウネン草（車前草）を火で焼いて、手で揉む。それを化膿したところに当てると治る。

どくだみ

乾燥させて煎じて飲むと、汗疹が枯れる。

石蕗の葉

傷口に石蕗の葉を火で焼いてから揉んで、当てると治る。

足に釘が刺さったとき

足の傷口を、金槌でトントンと叩くと治る。

疣

大豆を煎って道路の三文字に埋めると、疣が治る。

現の証拠

腹が痛いときに、現の証拠を煎じて飲むと治る。

猿の腰掛け

クワナバ（猿の腰掛け）は、破傷風の時に煎じて飲むと効く。

風邪

玉子を溶いて、焼酎を入れて飲むと風邪に効く。

梅干し

朝のお茶の時、お茶に梅干しを入れて飲むと、健康によい。

傷

傷に、ツツ（蓬）の葉か血止め草（はこべ）を揉んで付けると、治る。

薬風呂

盆に芭蕉の葉を切って風呂に入れたお湯に入ると、健康によい。

車前草

オンパク（車前草）の葉を揉んで付けると、腫れ物の吸い出しになる。

すべりひゆ

アツケイタメと言って、夏の暑いときに食べると夏負けしない、と言われている。スペビィ（すべりひゆ）を茹でて、酢醤油か白和えにして食べると、夏負けしない。

伝承者一覧 敬称略

大字 集落名	氏名
	生年月日
茎永 松原	日高 ユキエ 大正10年3月15日生
茎永 松原	石堂 キヨ 大正3年3月22日生
茎永 松原	柳田 チエ 明治42年3月28日生
平山 広田	西田 キミ 明治41年4月3日生
平山 広田	徳永 ヒデ 明治33年3月15日生
西之 田代	日高 実雄 大正8年3月20日生
西之 田代	日高スミエ 大正10年7月10日生

参考文献

茎永郷土誌	茎永公民館
	昭和49年3月1日発行
南種子町郷土誌	南種子町
	昭和62年3月1日発行

南種子町の民具・民俗写真から（1）

—砂浜、防砂垣、防砂林（いかにして美しい海岸と村落を守ってきたか）

（写真(1)～(28)共、1987年～1994年撮影、下野 敏見）

門倉岬から竹崎まで、一望につづく弓なりの海岸は、南に向けてひらけており、南からわが国に寄せる文化をここでしっかりと受け止めている感じだ。ここは、鉄砲伝来の地でもある。美しい砂浜は太古のままであり、それだけに無限の価値を持っている。ここには砂鉄採取による天然破壊の手を入れさせず、その価値を守ってきた南種子町の叡智に深く敬意を表したい。

鉄砲伝来の時のままの海浜は無限のロマンをかき立ててくれる。又、ここには、たくさんの貴重な遺跡があるといわれており（例えば大熊、小熊）、今後、どんな大ニュースが飛び出すやもしれない。

この美しい自然を沿岸の人びとは太古より守ってきた。それは、竹垣を築いて砂止めをし、植林をすることのくり返しだった。美しい浜山はこうして先人たちの努力によって育てられ、守られてきたのだ。



下中の里の浜から竹崎を望む



下中の里の浜から門倉岬を望む



防風と防砂の垣。松の植林（下中）



防砂の竹垣が見える（下中）



垣をめぐらした中に松の苗を植えてある（下中）



垣と松。向うには根づいた松が成長している（下中）

南種子町の民具・民俗写真から（2）

— 西之本村から茎永の松原へ（古代史の道を行く）

門倉岬～竹崎への海浜に沿う本村～松原のコースは、種子島でもっとも魅力の観光コースである。鉄砲伝来の歴史の小浦を眺めつつ歩くと、鹿鳴川のせせらぎを渡り、やがて丸い森山が田の中に浮かんでいる。この辺は古代「市の坪」といい、奈良時代の班田制の一の坪の名残りといわれている。やがて「里」をすぎると、「郡」だ。そして茎永の宝満神社へ。宝満神社は日本でもっとも古い米、シャバニカ（インドネシアのジャバ島に残る古代米の系統）の赤米を今も栽培している。



宝満神社の坂より茎永平野を望む。
左の小森はお田の森（松原）



赤米で知られる宝満神社拝殿（茎永、松原）



郡川の下流を望む（下中）



郡川の上流を望む（下中）



宮瀬川より上里を望む（茎永）



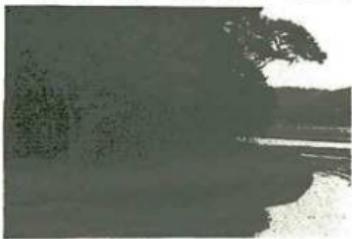
眞所～本村の水田一の坪名も残る（下中眞所）

南種子町の民具・民俗写真から（3）

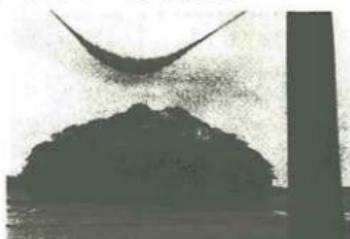
— 真所附近（古代史・中世史のふるさと）

美しく神秘的な森山は、太古のまま今も保存され。その下には真所八幡宮の神田がある。真所村落はかつて政所のあった所ともいわれる。中世の島主、種子島守も愛妾ゴゴ女とここに住み、森山の頂上にはゴゴ女にくれた銀のカンザシが50本埋まっているなどといわれている。

ゴゴ女をまつるゴゴ女神社は真所の道沿いに建っている。真所は古代の班田制が実施された地といわれ、「市の坪」の字名が残っている。下中よりの地には「一の坪」名もある。



森山の周辺は弥生式土器片も出土する（下中、真所）



神秘の森山（下中、真所）



真所の村落を囲む森。真所は政所の跡ともいう



森山の脇の神田。毎年4月、お田植祭りをする（真所）



真所周辺の水田（「市の坪」字）



ひろい下中の水田。向うの森は浜山

南種子町の民具・民俗写真から（4）

— ガローヤマ（伽藍山）（日本の森山信仰の代表）

ガローヤマは祭り森であり、みだりに入ってはならない。そこは大切な防風森であり、水源地でもある。種子島のガローヤマ信仰は14世紀頃、宝満信仰と同じ頃、流入してきたようだ。

ガローヤマとは、ガラン（伽藍山）のこと、ガランとは寺院の土地を守る地神である。種子島ではそれが民家を守る地神としての屋敷神になった。

ガローヤマの祭りには海の潮や真砂（シュエー）をとってきて供えるとすぐなおるという。海の潮の効き目にも注目したい。



広田の浜渡りのガロー



広田の徳永ガロー



茎永の向多倍経のガロー



西之本村の中之崎のガロー



平山向井里のガロー



広田の園田のガロー



平山の向井里のガローの森

南種子町の民具・民俗写真から（5）

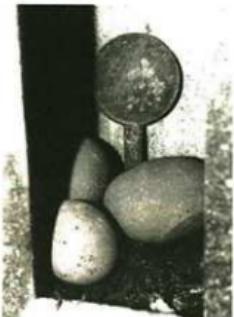
— ゆたかな民間信仰（牧の神、氏神、火の神、石塔、仏壇、塔婆）

種子島にはいろんな神様や仏様がまつられている。種子島はかつて全島にも60余りのマキ（牧）があつて主に馬、次いで牛を放牧していた。そして、田植前には、牧の馬を頭もひいてきて、ホイトーといつて、馬の足耕による田耕をしていた。牧には牧の神をまつっていたが、牧がなくなつた今も牧の神はあちこちにある。

家には必ず、「火の神」をまつっている。氏神や村落神のご神体は丸石や古鏡がまつられている。仏教は数百年來、法華宗で、しかもさかんである。いたるところに石塔がある。又、墓地には年忌祭りごとに立てる供養の塔婆が並んでいる。



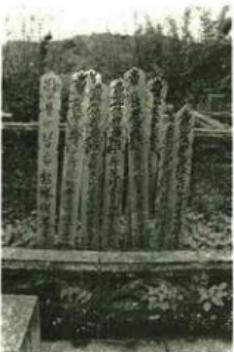
マキの神（小平山）



氏神（西之）



火の神。台所にまつる



塔婆（鳥間）



元禄八年の石塔（父の供養塔。下中）



仏壇（下中）

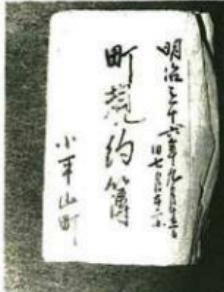
南種子町の民具・民俗写真から（6）

一 文字に見る民俗社会（神社縁起書から店の案内まで）

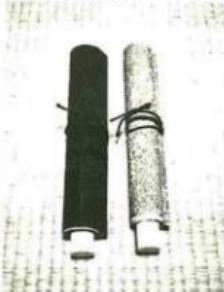
種子島は多様国以来の文字の国であり、島主家の「家譜」をはじめ庶流系図や庶民文書などの資料も案外に多い。それらは、郷土館などに保管されているが、村落で保管しているものもある。小平山町の規約簿は面白い内容である。これは大曲にある南種子町郷土館に保管されている。



町規約（島間）



町規約簿（島間、小平山）



宝満宮記（茎永）



町規約（島間）



宝満宮記



郷原の民家の台所の札



赤坊の足びきの人生儀礼用のゾーリの宣伝（上中）

南種子町の民具・民俗写真から（7）

一 働く人びと（種子島は農業のさかんな島。さまざまな労働形態がある）

平坦な地の多い種子島は農業がさかんな所だ。広い田畠にはいろんなものを栽培するが、サトーキビ栽培も各地に見られる。忙しい時にはイー（結）をする。

真所の羽生繁保さんは、真所のすぐれた伝承者の羽生通雄さんの次男で、氏も伝承文化にくわしく、又熱心。

種子島の婦人たちちはよく働く。左下の婦人の持つソーケは口縁部の上にもう一つフチをのせて丸やかになった種子島独特の造。



キビの苗植え（木原）



キビの収穫（下中）



ニナギの使い方を話す羽生繁保さん。
左は崎田宏社会教育課長さん（真所）



エブリを持って（真所）



ソーケを持って（木原）



ツワをいっぱい背負って（広田）



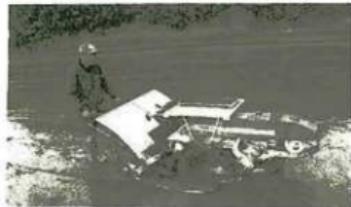
シバとタマシダを持って（島間）

南種子町の民具・民俗写真から（8）

一 農機具の変遷（在来の農具から大型機械まで）

昭和30年代の高度成長の波は種子島にも確実におよんだ。そして、古い農具は新しい機具にとって替った。それは、農法の一つの革命であり、又、意識革命でもあった。そうして農村の家も、道も、田畠の景観もすべて変わっていった。

しかし、これまで何百年も使った道具もどんどんすてられた。それを歎き悲しんで平山の向井長助、向井嘉助、長田仙兵氏らは当時中種子高校にいた筆者と共に、昭和40年頃、人びとに呼びかけて民具収集にのり出し、小さな平山郷土民俗館を造った。その品は今、大曲の町の郷土館に収容されている。南種子町としても各地より集めて、今、野打ち鋸など貴重品がいっぱいある。



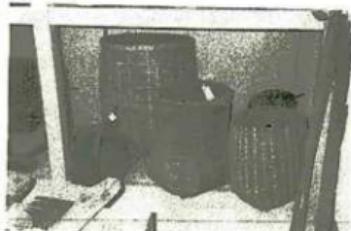
田植（茎永、宇都浦）



耕耘（下中、真所）



野打ち鋸（南種子町郷土館）



カゴ類（南種子町郷土館）



稻かけ用の竹
(平山、広田)



カリーコ
(背負い様子、南種子町郷土館)



野打ち鋸と田車
(南種子町郷土館)

南種子町民具・民俗写真から（9）

— 運搬具から（特色にみちた種子島の民具）

種子島の民具はよく見ると、小さな特色に支えられた美しさを持っている。カリーコの縄かけの緒もそうであるし、カンザーの編み方、ソーケの作りもそうである。カンザーやソーケは今も昔のままのものによく使っている。これらは何百年にもわたって練り上げてきた用と美の民具であるので、生命が長いのであろう。

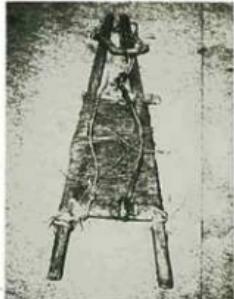
こうしたもののはかにも、種子島の民具には注目すべきものが多い。



ククリ（海に、山に、使う入れ物）（茎永）



民具の収納（茎永、向江秋夫さん）



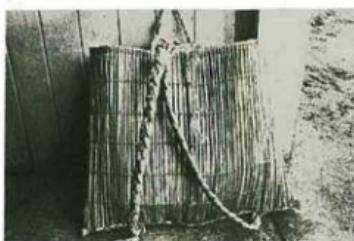
カリーコ。



結び縄をかける上の木が特徴



カリーコ（眞所）



カンザー。三角籠製の背負いカゴ



コイソーケ（肥前）。縄の作りが特徴

南種子町の民具・民俗写真から（10）

一 南種子町の陶器（西南日本の南北から集った陶器）

陶磁器は日本全国に見られるが、種子島にも西南日本各地で焼かれたものが入ってきている。下は陶器類である。

特に目につくものは、薩摩焼（苗代川焼）と琉球壺屋の泡盛壺であり、又、地元種子島産のヨキノヤキ（能野焼）である。右下は小便壺として使われたヨキノヤキの壺。中央の花瓶は逸品である。



台所のミソ壺、醤油壺。左は苗代川焼。右は泡盛壺（西之）



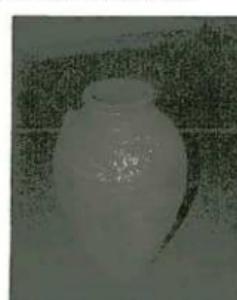
泡盛壺がころがっている（西之）



苗代川焼の壺（西之）



種子島の能野焼の花瓶



沖縄の泡盛壺（西之）



苗代川焼の壺（西之）



能野焼の壺（西之）

南種子町の民具・民俗写真から（11）

一 民俗伝承者の中から（南種子町の文化を伝える方々、他にもたくさんおられる）

南種子町にはすぐれた伝承者が多い。自らの長い間の体験のほかに、先祖たちからいろいろなことを聞いてよく憶えておられる。

民俗の調査は伝承者に恵まれることが大事である。すぐれた伝承者の語る話は興味がつきない。この方々がまた次の世代へよい話を伝えていただきたいものだ。写真の方々のほかにも町内には伝承者は多い。



向江秋夫さん（明治43年生、阿多羅経）



岩下弥八さん（大正3年生、阿多羅経）



日高実雄さん
(大正8年生、西之、田代)



日高ミエさん
(大正10年生、西之、田代)



日高静一郎さん
(明治33年生、西之、下西目)



西園政男さん
(明治31年生、島間、大久保)



寺内弥六さん
(明治35年生、下中、里)



峰山秀太郎さん
(明治39年生、島間、田尾)

南種子町の民具・民俗写真から（12）

— 民家①（在來の母屋と床の間）

種子島の民家は「切妻型・田の字型」を基本として発達した。近代に入り、切妻形式が入母屋形式になり、台所、玄関の設置により、入母屋の屋根が伸長するか、もしくは連結の平行別棟の小屋（台所）を突き出したりした。現代になるにあたり後者の形式がふえていった。

真所の旧家（才川家）は私も昔、先代の頃、一泊させてもらったことがあるが、江戸後期の古い家を骨格にしていた。平成2年当時は空家になっていたが、平成6年にはご主人の不幸によって、家が解体されて空地になっていた。よく見回してみるとこの地は屋敷地として上等地であると思うことであった。

種子島の民家も時代と共に変遷を重ねて、未来へ向って歩んでいる。



神道の家の床の間と神棚 ——



佛教徒（法華宗）の家の床の間と仏壇



正面は母屋の廃屋（聖永）



空家の民家（母屋、広田）



空家の民家（右と同じ、由緒ある古い家）



空家の民家（母屋、真所）

南種子町の民具・民俗写真から（13）

— 民家②（母屋、厩屋、隠居屋）

種子島の民家の構造はどんどん変りつつある。近年はブロックか鉄筋コンクリートの家が多くなった。台風常襲地帯の民家は丈夫でなければならない。又、厩屋や倉庫、小屋などもどんどん変っていく。機械化、車化に沿う構造と立地になっていく。

空家が多いのも特徴。本土への出かけせぎ、移転などのためだ。人の住まない家は近所の人が守っていても打ちやすい。こうしてやがてこわれ、消失していく。

種子島は、隠居分家の地域であるが、今も別棟居住の隠居は多い。この隠居制も変りつつある。本家同居もあるが、むしろ老人福祉施設などへの入居が多い。しかし、若者の留守宅を守る隠居は、元気な間は若者に負けぬ農業をし、ゲートボールにも精出す毎日という方も多い。



車、大型倉庫、向うに母屋の農家（平山、西之町）



よく耕されたソノバタケと民家（下中、郡原）



空家の民家（下中、郡原）



切妻型の民家（郡原）



— 寺内弥六さん隠居夫婦と隠居屋（郡原）



左より本家（コンクリート製）、隠居屋、厩屋。（下中、里）

南種子町の民具・民俗写真から（14）

一 民家③（厩屋、小屋、隠居屋、泉、井戸、床）

種子島の民家は、いろんな要素から成り立っている。ガロー ヤマのそばから湧く泉は昔は貴重であったが、今、水道の普及で不用である。ツリと呼ぶ井戸も今は珍しい。平山の中畠家では、今もあって洗い物などに使っている。

床下をイカンメというが、種子島の在来の民家は、畳の下は細竹を何本も並べてあった。湿気がユカシタにたまらぬように、又、通風がよいようにという配慮であろう。

厩屋もどんどん変りつつある。使役用の馬や牛をほとんど見なくなった、現在、それを飼う家も珍しい。しかし、時には、昔懐しい4輪の馬車がいたりする。平坦地の種子島では自動車よりも、こちらが便利な点があるのかもしれない。



ガロー の カワ (泉、広田)



今は珍しい井戸 (平山、西之町)



家の床。竹を並べてある (下中、郡原)



母屋連続の台所と小屋 (西之、野尻)



昔の隠居家 (西之、野尻)



厩屋。これも今は珍しい馬車 (島間、大久保)

南種子町の民具・民俗写真から（15）

— 神社、仏閣から（民家形式の屋根）

種子島の神社は、江戸時代は神仏混合で、法華宗の僧侶が司祭する例が多かった。種子島では、仏教による法事も「祭り」という場合が多い。例えば「年忌祭り」などという。神様や仏様の家である神社や寺は、民家とあまり変わらない構造である。

それらは、入母屋型の建物が多いが、妻の方を入口にしているのが特色である。そして、妻の方の屋根の中央部分を1mから2mくらい突き出して、そこを入口にしてある例が見られる。神社の場合、拝殿と本殿は別棟で、渡り廊下がつく。島主ゆかりの中種子町熊野神社や西之表市現和の風木神社などの本殿はよく造ってある。

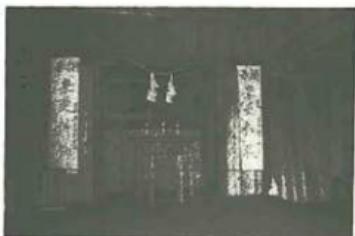
宝満神社は本殿と拝殿が廊下でつづくが、真所神社は石段を登った上に本殿がある。西之表市の浦田神社の本殿は大岩である。



下西目の豊受神社



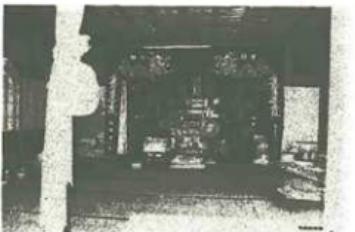
霧島教会（島間、上方）



豊受神社拝殿（西之、下西目）



郡原神社（下中、田代）



本妙寺の内部（島間、田尾）



本妙寺（法華宗、島間、田尾）

南種子町の民具・民俗写真から（16）

一 地名と石の文化（バス停、記念碑、礎石など）

南種子町の地名には面白いものが多い。アライキョウ、又はアクラキョウと呼ぶ茎永の地名などその代表であろう。アライキョウは阿多惜経などと書くが、昔、律宗から法華宗に改宗した折、經を焼きすぎてたのにちなみ、「あったら惜しい」といったのがもとで、この地名がついたといわれる。茎永という地名も面白い。これは宝満神社の神幡の赤糸の茎が長いのにちなむというが、真相はどうであろうか。南種子町には地名研究会があつていろいろ研究され、或果をあげておられる。

石を使った文化は種子島には多い。石碑、礎石、石垣、石…。かつて多賀國府や國分等があったが、未だにその所在が確定しない。その礎石を見つけることも一つの方法であり、島間上方、黄前、郡原、上里、里、その他の柱石や踏石は注目しなければならない。



アライキョウのバス停の標識（茎永）



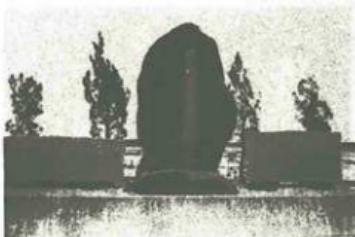
ウエホウのバス停（島間）



シモニシメのバス停（西之）



宇宙センターにある大崎集落移住記念碑（茎永）



堂々たる構造改善事業記念碑（西之）



神社の大きな手洗い鉢（西之、下西目）



自然石の礎石（下中、郡原）

南種子町の民具・民俗写真から（17）

— 仏の世界（仏像、曼陀羅）

種子島は法華宗のさかんな島で、その歴史は五百年を越える。種子島の民俗文化には法華宗が深く渗透している。その法華宗の拠点は各大字にある寺である。西之平野にある本国寺もその一つで由緒ある寺であり、今も住職河野永源先生を中心に檀家一同心を合わせて文化活動をしている。県指定無形文化財の「盆踊り」や盆行事、九月踊り（国土安穩、他）の伝承保存などすぐれた活動をしておられる。町内には他にも同様の活動をしている寺がいくつもある。



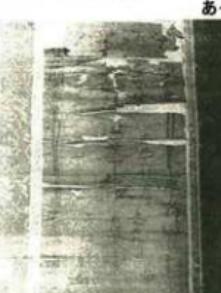
左から鬼子母神、阿弥陀如来、日蓮上人の像と厨子（本国寺）



60体の仏像（木造）。昔、下中の本善寺にあった。（平野「本国寺」蔵）



新仏像群（本国寺）



日蓮上人直筆の曼陀羅
(室町時代、法華宗)



日蓮上人像（本国寺）



阿弥陀如来像（本国寺）



西之の法華宗の中心寺「本国寺」（西之、平野）

南種子町の民具・民俗の写真から (18)

— 墓制① (古い墓石)

種子島は石塔文化のゆたかな島である。石塔には、墓石、供養塔の別があり、供養塔には個人のもの、共同（一族、村落）のものの別がある。写真は下西目の古寺の僧侶（法華宗）の墓石である。天和3年（1683）、宝永2年（1705）、宝永7年（1710）の年号も見えていておよそ300年前のものである。このようにまとまって存在するのは珍しく、貴重である。寺の名称は分からぬが、『懐中島記』には西之村に本国寺のほかに田代の金剛寺と平野の竜泉寺の名が見える。下西目の寺の名は分からぬ。この墓地は、種子島の古い形式を残しているので、永久保存対策をすべきであろう。



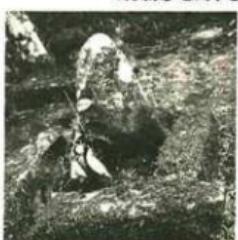
下西目の十字路のすぐ北側にある古墓群



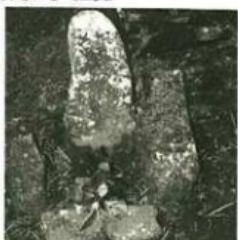
高さ94cmの自然石の石塔。「南無妙法蓮華經、正回連經山儀、清涼院、天和3年八月十八日、日高与太郎実家」と刻字されている（左奥）



高さ50cm。「妙法大悟院常入日真」とある（最左）



高さ50cm。「妙法大通院妙回日性」（左より2番目）



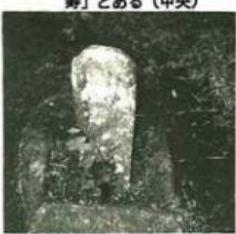
高さ60cm。「南無妙法蓮華經、清月庵連青壽」とある（中央）



高さ22cm。「南無妙法蓮華經」とある。（中央手前）



高さ65cm。「南無妙法蓮華經、淨心院七十二歲、了回妙經靈位、宝永二年閏四月廿八日」（中央奥）



高さ73cm。「南無妙法蓮華經、宝永七年十二月、本壽院寛、自作是念以何念衆生得〇〇、於我滅度〇應受〇經是念佛道」（最右）

南種子町の民具・民俗の写真から（19）

— 墓制②（靈屋）

死者を墓地に埋葬した時は、靈屋を建てる。靈屋はヤギョウ（家形）ともいい、墓石を建てたままでそのままにしておく。墓石は一年忌に建てるのが多いが、普通は三年忌までに建てる。この靈屋は死者の家ともいいくべきものであるが、本来は、殯をするためのモガリヤの意味であろう。

靈屋には、妻入りと平入りの別がある。神道は平入り、仏教は妻入りであるようだが、実際にそうではない例もある。靈屋の中には、塚木（墓標）が立ち、マエジョク（前机）がおかれ、供物をおいてある。



妻入りの靈屋（広田）



平入りの靈屋（木原）



靈屋が風で吹き飛んだ後の墓（木原）



妻入りの靈屋（郡原）



妻入りの靈屋（夏田）



妻入りの靈屋（里）



新しい靈屋と旗（夏田）

南種子町の民具・民俗の写真から（20）

— 墓制③（一族の墓地、一族供養塔）

共同墓地に葬るのが原則で、村落ごとにそれがあるが、しかし、近年はこの原則がくずれて、自宅近くや屋敷内にその家の新しい墓地を設ける人もある。

共同墓地は、一族ごとの墓域が決まっていて、境界がある。その一族の墓域は相当の時代をへている場合、入口に一本ないし複数の自然石の石塔が建てられている。これは49年忌をへた後の個人石塔のない高祖塚をひとまとめにまつるものである。それが共同墓地の入口に何本も建っている場合は、一本一族のものである。墓参のたびに、又はお盆には、入びとはまずわが家の（わが一族の）石塔に参って拝み、次いで個人墓を順々に拝む。



右の系図の日高家の墓地（西之、田代）



日高氏の系図（田代）



一族の墓地（西之、下西目）



一族ごとの墓地の境界がある（平山、広田）



共同墓地入口にある高祖塚（49年忌をすぎた塚）
をまつる一族ごとの供養石塔（下中、郡原）



左奥は一族の供養塔（高祖塚をまつる）
（島間、中之町）

南種子町の民具・民俗の写真から (21)

— 墓制④ (古い石塔)

種子島には古い石塔が多い。島間の大塚山の頂上の石塔も古い型式のもので、律宗改宗に賛成しなかったので、鋸びきの刑に処した大塚様を葬ってあるという。大塚様というのは、あるいは島間城の城主であったのではないかと思う。碑文はないでよく分からぬが、古い形式の石塔である。

本村の浜山の恩人、日欽の墓は、毎年、参拝ごとに小石を供えるといい、たくさんの石が見られる。広田の石塔山にも何基かの古い石塔片があって、毎年、その前に施餓鬼壇を組んでまつる。

このほか、各地の墓地には古石塔が点々と見られ、その記録化を待っている。



大塚様の古石塔（島間、大久保）



本村の浜山の植林の恩人、日欽の墓（西之、本村）



盆の石塔祭りの主役、お高祖の石（平山、広田）



供養石塔と古い五輪塔（聖永、松原）



特異な角柱墓石（下中、里）



細長い笠付角柱墓石（西之、本村）



元禄八年の墓石（西之、田代）

南種子町の民具・民俗の写真から（22）

—墓制⑤（サンゴ石の墓）

普通の墓石はなくて、ガルイシ（サンゴ石）で囲っただけの古い墓がある。幼児の墓などに多い。又、経済的理由でそうしている場合もある。

しかし、茎永の松原の共同墓地などでは、墓石が建てられてもその前にサンゴ石を積んだ墓も見られる。又、平山の共同墓地も墓石のまわりにサンゴ石をめぐらせたものが多い。こうしたことから、種子島の墓地はサンゴ石と関係が深いことがわかる。海辺の白い、清らかなサンゴ石で死体を覆ってやるという習俗はいつ頃からあったものだろうか。

それは実は弥生時代にさかのぼる。南種子町や中種子町郷土誌が伝える弥生時代の墓制はすでにサンゴ石と関係が深い。南種子町の墓地のサンゴ石の墓は、2000年間もつづいていることになり、伝統の深さに思いを新たにせざるを得ない。



ガルイシ（サンゴ石）で囲んだ墓（下中、里）



共同墓地の近くの土手には何百年も前の墓のサンゴ石が露出している（平山、広田）



サンゴ石に囲まれた中に1本の自然石の立石。墓の古い形態を示す（松原）



石塔が建てられてもサンゴ石は除かれれない（茎永、松原）



新しい墓石のまわりをサンゴ石で囲む（平山、広田）



49年忌をすぎると墓石は除いてよい。又、移住の場合は掘って骨は持つて行く。その時は、墓石はヨコに倒しておく。サンゴ石も見える。（広田）

南種子町の民具・民俗の写真から（23）

— 墓制⑥（石囲いの墓）

ガルイシ（サンゴ石）で囲んだ墓石のはかに自然石で囲んだ墓もあって、石で覆い囲んだ感じである。囲み石は大きい団子状のものから長方形の切り石、丸い小石など、いろいろなものがあるが、埋葬地の上をそれで囲い閉め形式のものと、それでとり閉め形式のものとがある。墓石塔を建てても、小石で囲まねば気がすまないのは、石囲い、又は石閉いの伝統の根づよさを証明している。

実は、中種子町郷土誌や南種子町郷土誌にみる弥生時代の墓地の覆石墓とよく似ているのである。その伝統は今もこのように南種子町の墓地に生き生きとつづいているといえよう。



大きな自然石で立石を囲む墓
(下中、山神)



民話で有名な「山神どん」の墓。
正徳元年(1711) (下中、山神)



山神の墓地
(向うに山神どんの墓)(山神)



石囲いの墓（下中、夏田）



石で囲って立石をおいた墓（西之、下西目）



墓石塔のまわりを石で囲んだ墓（西之、木原）



小石で囲んだ墓（下中、夏田）

南種子町の民具・民俗の写真から (24)

— 墓制⑦ (墓の変遷)

墓の形態は時代と共に変わる。千年以上もつづいた庶民のサンゴ石又は自然石の石圓い又は覆石墓は近世になって、まず僧侶や地方支配者の墓が、石塔墓に変わり、さまざまな石塔が出現したが、もっとも多いのは角柱石塔であった。それは近代になってもつづいたが、一方、古い時代のサンゴ石や自然石の墓もひきつづいて見られた。

ところが、昭和40年代以降、火葬の普及と共に種子島の墓に納骨墓の形式が入り込み、たちまち普及し、今や旧来の角柱石塔群のみの墓地は非常に珍しく、貴重な光景ともなっている。むしろ、現状では町内各大字に一ヵ所ずつこうした昔の墓を文化財指定して永久に残す必要があるのではなかろうか。例えば、広田、山神、松原、下西目、上方の河東家の墓地など。



自然石の石圓い、立石の墓（西之、下西目）



自然石の小石圓いの立石墓（下西目）



黄色い山川石の石塔もまじる墓塔群（平山、広田）



一族ごとの区切られた共同墓地（広田）



セメント製納骨墓には祠堂型の古墓も保存されている（下中）



屋敷近くの新しい納骨墓。土台は納骨室になっていて、何体も納められる（平山、西之町）

南種子町の民具・民俗の写真から（25）

一 民俗芸能①（チクテン，ナギナタ踊り）

種子島は民俗芸能の宝庫であるが、中でも南種子町にもっともたくさん伝承されている。大踊り、中踊り、小踊りなど、幾種類もの芸能が各村落に伝承されている。

踊る場所は、祝宴のときは個人の家や公民館、その他が多いが、秋の願成就祭りの時は、大字や小字の神社や寺の庭であることが多い。南種子町では旧暦9月9日をはじめ秋に踊るのが多い。しかし、盆踊りは新暦8月15日や16日に寺の庭や古石塔の前で踊られる。

写真は、平成5年11月3日、南種子高校体育馆で行われた町内芸能のかずかずである。各村落選り抜きの踊りだけあって、練習がゆきとどき、又服装も昔からの伝統をふまえつつも工夫がこらされていて、実に見ごたえがあり、すばらしかった。県全体の芸能祭にも勝るともおとらぬすぐれた町芸能祭であった。心からなる拍手を送ったしたいである。



チクテン（茎永、上里）



チクテン（茎永、上里）



ナギナタ踊り（平山、浜田）



ナギナタ踊り（平山、浜田）



ナギナタ踊り（平山、浜田）



ナギナタ踊り（平山、浜田）

南種子町の民具・民俗の写真から（26）

— 民俗芸能②（棒踊り、ヤートセー）

南種子町の中踊りや小踊りには、男子だけのもの、女子だけのもの、男女混合のものなど、いろいろある。棒踊りは明治になって薩摩から伝わったもので比較的に新しいが、棒をかついで出場し、相撲甚句を踊る時のように色布を垂らしたり、鬼面の者が出たりする点は、南種子町で新しく加わった要素である。

ヤートセーは近世に伝播した口説歌である。それを歌いながら踊り、又、「ヤートセー、ヤートセー」とはやしながら踊る。楽器は太鼓一つと鉦一つ。又は二つずつ。御縁節は甑島の民謡で、非常にすぐれたメロディを持つ。これは甑島からの移住者の子孫の方々が伝承し、今や種子島芸能の中に数え入れができるようになり、りっぱな芸能になった。



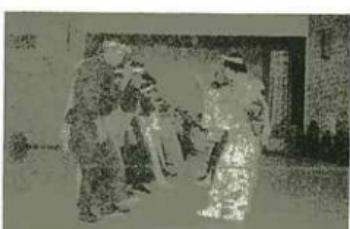
棒踊り（島間、中之町）



道化役で先導役の鬼面も登場（島間、中之町）



ヤートセー（西之、野大野・上瀬田）



御縁節（西之、野大野・上瀬田）



ヤートセー（清左口説、田代）



ヤートセー（清左口説、田代）

南種子町の民具・民俗の写真から（27）

— 民俗芸能③（大踊り、ヤートセー）

大踊りとは、大きな踊りということで、太鼓踊りのことをいう。多い時は数十人が一団となって踊る。踊り子を楽器別に分けると、太鼓、小太鼓、錚^{イシガタ}の3種類。小太鼓と錚の人は花笠をかぶり、黒衣裳を着て、小鼓を前にさげて両バチで打ち鳴らす。

太鼓の人は色じゅんぱんに白ズボン、^{卷脚絆}白ハチマキ等で太鼓を前に吊り、両バチで打ち鳴らす。錚の人は片手で打つ、という静と動のコントラスト。この絶好の対比が、小歌調の歌詞・メロディーとよく溶け合って、見事な美の世界を創り出して見せるのである。島間・上方のサンゴ踊りは完成度の高い、非常にすぐれた民俗芸能である。

平成5年11月2日、門倉岬の御崎神社では、願成就祭りの芸能が次々に奉納された。いずれも見ごたえがあったが、田代、平野、野大野、上瀬田などのヤートセーという口説歌の踊りも大へんよかったです。



大踊りの「サンゴ踊り」(島間, 上方)



大踊りの「サンゴ踊り」(島間, 上方)



ヤートセー（野大野・上瀬田）



ヤートセー（野大野・上瀬田）



ヤートセー



ヤートセー

南種子町の民具・民俗の写真から (28)

一 民俗芸能④ (ヤートセー, 大踊り)

南種子町の一角を通して種子島に定着した瀬島民謡の御縁節の踊りは、独特的な隊形で踊る。

門倉岬の御崎神社と平野の本国寺で踊られた本村・崎原の人たちによる大踊りは、「比翼連理」「関踊り」「綿むれば鳴る」などの歌詞から成るもので、歌詞が違うごとにメロディーも違う。又、振り(動き)も違い、全体の隊形も変化する。「関踊り」は列になっていたがいに攻め合う隊形である。

南種子町の大踊りは、このように、すべてが刻々に変化しながら、舞い、あるいは踊られるという芸能美にみちたものである。見物人をして時を忘れさせ、楽しましてくれるのである。しかも、踊り子自身は、氏神に秋の豊作と平穏を感謝し、来年のことも祈って踊るという美しい心情に包まれて、歓喜と祈りの芸能を展開しているのである。



本国寺での御縁節(西之, 野大野, 上瀬田)



本国寺での御縁節(西之, 野大野, 上瀬田)



本国寺で大踊り「関踊り」(西之, 本村・崎原)



本国寺での大踊り「比翼連理」(西之, 本村・崎原)



本国寺での大踊り(西之, 本村・崎原)



本国寺での大踊り(西之, 本村・崎原)

伝承者名簿（敬称略）（各本文末にも掲載させていただいた）

平成6年3月

上 中

氏 名	住 所	生年月日	氏 名	住 所	生年月日
遠 藤 正 人	本町2223-13	S 5. 3.16	河 野 律 雄	山崎	S23.
岩 坪 安 昌	本町2234-9	M44.10.27	古 市 啓 喜	河内	T 8.
吉 永 早 志	本町2217-2	S 2. 8.25	" 美江子	"	T14
島 間					
松 下 キエ	本町	T 7.	氏 名	住 所	生年月日
有 留 増 芳	河内520	S.18. 4.11	河 東 時 徹	向方	M40.
" ト シ	"	T 5. 1.1	柳 田 駒 則	向方	M37.11.15
関 田 種 秋	焼野1823	T. 5. 4. 1	久保田 光 枝	大久保	T 8. 1.14
" ミ ネ	"	T11. 5.11	西 國 ハツエ	大久保2989	T 9. 6. 1
戸 川 秋 雄	焼野1883	T 7. 2.20	牛 野 新 吉	牛野1470	M39. 8. 1
" リ ツ	"	T14. 4. 1	牛 野 新 助	牛野	
迫 田 ハ ル	焼野		牛 野 春 義	牛野	
善 岡 義 雄	焼野1863	T 7.12. 1	牛 野 春 芳	牛野1482	T 7. 3.15
恒 吉 ミ エ	焼野1857	T13. 5.11	牛 野 時 夫	牛野1476	T15. 3.10
日 高 フジエ	仲西	M36. 2.23	中 川 紀 男	牛野1454-5	S10. 3. 3
里 園 フキエ	"	T13. 8.20	" 恵美子	"	S11. 4. 4
堀之内 駿 男	仲西3048	T 4. 3.20	中 川 ス マ	牛野1454	T 5. 2.20
河 野 泉	西之町3342	T13.10.30	中 川 美保子	"	
" ツ ミ	"	T14.11. 1	石 野 ひかる	牛野	S60.11.12
原 田 シズエ	上野2983	S2. 2.15	長 小 田 岩 夫	島間1479	S11. 3.10
日 高 哲 则	上野	S27.	田 中 竹 千 代	島間	T15.10.20
" トモミ	"	S18. 8.10	小 山	小平山	
大 脳 藤 作	上野2910-3	T 3. 3.18	野久保 キミエ	小平山	S 7. 1. 9
" ト ヨ	"	T12. 3.10	久保田 孝 男	小平山4224	T15. 3.28
外 園 チ カ	上野2810	T 9. 9. 1	" 良 子	"	S 5. 2.15
小 脳 カツヨ	上野2973	S14.10. 1	中 峯 た よ 子	中之上3911	S33. 1.15
田 上 広 喜	大字都172-21	T 9. 9.26	崎 田 善 次	田尾605	T10. 3. 5
" ミ ョ		T 7. 3.10	峯 山 秀 太 郎	田尾269	M39. 6.11
			船 川 文 雄	仲之町	M39. 3.15

伝承者名簿（敬称略）（各本文末にも掲載させていただいた）

平成6年3月

氏名	住所	生年月日	氏名	住所	生年月日	
昌元秀二郎	仲之町	S 5. 4.25	松原三男也	松原	T15.	
山小田キト	仲之町63-2	T 4. 3.10	羽生祐子	上里5562	S 9. 9. 8	
山下秋哉	島間4373-1	T12. 3. 1	有留次男	上里		
浜上義男	島間4555	S 4. 7.30	羽生三郎	上里		
蛟島正孝	島間4184	S 4. 3.25	浦門休作	上里5640	T 8. 6	
茎永			"トキエ	"	T10. 3.30	
氏名	住所	生年月日	田崎アキ	菅原	T 5. 3.25	
柳田チエ	松原3771番地	M42. 3.28	上園繁	茎永4887	S 1. 3.15	
向江秋夫	茎永阿惜経3460	M43. 9.24	"ミチコ	"		
岩下矢八	茎永阿惜経3495	T 3. 4. 1	西之			
"シズエ	"		笛川ちがこ	本村	S 6. 3.21	
雨田新七	雨田4771	M40. 1.11	砂坂実	砂坂	S 7.	
雨田幸男	雨田4731	S18. 4.11	砂坂秋義	砂坂	S 9.	
山下義勇	竹崎3361		砂坂要次郎	砂坂3820	T11. 3.30	
山下和江	竹崎3376		砂坂七藏	砂坂3818	T10.12.21	
山下つる	竹崎3355	T 8. 1. 1	砂坂福丸	砂坂3817-1	S3. 9.20	
山下しほ	竹崎3357	M40. 3.30	日高実雄	田代314番地	T 8. 3.20	
園田辰夫	宇都浦556	T 5. 6.20	"スミエ	"	T10. 7.10	
大崎蘇市	宇都浦502	M45. 3.26	徳永トヨ	田代231番地	T 8. 1.25	
"アキ	"	T 2. 9. 2	蛟島宗典	田代220番地	T11.11.15	
田頭利一	中部974	S 3. 2.20	"エミ子	"	S 5. 3.23	
"ミヤ	"	S 9. 7.25	日高スミヨ	田代443番地	T11. 3.10	
松本敬子	中部874	S 5. 7.28	上妻武靖	田代556番地5	T14. 9.15	
園田キヨ	中之町552	M45. 4.13	日高三男	前之原		
梶原ミツ	中之町5番地	M38. 9. 1	蛟島宗英	前之原5576		
迫田スマ	中之町	T 3. 3. 4	"和子	"	S 2. 1.25	
石堂キヨ	松原3718	T 3. 3.22	大脇助次郎	野尻4610番地	T 5. 3.21	
日高ユキエ	松原3716					
岩坪重秋	松原	T 3.				

伝承者名簿（敬称略）（各本文末にも掲載させていただいた）

平成6年3月

氏名	住所	生年月日	氏名	住所	生年月日
平石 鉄馬	野尻	T14.	徳永 ヒデ	広田 1256	M33. 3.15
〃 静柄	〃	S 3.	向井 正夫	仲之町 1352	T 9.10.30
小脇 忠男	野尻 4589	T15. 1. 1	鮫島 増夫	仲之町 1352	M43. 3.31
小脇 伝	木原	T13. 7. 1	山田 キヨ子	西之町 3453	S 9. 5.25
左尾 栄子	木原 4876-1	S12. 9.29	向井 シヅエ	水牛 3731	T元.11.10
浜田 ルリ	崎原 2527	M44. 2.20	西田 カメ	西之町 4028	M45. 7.19
浜田 藤太郎	崎原 7527	M37. 1.30	西田 洋一郎	西之町 4005	S11. 7.13
小川 親義	本村 8213	T11. 2.16	〃 ムツ子	〃	S 8. 8.15
岩坪 スエ	本村 8396	T 3. 2.20	長田 助義	浜田 531	T12. 3.30
日高 亭二	下西目 6515	T 8. 3.10	長田 トミ子	浜田 777	
西村 いづえ	下西目 6435	S15.12. 3	山野 ノリ	浜田 774	S 4. 3.30
徳永 アキ	下西目 6511-22	T 7. 1.20	長田 俊信	浜田 877-1	S 2. 1.10
日高 静一郎	下西目 6461	M33. 2.25	〃 ヌイ子	〃	S 2. 9. 1
植田 ツカ	平野 1852	M42. 5. 4	平山 イセ	浜田 878	
河野 了	平野	M40.	長田 実	浜田 758	S 2.10. 5
河野 康人	平野	S20.	坂口 武志	浜田 762-1	T 2. 4. 1
日高 房雄	平野 1736	S 8.11.20	西田 正夫	平山 1937-2	
〃 美波子	〃	S 8. 3.20	中畠 ヤス	平山 1833	T11. 7.29
白元 アキ	小田	M43. 9. 8			

平山

氏名	住所	生年月日
向井 義一	広田 2499	S14. 3.30
〃 ようこ	〃	S24. 1. 3
原 キヨ	広田 2453-1	T 3. 3.28
西田 キミ	広田 1449	M41. 4. 3
長田 茂	広田 2486	S 8. 3.31
原 和幸	広田	S 5. 3.24
長田 清治	広田 2489	T14. 3.10
〃 アツ	〃	T 8. 4.10

氏名	住所	生年月日
羽生 繁保	真所	T10.11.10
羽生 繁秋	〃	S27. 9.23
寺内 弥六	里	M35. 7.30
古市 栄	郡原	T元. 9.20
イワ	〃	T 3. 2.20

編集後記

『南種子町の民具』ができました。町ご当局の協力のもと、鹿児島大学法文学部の比較民俗学研究室所属の学生ならびに鹿児島民具学会の方々を中心に調査団を結成して、平成6年に調査したものの報告書です。

民具は有形文化であり、又、物質文化であります。今日、鹿児島には鹿児島民具学会、日本には日本民具学会があって活動し、民具についてさまざまな研究をしています。

南種子町の民具は、どんなものがある、どんな特徴をもっているか、それを多人数で、町内全域を回って調べてみようというのが、今回の調査の出発点であります。しかし、民具といい、有形文化といっても、無形の文化と切り離せないものです。鎌なら鎌、犁なら犁について見ると、形式面も重要であります。その使い方、農業とのかかわり方、島内の歴史的変遷、その種類別の特徴となってくると、もう有形のみでは見切れず、無形の面からも見なければなりません。

そんなわけで、本書は「民具」とはしてあります。無形なわち、より「民俗」的な面から見たものも多いことを申しそえておきます。

本書は、南種子町の特色、方言、農具・運搬具、漁具、牧、鉄、衣・食・住、人生儀礼具、年中行事具、信仰具、遊戯具・民俗芸能、その他から成っています。盛りだくさんですが、実は南種子町の民具はこまかに見るとまだ多いのです。未収録のものもたくさんあると思われます。

さて、南種子町はいくつかの大字から成っていますが、その一つ一つが非常にすぐれた、きわだった特色を持っています。こんな町は全国にもあまりないのでないでしょうか。それをかんたんに申しますと、

1. 島間……屋久島と種子島の間の意味で島間といわれると伝えています。屋久島を指呼の間に望む港町で、上の方

(上方)には古代に起源し、中世に山城として築かれたとされる島間城が今も残っています。

2. 長谷……広い台地で、昔は周辺の諸村落のマキ(牧)があった所。

3. 西海……屋久島をすぐそこに望む景勝の海岸地帯で、塩屋マキの山林を背後に持つたかな海村がづく。

4. 上中(中之上)……古くからいくつかの村落はあったが、明治になって町ができるはじめ、今や大市街地を形成し、役場もここにあります。

5. 下中(中の下)……真所神社、真所村落、郡原、山神、里、市(一)の坪などの古い呼称の地名や村落名が集中し、その由緒の古さを示しています。

6. 西之……西部はかつての塩屋マキがあって、今も製塩にちなむ行事などが残っています。東部は水田地帯で、鹿鳴川の西には一の坪の地名もあり、鉄砲伝来の漂着船がきたのもこの浦でありました。

7. 墓水……種子島一の広い水田を抱え、日本最古の赤米の神稻は今も栽培され、宝満神社のお田の森、宝満の池などがあります。今、宇宙センターがあるのもここです。

8. 平山……日本最古の文字「山」という字を掘り出した広田遺跡はここにあるのです。種子島の芸能は、島内各所に伝わっていますが、ここがもっともさかんです。

以上はほんのさわりの部分だけを述べたものであって、くわしくいうときりがないほどです。これらの特色がすぐれているのは、単に珍しいとかちょっと特色があるというのではなく、その一つ一つが日本文化の根本とかかわり合い、又、日本文化の南限である場合も多い(例えは地名や芸能など)という点が注目されるのです。

南種子町は全町がさながら生きた博物館

です。まさに、フィールド・ミュージアム（野外博物館）そのものです。こうした観点から町内の文化財を整備していくことは大へんたいじなことです。町ご当局によると、柳田町長さんのご指示ですでにそういう方向で手を打たれているともきます。

フィールド・ミュージアムの整備と共に、そのセンターの役割をはたす博物館がどうしても必要でしょう。南種子町は考古出土品もすぐれたものが多く、古代史にかかるものや赤米などのこと、中世史や古い民俗にかかるもの、その他農村や漁村の農具、丸木舟、漁具など、いろいろあります。こうしたものを持ち、ハイテクなどを使った科学的な手法で、展示して見せるりっぱなセンターも必要です。

これから、日本中からやってくると思われる観光客や島内出身者の帰省、全国各地からの小・中・高生の集団の修学旅行、こうした要望にもこたえねばなりません。そして、もっともだいじなことは、博物館は家にたとえると、床の間であるということです。しっかりした床の間があると、心がやすらぎます。町民の心の誇りとしてのすぐれた内容の博物館があれば、若者も故郷を見直し、帰郷する者がふえるにちがいありません。町内の小・中・高生も南種子町の持っている文化のすばらしさを自覚し、愛島、愛町の精神は自然と生まれてくるでしょう。すぐれた博物館の設置が期待されます。

さいごに、調査にあたってお忙しい中にいろいろな民具や民俗を教えて下さった伝承者の方々、案内して下さった方、その他、町内各地で親切にして下さった町民の皆様方に厚く御礼申し上げます。

なお、調査中、いろいろ面倒を見て下さい、親身にして下さった町教育委員会の皆様方、特に社会教育課長の崎田宏さんほか同課の皆さんには大へんお世話になりました。深く感謝申し上げます。有難うございました。
(下野)

南種子町民俗資料調査報告書Ⅱ

『**みなみ た ね ちょう** の 民 具』

平成6年（1994）3月調査
平成7年（1995）3月25日発行

編集 下野 敏見

鹿児島大学法文学部「比較民俗学」研究室内

発行 南種子町教育委員会

鹿児島県熊毛郡南種子町中之上 2793-1
〒891-37 TEL 09972-6-1111

印刷 種子島新生社印刷

鹿児島県西之表市西之表 16516
〒891-31 TEL 09972-2-0476





